

新編大和文苑

以所撰述江表討

新撰歌集

輯金之代記

胃作也

仁德天皇

法同

法同

新編大和文苑

第一冊

912.4 SL 4982

### 新編倭文範發行の趣意

詩の一體人事を咏ずるものは是を「ドラマ」と云ふ。蓋し人は情焰を内に蘊<sup>？</sup>ひを得ざれば其熱するに到つては口に發し或ハ支躰ヲ表はす。所謂聲成文もの「むましをとめ」「むましれとこ」と二柱<sup>ふたはしら</sup>の神の宣ひしも細女<sup>こづめ</sup>猿田彦<sup>さるたひこ</sup>が柔しくも舞ひし岩戸神樂も何れか自然に出でざらんや。時代遠く次第に開けゆゑにつれて詩と舞樂と漸く離隔して今は全く別種に屬するの觀を呈す。唯其間に在つて猶ほ相關係するものは是を演劇と爲そ。脚色の美と樂曲の美と技藝の美とを兼有して全時に心と耳と眼に訴ふ。その能く人を動かすも宜なり、又美術の上乗と云ふも宜なる哉。

我が演劇の發達は實に此二百年にして催馬樂<sup>まはら</sup>の昔はさてをき天正のお國歌舞伎をもて、此技の祖先となせども元祖段十郎元祿年間に譽を四方に馳せしより以來名優連りに輩出して終に今日の盛運を效せり。蓋し戯場に於ける功名は唯俳優が専らにせしものにして其世評の如

何は一に彼等の責任にありしが、各國の進歩と全しく我が演劇界も「ドラマチスト」の助けし處頗る大なりとす。世に具眼者なくして一に俳優の枝量を惜々せしも毫も「ドラマチスト」に月桂冠を與へしものあらざりき。

我が「ドラマチスト」に二種あり一を狂言作者と云ひ一を淨瑠璃作者と云ふ。狂言作者は芝居に附隨せる所謂梨園シテ、カゲラ、ラマチスト曲家なるものにして脚色を重んじ、淨瑠璃作者は竹本豊竹等義太夫筋なるものゝ爲め潜心せしあれば多少音律に縛せられしの傾向ありぬ。然れども淨瑠璃も太夫の三味線に合唱するの目的のみならず是を人形芝居に演せしあれば其關係せし處中々に淺からず。音律に縛せられしの際多少ありて其躰裁を異にせるか故に、外形を見て論ぜるもの往々歐洲の「ドラマ」と異なれりと爲せども、其精神に到つては毫も相違の點を見ず。唯世間の好尚と作家の觀念の度を異にして日本にギョーテ、モリエルを出さざるも

又ブーシキン、ブラウニングを見ざるも豈に是を以て「ドラマ」なしとせざるを得んや。巢林子出雲海音半二宗輔等皆是れ非常の天資絶代の文藻を蓄へしもの縦令沙翁の「萬心」に及ばざりしも又以て尋常の文筆家と同視すべきにあらず。演劇の發達實に此數作家の功大なりと云ふべし。夫の狂言作者は畢竟梨園の進歩に連れて便宜上生せしものなるが故に、常に俳優の奴隸と爲りその命ずる處に據りて脚色を作るの傾向ありしなれば、奇骨あるの士は大抵其下に在るを甘んせず、偶々天稟の才能ありて塵を其中に避くるも流弊に縛せられて其文字を擅にするを得ざりき。されば近代に一の並木五瓶又は一の鶴屋南北ありと雖も、他は皆碌々たる庸人終に其作を今日の文學に残す者あり。然るに淨瑠璃作者は是に反して清兵衛の金平以來巢林子も海音も人形芝居の爲め作本せしなれど、人形は客にして淨瑠璃主位に在れば、多少の箝制は勿論免れざりしも、狂言作者に比すれば範圍も廣く束縛も少かりき。況ん

や巢林子の如き千載不思議の大才人其壇上に立つて是が先驅を爲せしなれば志を不自由なる門閥的文學に得ざるの人士跡を其間に輻晦して縦横に才思を逞ふし終に沈痛酷薄なる希代の不平家平賀源内をも羅するに到れり。出雲半二海音宗輔等素よ叻藤樹の徳なく徂徠の學あく白石が見あく蕃山の能なしといへども當時の幼稚ある文學界に立つて僅かみれ伽草子が社會に重んぜられし中又此錯綜せる人事を咏ず。彼等徳も學も見も能もなしとするも豈に其功績を歿するを得んや。彼等徳なきにあらず學なきにあらず見なきにあらず能なきにあらず唯藤樹徂徠白石蕃山等と其志す處を異にせるのみ。

むかし何事も門閥の臭味ありて唯皮相の見のみを逞ふせし故に狂言作者若くは淨瑠理作者とだに曰へば他の戯作者と全しく卑賤陋劣なる賣文郎と一唱せられたりき。然れどもスエークスピーヤもゴウルドスミツスもシエリダンもジョンソン(ペン)も又賣文郎なりしなれば

此一事以て抹殺せらるべきにあらず。彼等其志ありしにあらざるも社會の人事複雑せる現象を吾人に其まゝ直覺せしめし功は徒らに花に月に我面白の詩歌俳諧を咏みて悠々自適せる似而非文學家の比ならんや。

淨瑠理を難するもの曰く淨瑠理は妄誕不稽を吐くを常とす。是れ或は時代的淨瑠理の往々正史に背ふを責むるならんが、歴史と院本と其目的を異にせる故に恰も院本を標準として歴史を難するを得ざるが如く正史に違へりとして舌を鼓して責むるを得ざるなり。又或人は曰く正史に違へるが院本の面白き所以ありと。是れまた孟浪なる評言頗る怪むべし。淨瑠理の目的は正史に合せんとし或は反せんとするにあらず。作家の着眼自ら他に在るあり、左るを似而非物識共嗚呼なる評言を逞ふして淨瑠理を傷けんとす、作者の迷惑そも如何ばかりぞ。然れども前に述べし如く人形芝居の爲め作りしものなるが故に往々

無理ある脚色を案せし事少からず。就中時代物に到つては猛將策士毫も猛將策士の質を供へせしめて女らしき愚痴を覆し子供らしき大言を吐き殆んど茶番狂言染たる事を演じ更に英豪の實あきが如し。此故にやゝ批評眼あるの士は痛く此一點を以て淨瑠理作者を退くれと畢竟能く疵瑕を發見して崑山の壁なるを忘るゝの言なり。我等も又天下の大權を掌握し一盼顧能く虎將を戰栗せしむるの豊太閤が左次郎茶目吉を真似て元の足輕藤吉郎と姿を更ふるの頗る奇妙なるに感ずるものにあらず。又主人の娘と忍びくゝの轉び寢に無分別の死を逐げし若衆頭の久松が武家の胤にて寶刀探索の爲め町人奉公せし事の極めて巧みなるに服するものにあらず。唯是等の短處を厳しく批判して其最も精密に人情の微を穿ちて能く運命の果敢なきを直覺せしむる無双の才藻を埋歿するに忍びざるなり。

曲亭馬琴の小説界に於て大名を賣りしをもて、少しく文字を解するの

人の盛んに其妙を嗜々せれども、若し枝葉に渡れる節々を論せし中々に常理をもて判せべからざる變幻怪奇に富めり。秋之七草、旬傳實々記、俠客傳、美少年錄等結構の不可思議なる、巧妙と云へば巧妙なれども到底「バベル」の建塔時代にあらずんば求むべからざる因縁流轉なり。ざるを曲亭の筆に感服するもの一人も此變奇なる結構を難せざるのみか甚だしきは荐りに賛歎して却て其妙を稱す。然るに他の淨瑠理に對してはまゝ結構を喋々議する者其見の狭きや嗤ふべし。我等もほゞ曲亭の能に服す。豈に個一些事を以て彼が千金購ふべからざるの長所を没し去らんや。又全むく一病弊を以て殆んど匹儔なき淨瑠理の穿細文字を退くるの大決心を起すを得んや。

又一方より云へば、各國の進歩と全むく我國もろの初め遠くは源氏物語の如き、或は近く西鶴の諸作の如た稀に社會の實相を其まゝ摸範せし所謂自然派に類せしもあれど、一般の發達は陳大より細密に荒唐よ

り極實ふ移るを常とすれば、勢ひ結構主義に趨るハ數の免かれざる處あり。況んや幼稚なる好尚に媚びるの**人形芝居**に縛られしなれば是非なくも太閤をして茶番を演せしめ久松をして寶物策議の一武家たらしめしなり。而して綾足秋成をはじめ京傳馬琴種彦等盡く此意匠を視つて以て自家の案上に置かざるはなし。是を結構主義と難するもの、畢竟我等が今日に於て容易に難じ得るの言にして、我が小説の進歩を助けしもの淨瑠理の功なりと云ふも諛言にあらざるなり。

我等素より深く淨瑠理を味ひしものにあらず。又能く其微を伺視するの批評腦を畜ふるものにあらず。此故に種積以貫を學んで一々穿細的に評註して世に紹介するの能なく又潛越にも以貫流の評註を施すは現代に於て却て無益に屬するを信ず。さればとて文運次第に萌へ出るの今日空しく篋底に此金玉文字を埋むるの頗る惜むべきを慨し、六十有餘篇の傑作を刻して、我國の好「**ドラマ**」を示さんとする。熟考ふるに四

五年來の文運益進歩して四方透徹の眼光あるの士多し、今に於て徒らに演劇改良を説くも風俗好尚を異にせる歐洲戯曲を其儘に移植しおたきを如何せむ。若し有識の士能く從來の院本を披閱して其短を去り其長を採らは豈に遠くラシンヌ、ドライデンを備ひ來るの勞を取らざるも、出雲の一齣海音の一節又以て革新の實を成すに足らむ。

我等曾て聞く諸君の美は彙の下に隠る、珠玉の如く凡庸の徒輕卒にも彙に隠れして終に珠玉の隠るゝを知らずト。淨瑠理を難むる者我等既に識なきを知りぬ。疑ふらくは以貫亞流も又た齣に噴歎せし者にあらざるか。我等薄識淺學能く是を斷ずるの見なし。世のハズリット、コルレッヂ若くはレッシングをもて任ずるの活眼者請ふ我等の微哀を愍んで深考熟慮を惠まれんには幸甚。

戯曲論現はれんとするの年

發行者 識

凡 例

- 一 本書は毎月一回十二回をもて大尾と爲す。
- 一 編中集むる處紀海音竹田出雲以下十數人凡う大名を場の内外に馳せしもの貞享元祿の古きより天明寛政の新らしきに到るまで盡く網羅せんとす。但し刊行流布せる院本數百卷の多きに及べば僅かに六十有餘卷を精選するも猶ほ大作の洩れたるものあらむ。他日再び補ふ處あるべし。
- 一 原本概ね假名より成り頗る讀みにくきの不便あるをもて代ふるに漢字を以てする處多し又誤謬の嫌ある處多かれを暫らく原文のまゝを存じて他日の正確なる校訂を俟つ
- 一 近松巢林子の作ハ別に近松叢書として從來刊行する處なれば是を除く。
- 一 金平淨瑠璃土佐淨瑠璃の類世に流布する事極めて少きものまゝ



凡例

一 挿入して考古の資料に供せんとす。

一 作者の小傳は毎巻の初めに添ふると雖、頗る孟浪杜撰を極めたるは、發行者迂鹵淺學の效す處なり。追て有識の士に質して淨瑠璃作者考を著し、以て其罪を謝せんとす。江湖幸に其妄を憐れめ。

五月 日

發行者 識

### 新編大和文範第一冊目錄

#### ○御所櫻堀川夜討

文耕堂三好松洛合作  
元文二年正月興行  
百五十六年前

第一 一

第二 一四

第三 三六

第四 道行伊勢土産 五六

第五 七五

花扇郎の枕 七七

#### ○新板歌祭文

近松半二作  
安永九年九月興行  
百十三年前

座摩社の段 一

野崎村の段 一三

長町の段 三三

油屋の段

#### ○鎌倉三代記

紀海音作  
享保三年四月興行  
百七十五年前

第一 一

忠臣しるし揃へ 一〇

第二 一三

第三 二五

鳥追大黒舞 二五

第四 若狭局道行 三六

迷ひの姿繪 四三

第五 四六

#### ○男作五鴈金

竹田出雲作  
寛保二年七月興行  
百五十一年前

一

江戸染井植木屋の段	一
江戸本町呉服屋の段	一〇
天満砂原兵法の段	二六
安治川芝居足揃の段	三八
越後町局炭火の段	四九
阿波座堀紺屋の段	五九
道行ゆめの通ひ路	七五
新町捕物の段	七七
○仁徳天皇萬年車	一
<small>錦文流作 正徳三年七月興行 百八十年前</small>	
第一	一
第二	一四
第三	二四
第四 皇后道行	四〇

女醒々	四一
第五	五一
蓬萊山	五四
○金平法問評	一
<small>作者未詳 貞享二年以前興行 二百八年以上前</small>	
第一	一
第二	八
第三	一五
第四	二三
柏の前道行	二五
第五	二九
目録終	

文耕堂松田和吉

淨瑠璃作者四天王の一人と呼ばれ筋立頓作の高才ありと云ふ大坂竹本座にて近松門左衛門の後に立たる作者なるべし南水漫遊及戯財録には千前軒門人に見ゆれ共聲曲類纂によれば竹田出雲は享保八年二月始めて松田和吉と共に大塔宮曠鏡を作りて近松門左衛門添刪すとあり又文耕堂は享保七年九月佛御前扇車を作り近松門左衛門添刪せり又同書に正徳三年正月河内國姥が火を作ると記せり然れハ千前軒より九ヶ年前既に著作あるがごとし其傳詳ならず

文耕堂著作目録 書名ノ下ニ記シタル名ハ合作者ナリ

○河内國姥が火	近松添刪	正徳三年正月
○祇女 佛御前扇車	出雲	享保七年九月
○大平記 大塔宮 曠鏡	出雲	同 八年二月
○三浦大助紅梅	千四	同十五年二月
○信州 姨捨山	千四	同 年八月
○須磨都源平 躑躅	千四	享保十五年十一月
○鬼一法眼 三畧卷	千四	同十六年九月
○大平記 車返合 戦櫻	千四	同十八年四月

○松山元日金年越	同	年十一月
○應神天皇八白幡	同	十九年二月
○甲賀三郎窟物語	同	二十年九月
○赤松圓心縁陣幕	同	廿一年二月
○敵討鑑禮錦	同	年五月
○猿丸太夫鹿卷筆	同	年十月
○御所櫻堀川夜討	元文	二年正月
○行平磯馴松	同	三年正月
○小栗判官車街道	同	年八月
○平假名盛衰記	同	四年四月
○今川本領猫魔館	同	五年四月
○將門冠合戦	同	年七月
○伊豆院宣源氏鑑	同	六年正月
○新薄雪物語	寛保	元年五月
出雲		
正藏松洛洛		
松洛		
松洛		
松洛		
松洛可啓小出雲千前軒		
松洛可啓小出雲千前軒		
松洛可啓小出雲千前軒		
松洛可啓小出雲千前軒		
松洛半平小出雲		
松洛半平小出雲		

以上露曲類纂ニ由ル

御所櫻堀川夜討

作者 文 三好松洛 耕 堂

恩はるの如く威はどらの如く。教は父の如く愛は母の如し。但諺を謠ひししみの詞。今此時にあたる哉。六十余州の總追捕使右大將賴朝卿。仇を討こと越上一點の雪の如く。流れを絶たず氏の再興。世は動きなき鎌倉御所威權四海に義形せり。されば兄に宜しく弟によるうして。國民を教ゆといふ。御舎弟九郎判官義經を都の守護として。堀川御所を敬ひて連理の枝の御榮。民百姓に至る迄祝ひを述る斗なり。天運命は勇者にも其身を知らず。梶原が讒言にて評議下さるべしと。召み依て在鎌倉の諸大名。問注所の廣庇に相詰れば。賴朝仰出さることは。詞 扱ひ義經色に濁れ酒に長じ。禁裡の勤を怠り我儘の行跡。剩さへ平の時忠の鐘に押成。平家の連判状。賴朝見やうず鎌倉へ下せと再三云やれ共。兎角事によせ隠し置心底。景時が申すに違はず一定反逆に極つたり。所存あれハ名を指て誰參れと下知はせず。覺あらん者討手に上り。義經が首取て。高名せよ恩賞せんとの玉へ共。恐ろしく摩利支天の再來といふ判官殿の御討手。我々が力に及ばずと目を見合する斗にて。誰上らんと云人なし。堪へかねて梶原平三

御所櫻堀川夜討

景時進み出。詞 か様の時の御役に立られん爲。身に過たる莫大の所領を賜はり乍ら。名を指て誰參れと御誑なきは。恐れ乍らいか成御所存。お受申さぬかたへ一々見知り置く。此叛報の時節待れよと白眼廻し。詞 ヤア人迄もなし平次景高。汝討手に罷上り御心をやすめ奉れ畏つて領承す。末座に候ひし澁谷の土佐坊昌俊なむ三寶。きやつを討手に上せては。義經公の御大事と分別し。詞 御訴訟くと聲を掛。御座に向ひ御兄弟の御中と申。歴々さへ口を黙ぎ給ふに。我等しきの御討手と申すの懼りながら某罷上り御首を給らん。去ながら事おたら敷中とるれ共木曾の強敵。平家の大軍を一時に攻亡し給ひし。君の武威全き故とはやせども。一ツの義經公御身を捨ての御働らき。酒宴遊興に溺れ給ふ。實に御年若き故より御諫言をくわへ給ひ。直らせ給ひで候べきか。又平の時忠の舞にあし成給ふ事。尤彼時忠平家の何某との中せ共。降参を聞受命を助け置るこ上は。娘を召る程の事いさして御誤ともやされ。誠中平家一味の連判状と。いはせも立平三景時。ヤア詞多し昌俊判官殿の反逆事極つて評証の上仰付らる討手。御邊は何と聞。其咎を認めるに。和殿風情は頼まざと一口に言消。詞 威丈高に成是梶原殿。其評証の衆に誰々。其人こそ心得ぬ。斯いふ昌俊は金丸の昔しより。累

代源氏の御家人。詞 鎌倉殿も主。判官殿も主。主命に依つて主の討手大抵で向ひるべきか。其詞で知た。遙々都へ上つても誠らし言分を聞かば。首を賜はる迄もなく素手振つて歸るは知たと。いやた討手は景高に仰付らるべしと。遮つてやせ膝立直。詞 ならぬと。昌俊の望かつては頂の觸骨に成ても。余人は上さぬ義經の御首は此昌俊が賜はる。和殿呪と取べきか。諄言くハア、天晴の忠臣。然らば君の心をやすむる爲。一紙の起證文違背は有まい。ヤア景高君に代つて文言を望むべし。誰か有熊野の午王硯を昌俊に參らせよと。延引あらぬ手詰に成。よし。誓紙の書とて神の非禮を受賜はず。我一命を忠義にかへ都に上つて。義經の御爲あしく計の計と。ちつとも辭退の色目なく。景高が望むに任せ筆おつ取て。さらくと一紙の起請斯ばかり。謹んで申す起請文のと。上は梵天帝釋四天王閻魔法王五道の冥官泰山府君。下界の地に伊勢天照太神を始め奉り。伊豆箱根富士淺間熊野三所金峯山。鎌倉の鎮守鶴ヶ岡の正八幡大菩薩。氷川鳥越根津權現。物じて日本の大小の神祇冥道正詞れどろかし奉つる。とには氏の神まつたく昌俊討手に上り義經の御首を賜らすんば。骸を堀川の御所に埋み二度鎌倉へかへるべからず。此事偽有に於て。此誓言の御罰を蒙り。來世阿鼻大地

獄に墮罪せられんもの也。依て起請文かくの如し文治元年今日昌俊と。筆を揮ふて書たるは身の毛も戦立計りなり。頼朝御機嫌斜めならぞ。頼もしき土佐坊の心底たとへ都の土となるとも。子々孫々の末迄も。所領を興へ聊疎略有まじ。平次景高も一所に上り心を合せ。義經に出合二ヶ條の非義を糺し。落度に極らば夢々いたはるべからず。斯くいには人々の我を情なしとや思ふらん。反逆野心あるもの兄弟とても赦さずと。我より手本を見りして下方民に教ゆる事。源氏の威光長久のしるしぞかし。時日を移さず打立べしと。沙汰こまやかに御詮有廉中に入給ふ。治極つて亂に入亂極つて動きなき。賑はふ民の鎌倉山。峯に立木や這ふ草も隨ひ靡かぬ「方もなし。鎌倉殿の詮意を受直にうち立土佐坊昌俊。梶原平次景高上使の威勢嵩高に。路次の行列美を盡し夜を日に繼で。東海道伊勢路も跡に水口や。石部の宿の本陣に泊。賑はふ勝手の混雑料理せしらへ炬板の。音もてき亭主が馳走。手を盡してぞ饗應ける。相役と云心隔てぬ昌俊景高。家來番場ばんばの忠太諸共打くつるいで奥座敷。疲をはらす折あそわれ。取次の侍罷出。平の時忠様家來くわんざ嶋藏人を召連られ。密かみ逢逢あされたき旨通し申さんやと伺へ。昌俊聞て眉を皺め。詞是と景高。此度我君判官殿に御答めは則時忠父子の義成に其時

忠是へ参られしと不審し。サ、不審尤。彼時忠郷との某豫て懇意の中。折入て頼む子細先達てあらま一や遣せ共。出合は幸貴殿にも引合せ。打よつ内談せん。それ一忠太案内せよ。是へ通せと云に隨ひ立て行。伶俐き昌俊詞の端々聞取て。詞ホ、ウ何か知らず内談とあれは聞内。然し旅疲か何とやら頻りに心地悪しけれ。座に列なると思ひもよら。貴殿が様子を聞かれば某が逢ふたも同然。無禮ながら病氣のと御用捨れ。須臾次にて養生せん。委細の後刻承はらんと。障子押明入にけり。忠太の案内に打連て。時忠主従静くと席に着。詞先達て書狀に云越る趣。他聞を憚る密事なれば。上着なき内篤と内談いたさん爲参つたりとの給へ。是一御苦勞千萬。此度鎌倉殿の御疑。誠判官に別心なく預り置れし廻文を差上。貴卿御父子の首打て渡されよとの御詮。某承りると雖も。疎略にならぬ貴卿の御事。御命に恙なき様と存る某が一ト分別。義經が手に有彼廻文密に奪取て給はらは。夫を越度に賣付て義經に腹切せ貴卿父子の御命は。此梶原の受合て助くる所存と教唆し掛れ。詞ホ、ウそれこそ手前が願ふ處。義經が滅亡せ。日頃某が心を掛る翻も自然と手に入る道理。召連し此嶋島藏人は忍びの名人。主従心を合す程なら。廻文は愚か龍の腮の玉なり共。奪取て渡すべしと。

顔と額を摺合斗密々咄し。障子の障間に昌俊の見る共聞く共知らばまを。梶原主従あほ摺寄し  
 然し大切なる廻文。中々輒く奪はれまじし。但手掛り手立も有や。ナ、其義はちつ共氣遣  
 遊ばさるゝな。案内知つたる此藏人。盗出すは明六日の丑みつ頃。御所の高堀見越の松を目印  
 に忍んで待れよ忠太殿。合圖の詞はこつちから番といひ。ヲ、合點忠と答て受取らん。それ  
 よしと互に領つきあふみ路や。深き謀計の湖も洩すなぬかるる。同道するもあふな物時忠  
 卿はお先へござれ。こつちは瀬田へ廻り道。必ぞ見ぬ顔知らぬ顔。けどられぬやう合點かど。  
 互の契約釘鎖念にねつぎの石部の宿別れてこそは三重「かわる世や昔は平家の小舅君。今は  
 源氏の大将を聳に取たる身の威勢。平の朝臣時忠卿。譜代の家の子鮫島藏人秀氏一人召連て。  
 巧も深き堀川の天下馬先に差掛り。詞 ヤアく藏人。先約の如く梶原の郎黨番場の忠太が来り  
 なべ。日頃の大望必ス今宵は過されず。手筈を違なけとられな主従耳語領づき合。御門外に立  
 寄て。詞 判官殿へ火急に申入べき子細有。平の時忠推參と云入れば。門番の待飛でお。り。  
 貫抜戸扉ぐわつたりひしめき海老錠の。腰折屈め出向ひ。詞 夜深の御出何共中かね候へ共。  
 折悪き主人の他行と。聞も政ゼイヤサ皆迄マヌな。聳義經某か娘卿の君は。懷姙せしとて此方

へ戻し置。毎日毎晩九條の里に遊興と聞。異見の爲に來りたれば假令明日迄相待共。對面せず  
 んば有べからずと。鮫島諸共入給へば跡は御門もめやかに。柏子木の音いちはやく深行空の  
 影さへて。衆星北にたんとくし明方近き。白壁にうつる姿は影法師か。それかあらぬか見上る  
 計の大男。頭も足も眞黒に包む人目の咳拂ひ。合圖と思しく築地の上に鮫島藏人現れ出。番と  
 一聲呼掛けバ忠と答ふる相詞。詞 扱ひ番場の忠太殿か。刻限違ず能ぞお出。首尾よふ廻文盗み  
 出したれ渡し申すと一卷を。包む服紗の錦さへ聞ハ綾なや危うき思ひ。受取歸る向ふをり同出  
 立の黒装束にて。又によつまりと出來り。番と云へども以前の忍び忠とも答へず摺抜るを。扱  
 まそ曲者ござんなれと道を遮り扱打に。弓手の肩先斬れ乍らかい潜り。扱身を捻捨逆行を後抱  
 にしつかと組バ。藏人隙さざひらりと飛おり敵か味方が闇さは暗し。後に來りし侍の兩足かい  
 てのめらせバ。命冥加な手負の忍び廻文大事と逆て行く。跡にハ兩人組合捻合。四ツ手に成て。  
 互の頭巾と頬冠に一度に手を掛引手操て顔見合せ。詞 エ、イ辯人か。ヤア忠太かこりやどふじ  
 やど。興を鮫島うるたへ廻れバイヤサ是。詞 盗取た廻文はナ、何と。問ふも語るも氣は焦立  
 サ、されバ。詞 紛れ者の心ハ付ず。今の奴にエ誑られたか無念。程は行まじ追掛んと二人

連行取なり。阿采鳥のかあ〜と夜は明。渡る三重「懸」をする身はいよだてらじや。面白無  
垢に染小袖裾吹返す朝風に。もまれもまるゝ萩の露。詞 コレ静。廓と違ふて四角四面な屋敷の  
内て。あの風流な歌と三味。てんと堪らぬ道中姿可愛らしいと抱付給へ。詞 ナ、しんき御所  
の女中方の見さんして。我君を手に入自慢と思はんす所も氣の毒と。ひんと駿河の次郎がひ  
つ取。詞 イヤヤシお氣遣なされますな。卿の君様は御懐妊故お里歸り。そこでお前を根引にし  
て今日のお屋形入。遣手禿も連れられぬぐ一趣向はやお忘れなされしかと。心を付ればナツト誤  
つた。今日某遣手のれよし。つねとはちがふて。小袂かい取ちよこ〜と。詞 申し太夫さ  
んゑ。ナ、それでこそ遣手じや。扱是から拙者先が禿の役を仕る。眠らぬを取へに嵩高なり了  
簡あれと。云ハ静も可笑に禿の囁の物言が第一。こいよ。ナアイもふそれが禿であいと打込れ  
て。ホンニそふじや。詞 奴の返事を取違へた。ヤア〜女房達静様の花のお入お盃を持參あれ  
ど。呼れ廓に品替り嶋田并冠長な女中方。銚子鳥塞取揃へ御前に出。詞 御舅時忠様夜前より  
御出有てお待かね。御對面もやと伺へは。ム、それで聞へた。最前の一節も時忠殿を汝等が慰  
めよな。我等に逢度と。廊通ひを止にせよと例の異見うるさしく。ナフ静此程の揚屋〜

の暇乞に。全盛の大酒盛。そこをどんど氣を替て。あの堅苦しい腰元共を相手にするも面白か  
ろ。呑で酌や〜禿上早ふ酌をせい。アイト返事も長柄のやくをするこの次郎。君が仰せにつ  
ぎかくる。玉の卮底意なき。御酒宴中ハに廣間より源八兵衛の尉廣綱。御見參と披露して切腹  
したる武士の死骸。戸板に載て庭上にかき居させ。詞 今日某御所の御番に相當り。早天より出  
仕致しゆ處。昨晚の御留守預り鎌田藤次。政常あの如し自殺仕る様子は此書置に明白たりと。  
一通を差上れば繰返〜。披見有より忽ち怒の御顔せ。飛か〜つて静を捻伏。詞 ヤイ女先。  
己れ鎌田の藤次と忍び契りしな。今日の館入を無念に思ひあの通りに腹切て。書置に不義の段  
を願したるは汝への面當斯る後めたきを隠し〜天罰の程覺よと。長柄をおつ取。か弱き脊骨  
をてう〜。銚子の酒よ身はひつたり花を粧ふ衣紋も亂れ。わつと涙に咽びしが。エ、お  
情ない氣の廻り。そもや君の目を抜て悪性しそふな静じやと。思し給ふかきよくもなや。身の  
云分は有なごら證據になる相手は切腹。何を云とも死人に文言不義徒の名を取て。先立命は厭  
はねども。老たる母の磯の禪師。兄さんは有乍ら親に不孝な生れ付。妾が死だ其跡でいさぞ母  
さんの便なかる。未來の迷は是一つお兩人の衆なせに止て下さんす。いつそ君の御手に掛殺し

てたべと斗にて。恨み聊言て嘆きける。ナ、望の通り鎌田が冥途の供させんと。自洲へはつしと嘸落し給ひ。駿河の次郎あれ斗らへと有ければ。源八兵衛憚りなを。詞コハ御短慮なる御仰せ。流の女の偽表裏は天下晴たれ定り。それを何かと御遺恨に思召は。智勇兼備の名將に似合ぬ。御心が狭い。殺さず痛ずめの儘に捨置て死骸の番をさするのが能成敗。皆々引と人を避先御入と諫むれば。静は堪かねコレのお中と立寄を。駿河隔てて何處へ。詞もふ泣言は叶はぬ。我君に見放されて身のたてらうならざば。近々に五條の橋へ来たのよ。千人切の時お手には掛りし者の由縁へ御施行の有筈。其役目は此清重。こなたも君のれ手は掛つた人なれば。千人切の施行の人数に入て。施しのね銀いたうかせふと。悪口たらう主従打連奥に入。跡に静は唯獨涙に暮居たりしが。藤次が死骸の一腰。れつ取既に自害と見へける後よ。ヤレ待とかけ出るは時忠卿。むだ死するかと押止められ。詞むだ死とはきよくもない何と是が生て居られふ。止すと死して下さんせと振放すを猶抱止。詞最前よりの始終物陰にて篤と聞た。天晴汝は女も稀成心中者其心底を見る上は。何をか隠さん。元來卿の君を義經に娶せしは。餌に飼ふて肌をゆるさする一つの手立。今死ぬる命を存らへ。豫々口説此時忠にはなせ隨は

ぬ。命取めとかなだれ給へば。詞エ、イそんあらお前は。義經公を殺すれ心か。ア、音高。人や聞くと前後を見廻し給ふ所へ。とつた。と捕手の役人十手打振れつ取巻。上段の御簾とつと巻上。九郎判官義經公有しに變る御出立裝束改め。源八兵衛廣綱駿河の次郎清重左右の黨と隨ふにぞ。飛龍の氣を呑む彦大将。ゆう。と床机になをらせ給ひ。詞ヤア静。覺なき身の暫時が間も不義者と云れ。さぞ愛苦思ひつらん。期斗ひしは時忠の悪逆を顯はさん爲。罷立て休足すべしとの給へば。扱はと悦び静彦前。袖は涙に濡衣の面目涙ぎ入にける。詞ヤア時忠殿。卿の君を餌に此義經に肌をゆるさせしとの給ふ。こなたは又静と云餌に掛り。謀まれし謀叛を見透され。さぞ本意なと思すらんと。仰るあへぬに。時忠卿から。と打笑ひ。詞扱は斯るぎやう。敷有様は。静に戯れしと共を聞はつての疑ひよな。それ式の義を取上て謀叛とは近頃疎忽。イヤ此期に及んで言拔んとは未練の一言。昨夜平家の廻文を盗まれ。中分の爲に腹切た鎌田の藤次を。静と不義の体にもてあしたも。其元の企み見出そふ爲の偽。廻文の行儀もこなたの胸に覺の有ふ。然ども此詮義ハ所存有て容捨致す。差當つて謀叛でないどの申開き。承はらんと席を打ての給へば。イヤサ先達て娘卿の君を遣し置た。某に二心のない



能證據と辨解給へば源入兵衛。詞 然らば最前の謀計に乗られ。義經公を亡ぼさんとありしは如何に。イヤろればサアなんと。問掛らきてホ、それこそは能糺明静を我が手に入判官と娘ら中を睦じくあらせん爲に。戀路の闇と見せかけて。誠は子故の闇なるぞや。詞 ヤア戀路でも子故でも。闇盡の云分暗い。云に氣早き駿河の次郎。最早詮義には及ばぬ叛逆に極はた。アレ撈めよと下知すれバ又バら。と詰寄を。ヤア早まるなど判官捕手を制し玉ひ。斯論争の上からは。招置たる訴人を是へ呼出せばや疾々との命に應じて源入兵衛廣綱が伴ひ來るは時忠の汚臺所。豫て覺期の心にも。變る浮世の數々に思ひ惱み立玉ふ。時忠見るよりくわつと急上。詞 エ、悪くき女め。夫の訴人能したなど。云せも果す義經公。詞 ヤア其一言の謀叛の證據駿河源入。承はると双方より捕たと覺るを。汚臺の目も暮氣も狂乱の如くにて。其細目の悲しさに幾度か。妾が止めし異見諫も用ひなく。過去し平家の一門。非道奢の天の責にて亡びしとは氣も付ぞ。仇よ敵と敵おは智の判官殿。連添娘が難義と成も願みぬ謀叛の企。あろかあ女の思案より訴人して。其訴人の恩賞に夫の命助けてと。詞を番ひし甲斐もなぞ此細目の何事ぞや。殺さで叶はぬ道ならバ自からを代に立つれ合を許してなふ判官殿と前後不覺に嘆かる

れバ。時忠卿も今更には身の惡事の數々を思ひ白州に差俯むき面目涙に暮給ふ。大將須與涉答辭もなかりし。詞 チ、女氣の一圖に恨らるゝは去とながら。今鎌倉には梶原有て。動もすれバ讒言を構ゆる時節。聲員の好み有ゆへ結局容捨成難く。繩掛させたは政道の一條。契約の通り訴人の切に命を助け。能登の國すの岬へ流し遣すべし。はや疾々引立よとの汚誕に隨ひ警固殿しく左右を圍み配所をさして追立行。汚臺は有にもわられぬ風情いか成沖つ島守共ならバなれ。夫婦諸共やつたべと急入。口説るれば。義經公聞召。抑流罪の法は黃帝の汚代に始つてより。妻子を相添流したる先例なければ。鎌倉への聞へかた。以て叶わぬ願ひ。悼はしなから汚臺は此方へ伴ふべしと籠中さして入給ふ。斯と聞より鮫島藏人秀氏。一味の惡黨隨へて馳來り。詞 ヤア。駿河源入兵衛。何もかも皆聞た。主人時忠の無念を晴せん其爲に向ふたり。覺期ひろげと呼べるにぞ。ヤア時忠卿に謀叛を勧めしれやつぶの鮫島め。束の間も許しは置ぬと。二人は夜刃の荒たる如々。猛勢一度に切てかゝるを事どもせず。弓手馬手へ確立し追まくれバ。云甲斐なくも駿島藏人逃迷ふてうろつく處へ。駿河源入一さんに馳付て弱腰ばんと踏のめし。詞 胡奴が襟あへろ。侍刀で殺すは大人氣なし。鮫島なれば片身つくと兩足

左右へ引張て。ヤア悉い／＼の掛聲にて。さら／＼と引裂捨。かつ色見する梅の間松の間柳の間。涉殿／＼をかり立／＼。此は處も櫻の間。緋櫻散して彼岸櫻のちり／＼ばつと。逃散る敵の大櫻單櫻榊淺黄天狗櫻や虎の尾の。勢有明月花の都の外迄も二人が武勇の譽は高き山櫻。枝をならさぬ源氏の代。浪しづかなる堀川の所所の櫻を盛んなる

第二

施は寶と法と無爲の三ッ權者の詞盛なる哉。九郎判官義經未だ牛若たりし時。五條の橋の千人切と。世の取沙汰も年月も早十三年。千人供養遂べしと橋詰に假屋を打せ。幕の中には駿河の次郎清重。切れし者の月日刻限日なみの控ふ引合せ。は施行をひかるべしと高札を立けれ。洛中洛外の町人百姓聞傳へて。己も切れた彼も切れたと毎日五人十人づつ。疵云立にさ。はらを橋詰みこそ爪掛たり。斯處へ源八兵衛廣綱。は廟參の序なられ見舞やスと假屋に通れ。是は／＼廣綱殿。詞今日はかうの殿の命日。は菩提處へ御代參かさを苦勞いや／＼何の苦勞。誰有ふ義朝公の御命日。源氏の祿を食ふ者。月々の三日は廟參せでは叶ぬ。しては自分への役目の千人供養は。然／＼。日を追て漸々と人数の都合も今少し。あれへ詰たる三四

人で九百九十九人。さりとて我君若年の時なれども。僧正坊に習ひ給ふ劔術の手鏡さ。いつかな／＼刃向奴もないと見へて。毎日／＼來人に手疵負ぬ者はなく。其時は平家の世盛。住來の強憶を見て味方に付る所存なれば。一命を果す程の深手もあく。万一死たる者には親類によらず。縁者の端にも格別に吊料下さる。フウしたり／＼。今草木も靡く源氏の代か様の施なされぬとて誰と云はね共。下を惠ひ仁心天晴源氏の能石礎。ヤア何か云間に御代參れそあはる。さら／＼と源八兵衛。別れては墓に詣ける駿河の次郎日記の大帳展開き。詞  
コリヤ／＼汝等最前も云如く。我君の覺書に少一にても相違なればは施行は渡されず。銘々其夜の物語はや疾々と有ければ。雜色供人いかつげに出ませ／＼の聲に隨ひ立出る。年は四十のかたで風ふう／＼仲間の達者と。人より先に鳥羽の里車つかひの其中で。腕に覺の若盛往來を惱ます天狗の若衆。出合て見たさに態々と一里餘をり二月の。晦日の夜も闇のりから牛若様とは重荷に小付。いはぬ額を此如く切れましたは丑の時。毛頭遊でざりませぬと語りける。チ、其詞もあみ織の古びた一腰察するに葱の中でもかすげの頭。願かけて切れしは口先計で世を渡り。商賣とては千本通軍書哥書の講釋師。其頃は地主祭夜講釋して歸るさ。然も春雨しき

りに降て氣味悪く。只一人橋臺にさしかゝれば。闇さは闇し霧直に打てかゝる。受つ開いつ追つまくつた。判官様は欄干傳ひ擬寶珠に片足立。慥切たと思ふたは違はず。草履の鼻緒踏切て。滑つ轉びつなふ悲しや人殺と。たつた一聲夕顔の五條あたりの知音へ駈込めまの命を拾ひしと。己の家業の仕方咄今見る様にまやべりける。それに違ひもない。身共は此所のれ道具持。涉覽の如く奴めが罷と譬とは噺道具。其譬をしたゝかに切られたは一昔。土用八專寒の入階に卯月の十八日。ね観音の下向道清水坂に契を結び。安ものよ通轡まろりと明た醉機嫌。しやつぶり一太刀劔も折るは大悲の誓ひ。まさかの時は叶はぬ。それから二度此橋へこんの題無役衣を。うたぬ計の逃疵跡。涉施行も疵相應にすつしりて。ごはりませふとかつそくばふ。駿河の次郎は月日刻限一々に引合せ。汝等が詞に違はぬ。是で九百九十九人の帳面濟む。必らず一上上の御恩仇れろそかに存するなど。銀子も一枚平等に足不足なく與ふれば。やれ忝なや有難や。ね銀貨ふて譬切るゝとは正眞の假令のうら。か様の事なら千人切にまあ五六度もあふたらば。閨の有晩日の拂の足にと打笑ひ。別れゝに歸りけり。跡へ來るは誰を共。三十餘りの女房綿帽子ま深に顔隠し。世帯染てもつま外れ只ならぬ日の物語。櫛に念珠操添て假

屋の前に手をつかへ。詞 私は日の岡に住む浪人の妻つれ合の父御妾か舅。其時はまだ六十にたるらざ。春の日の長きを暮しかね都は花の最中。氣延に身物と浪人の鍔刀。衣裳は汚れ垢づきても心は汚れぬ武士の浪人。嫁女留守よくれもしやと。暇乞なされし其係が此世の見納。知らせに依て。駈付見れば此橋に切殺され。敢なきは最期取交て。夫は奉公稼の留守。姑御を始め。妾の歎をば推量。跡で切人は判官様と聞たれ共。恨つらみも人により時によると。思ひ暮せし年月も十三年のね吊ひ。是はまだしも奇特な事。望有舅の命外々よりも經念佛。たんと唱て冥途の亡執。晴して進せて給はれと目には涙を持ながら。云程のとじとやかに武士の妻とは知ける語る中より駿河の次郎只フウと小首を傾け。先待女。見通り千人供養も最前の三人にて。九百九十九人の數悉く揃ひ。千人目ハ武藏坊辨慶にてお帳面も縮る所に。思ひもよらぬ只今の物語一圖に台点ゆかぞ。其又月日は。アイ則今日か舅の祥月命日。餉米持て墓参りが慥な證據。みすゝ切れて居た人を覺ないとは涉卑怯。夫は武士の浪人と聞ひ主思の偽かど。急に急て詰かくれば黙れ女。天下晴た千人供養。汝が夫を鬼神にもせよ武士の虚言を云べきか。我君の手に掛給はぬと云證據。急ず共心を鎮め篤と見よ。月の三日は休日と日記の控

に記し有はは父義朝の命日。人は勿論魚鳥の殺生さへ戒め給ふお精進日其日限り汝が眞何故殺し給ふべき。ナ合點がいたかど合たるやうに語れば驚き。詞 エ、イそんなりや外に殺して。ある一察する所老人に意趣有歟。切殺して千人切につき交置しに疑ひあしと。聞て女はハアはつと須臾詞もなかりしが。詞 汚覽の如く身貧私。無とも有様に云なし。施行のお銀を食るかど見下も恥しや。外に殺手有ふとは夢にも思掛もなく。急たまの悪口雑言汚許されと立上れば。詞 ナ、疑ふも尤。親を討れし夫の心根推量せり。身は駿河の次郎清重。用事あらば館へ来れど。慈愛の詞に一禮述春の日脚も八ッ頃。暮るにはまだ程遠き日の岡差て立歸る。折から梶原平次景高頼む鯨島藏人は。義經に討取れ盗取たる廻文も奪われ。若は尋る手掛もやと。穿義の當途も雲を掴む雲雀毛に打跨り。清重をちらと見付懸ぬ處の出合頭。駒の頭もうな垂て知らぬ顔に乗過る。見ぬ顔させぬと駿河の次郎向ふに衝くと立はばかり。詞 ヤア珍しや梶原。汝上洛せば早速主人の御館へ参べきに面出もせず。浴中は主君の膝元。馬の蹄に掛乗打するはフウ合點。平家亡びてより鎌倉殿と御兄弟御中睦じからせ。汝親子が讒言にて討手に来るに違はぬ。サア堀川の御所へ参つて有の儘に白状せよと詰掛られ。返答さつちと

詰し。弱味を見じとからと嘲り笑ひ。詞 景高は大名左様の禮義を知らないと思ふか。此度鎌倉殿より涉不審の條々一々承はつて。上落したる梶原は上使。汝等風情が乗打を答るの先緩急。一ツには又判官殿云分の筋も立。涉兄弟のほ中は和睦も有様にと。加茂祇園北野の社に祈誓を掛。唯今参詣する所と。口から出次第神集嘘八百に云廻せば。詞 サア其涉不審の一々云へ聞ふ。イヤ小癪な汝が聞て何と判断なすべきと。手綱かい操乗出す。ねづを掴んで待。詞 云ぬは曲者何分主君の館へ参れ。異義に及ば、軟つばに括付引摺て行覺期せよと。二三間引戻し後居に睦と投付れば。梶原馬上に反橋形。詞 エ、悪くき清重。上使に向つて重々の狼藉それ引捕れど。聲に随ひ數多の家來。ばらりと立掛るを駿河の次郎。得たりや應と取ては投退け。掴んでは打付。梶原目掛飛で掛る。こは叶はじと一鞭おて一散に駈行。家來もほら。逃散たり。何所迄も遁せじと追駈しがいや。詞 一ト先主君に申し上ふ。思へば悪くは梶原めど。駈出しては立長りよし。生て歸も千人供養と心一ツで取つ置つ。思案の底を堀川のほ所を差てぞ。三重 歸りける。都の出口来て見れば愛宕参りや伊勢参宮。引もぢぎらぬ往還も夜は旅行の跡絶て。人音稀に栗田口木々の梢も若草も。名殘の霜に照添て。乳母

が懐物凄く。星の光も曇る夜のおやなぎ道をのつさし。歩み来るは大津の町古き老舗の店を張みりぎも通る名も通る往來もどふて池の端。針右衛門とて遠目にも光る鬢つき頭がち。強と好く腕自慢覺もなりより力より。心計の浮氣者京の得意をかけ廻り。日暮て歸る道野邊の路傍に積たる稻藪より。詞 ヤイ待々と佞の濁聲聞て吃くり飛退し。詞 ム、合點し。此處は名代の乳母がふとまろ。狐狸の業をもあるまい剣め等に極つ。望む所とすつと寄大津八町に隠れもなす。詞 池のはたの針右衛門知らぬかぬ。待と思かすは何奴じや。チ、釘右衛門聞及だ。己や見へた進の稻むら。ヤ此奴滅相な。橙が物云たは見せ物に有あれど。稻むらが口話た例がぬ。馬鹿つくさずと用ゐらば出さつて穢せ。チ、出なと云ても面見にや置ぬと。によつと出たる大男。力士の如く突立バ。ぎよつとせしめ怯まぬ顔。詞 コリヤヤイ我が用は聞に及ばぬ。酒手であらふが。あたゝかに此男鼻紙一枚遣やせぬわい。退て通せば其方の仕合。惡ふ働立すると身内がらねの針右衛門。くつじやしついでくりよと力味かゝれを見向もせず。詞 ハテ喧しい腮たゝかすときりし腕やいや何じや腕。ハハハハ、胡奴此や癡惚たか。相撲じやないぞよ。剣にしたくば腕先でならばさめ取れ。サア剣と身構しても動かばこそ。詞 ヤア

おさめ過た盜賊め。此ぶつふと吹出る力此力見せ付んど。胸づくしを緊と取何と強か。何もろせまい。所をぞつとこふ差込引擔いで。コリヤいかぬの。めんよふ常はよふいくが。さあど云と場負かする。ム、其管勝手が遠ぶた。此度はこを取うんと是でもやられぬ。やられぬ物は乞食の悪口。相手に成ていらぬ物。許して呉まると退て見てもむしやくり腹。思へは無念と又取付。腕腕放しうつ首弱腰引擱んで。深田の中をうと投げは。詞 お痛たさつても苛いコリヤ慥いと。身内を撫てなむ三寶。今の拍子に財布を落した。ア、まよ。其所に在ても呉しやせま。イ、エ、此なとなら構わなんだが勝じや物。力立して銭出して。痛めするハ盗人にたひ。されど布子の助つたど。ほうし逃て歸りける。詞 財布取上是ハ扱。たりにもならぬ目腐錢。むむ骨折たと吻く向へ。來はし此奴の借に實の有やつ。遁はせせじものどづんばい。さきはそれとも知ね共心から吹く憶病風。ぶらし者はたらぬかと強さ紛らす高念佛。なまいた。なむめみだいやほう。詞 ほうと出くはせコリヤやらぬは。其懐な物置ていけと壁掛られて。ア、是々持合がありや如在ない。いかなし一錢もやならどは云はせぬとばけま。體に似合ぬ故が足音。重輕て有ないは目を掛た程知てゐる。錢も有ふ金めしつかり持て居と星を指れて。コリヤ

奇妙。ア、目ごかにおふて手めはならぬ。我等の三條かすの座の金四郎といふきん五すき。夕  
 大津で引かけたりや。勝程に板銀一丁錢三貫汗水流して取た物を。又物せふとりそりや  
 胴慾。今夜の所りかこふてもらを。重て進せる時便も有ふ。了簡なされと云捨て逃んとす。と  
 つまいやらぬと飛掛り肩先掴んで引はひよろ。ア、こりやとふじや。引戻すはあさきり  
 か。ヤア動な四民を外れのら遊のほで戯業。おのれ等に金銀持すは國土の費。迎も口先では渡  
 すまい手短にはらしてくりよ。ア、其ばらすは劇い禁物。儘上てんとれ金四郎が不運。七里八  
 里の馬でも越に。越に越れぬ乳母が懐ろ。我等が懐是非がない。どうだいに三ツを見たを皆  
 負出して逃て行。此へ息急來る男鬨は聞し氣は焦つ。行當つてお痛し。御許されて下さ  
 りませ。ちと急用があれば氣の急儘の鹿疎。イヤ鹿疎の許す。アイ。其代に酒手せふわ  
 ー。エ、ハイといふより身の慄々。サア出せ。アイ。出さぬか。アイ。出したるまいかと  
 引捕へ。わつと叫ぶを無理無体懐探し。コレ。是程有物を頑い奴じやと突飛されてどうと  
 俯し。涙はら。大聲上。テモ扱も情ない。唯さへ術無暮をするに。一人の親が大煩ひ今を  
 も知らぬ危い命。責て殺人參でを進せたら取留るとも有ふと。心は急をも何をとふとのあつて

もなく。説方盡て京の妹か給銀の内拾外借て貰ひ。一足も早を往んで力に思ふた甲斐もな  
 ぶ。此様な目に逢てす。戻て何とせふ。みす。親を見殺は。テモ扱も情ないど大地を敵  
 き身を憫へ。唯わつ。と泣より外のとどなき。何じや親の大病人參か吞せたさに。妹  
 か給分借たのか。アイ漸々と十匁。其をお前にしてやられて。親父様は死やります。悲しいめ  
 を見よふよりいつを殺して下されと。歎けは共に涙ぐみ。身共も煩も母一人孝行は同じ  
 と。コリヤ銀戻す。大切な場に成て殺人參ぐらゐでは届まい。大人參で養生せいと板銀一丁投  
 出せは。エ、イ是を私に下さりませすか。ナ、孝行を感じて己に遣る。人の親も我親も大事に思  
 ふは同じと。親の爲にする追刺惨い銀は取ぬわい。エツエ忝ない慈悲深い結構を盗人様。お銀  
 を下さる冥加の爲。責ては布子を脱まじよかと帯解か。ヤイ馬鹿め刺程なれ銀のや  
 らぬ暇入すと早失て。養生しをれと突やられ。是はまゝ夢ではないか追刺様に銀貫ふ命冥加  
 な親父様。人參か盡たらん又刺れに参りましよと。銀職いて歸りけり。エ、泣おつたはつか  
 りに板一丁ついてもめと。跡振かへれば白々と雪かど見ゆるぼんぼり綿。引しめ着なす女の所  
 体むまい。眞裸にして呉ませと。歩み來る先につばつて。コリヤ女郎さい。わん帽脱と

云に駕きア、恸と。跡へ逃るを引捕まへ顔見合て。ア女房共か卿右衛門殿か是は扱。こゝたはまあ何して此處へ。ム、聞へた此間毎夜く出しやるを。合點がいかにぬと思ふたが。よふもく此様な強いと。サ、思ひ付たも母を助ける營み。武士の落目に切取強盗耻にもならず。其共非道の銀は取ぬが。そふいふ汝や母の病氣の介抱を。隣に預て今迄をまにはいつておた。サア委じやとて母御の側常は一寸離れぬぞ。今日は父御の御命日。賣てれ墓へ水など手向きよと。參つた戻りに五條の橋。千人供養所へいての。アア汝施行受にうせたな。ハテ何のいの。イヤサそれ受る程なりや此姿に成ては居ぬわい。コレそんなとじやない大切な今の。ヤ今のとどは。ハテ彼相手が違ふたわいの。アアそりやどおじや。サレバ段々分はあれ其長いと。ここで咄も内か氣遣。ヨ、それよ道を聞ふサアく、こいと打連て。歸る夜嵐山にるし。木梢木の間もさらく、颯と。吹ば散てお身の往家急いでころは。越駈る。浮世の時せぐるしき。大津と京の世渡り道。向牖から出る日の間に住浪人あり。南蠻の骨繼卿右衛門と名をしるし。桐の古木の看板も琴の音ならで世に響き。詰かくる療治人切症打身骨違或は脚氣、願外れ其それくの膏藥を。妻も見慣て習はねと仰て離れぬ夫婦中。人の痛は直せとも夫の老母の

の御大病。薬も術も盡果てそれゆへ心の痛に。付ふ薬もなかりけり。女房膏藥延しまひ奥と覗いて中々。御療治人が三四人も待てござる。おつと心得立出る卿右衛門。紙子羽織の大廣袖金氣離れし柄廻り。内でも不斷大刀を差かに武士の浪人と。云はねと見る其風情。詞、チ、皆待遣にござらふ。身共が老母大病今晚も知す。療治處じやなけれ共。折角馳られた物見て進せふ。一番は誰じや。ハ私てござります。何と召れた。ア夜前京からの戻かけ松坂の成敗場を通ります時。豫て追剝が出る物騒な中に違ふ。太山のやうな丁度前様の様な。ハテ迷惑お身は追剝は致さぬぞ。イヤくお前様とは中さぬ。様な男が丁度前様の様な強い聲で酒手およこせとやました。私も見掛と違ふて腕に覺はあり。ま一倍強い聲で。大津池の端に隠ない針右衛門知ぬかい。剝だ物の有バ此方へよこせと云や否や。剝にかゝる真様と引擔いて深田の中へまつ逆に投込ました。此牖ががつくりと云て痛出し。漸々杖に縋つて來ました。御療治頼み上ますと、則剝だ其人に。眞反様の物語。可笑さ堪て卿右衛門其はいかいお手柄。をりや疵見て進せふと臍押脱り篤と見。詞、コリヤ投た物じやないお身手酷投られたぞ。アノ其の見ますか。投られた斗じやない剝れた迄が見へや。ハテ面目もない。向を隠るふしたくかに投られま

した。然ども心有追剣で財布に遺殘した錢斗。着物は助かつた痛さへ愈れば。取れた錢は一精  
 出せば終戻る。とぞお慈悲でござります。御療治なされて下さりませ。愈しておませ女  
 房共あぼすどろんにあるまんすを少交て貼ておましやれ。次は誰じや。イヤ私でござりませ  
 ど。奇特帽子に手締着せ願掛て引括り。目斗見せた何女親父めく者連て出。私は山科の挽  
 物師。こいつは嫁でござりますが。コレ此様に縮も帽子も操捨ば。願外れてぶらぶらと翁の  
 面見様に。鼻から下の面長さ。鯨が達者で旨もの食せ過し顔が落た。鯛も追ぬやうに成おつ  
 た。鼻の軟轆轆て骨を削らるこやうな。療治頼み上ますとおろし涙いぢらしし。いやそ  
 ふでない。此名を落架風と云て。男女に限らず仕事をするか。物を見るか何でもあれ氣をつか  
 ずか。或はあほうげに欠伸なぞすれば悉てあると。此儘で置バ物も食す。段々と願か重は成  
 る痛はする。死ふより外はない。そつちの一大事此方は心易い療治。愈してれませ女房共風  
 呂敷よこしや。エ、残り多し京中の腹はれ共には是が有べ。一廉の禮銀して遺物。摺つても瘡  
 親父よもやしるはたるまいと。戯れながら風呂敷すつぽり打着て。頭をさへて願を動かす手品の  
 一機み。サア掛つたはと風呂敷取。嫁は會釋し手を仕へ扱も有難い。コレ一物言ま

い二三日もあしらひねば又外れる。薬に及ばぬ退た。次ハ見知た六地藏の捨扶持の。三藏  
 じやないか何とした。アイ旦那殿あたはつこしもない。先一昨日鎌倉行の廿二三貫有荷を付替  
 とて。此腕がばつきりと云てから。痛でからかこまいでから此様に腫かきてから。もふよいは  
 からくいふな見て取せふ此處へ來い。ホ、ウしたりなコリヤ大と。臂尻の骨が齟齬な痛  
 まふ。悪すれ死れ共南蠻の骨繼。卿右衛門か秘密の療治立處に直して遣ふ。女房細引もつ  
 てれじや。チ、好時見て仕合者と。痛む腕を引寄て柱に緊と括り付。羽織ひん脱身輕に成。手  
 水鉢にさしかりずはと抜たるだん平物。水さらしと汲掛し鼻の先を閃めかせば。見を生  
 たる心もなく。中々其でとふなされませ。腕打放して繼直すわい。喃悲やと太聲上。くくと  
 男泣。馬鹿あしやつ顔吠れバ癒るか。今切放して繼直せハ本の如く役に立。捨置は次第  
 に腫上て。終には一命を果す基ひと成。切放す間は一思役に立は身一生。人も開泣まい。  
 でも又はは憐たらゑい。憐なけれバ療治にからぬ。サア今切ぞと振上げて丁切真似かつと  
 呑。呼吸の機會引拍子腕の番がつくりと。もふ好々達な骨が篤と嵌つた。最早痛が止まの  
 な。本に止たはスリヤ切放はなされぬか。ハレやくたいもない。普婆や華腕の馳ても切放て何



と繼るゝ物ぞ。憶病を見込に身を引拍子。手をさへずは本服させる是が南蠻秘密の療治。此膏藥で腫も滅。何と奇妙な療治かど。聞て皆々吃驚し扱も頓智御發明。頓ての内に天下道具怪我せふならは今の内。神か佛か長居は恐れ是々腕が動きまそ。足が自由になりまするハア有難い恭ない。サアお暇と女房の。側面々謝禮差置て。祝ひ。打連歸ける。夫は奥を伺ひ見て女房を小隅へ招き。母もまだお目か醒ぬ。此間に夕道すのら話したとを今一度聞たい。いよ、其が治定で義經殿がお討やらねは。親の敵は外に有。婿や義經殿と違ふて討に義理も遠慮もいらねば。其敵誰じやと云夢程も心當がない。雲にしろが出來た様で又雲を掴む様で。分別に能はぬ。万に一ツ聞た内手掛になりうふなとはなかりしか。ま一度語れと念入は。サアそふ存じて段々念を入たれば。駿河殿も操返し帳面の御吟味。旬月幾日の夜幾人何の物着て。幾つ斗でどふで斯でも小袖の模様年恰好。刀脇指の拵迄明白な帳面。都合九百九十九人の。其縁の衆が皆施行は載いて歸り。千人目の武藏殿で帳面さらりと相濟。微塵も胡乱なともなく手掛に成筋の猶なし。おいとしゃ誰が殺して千人切の内へつき交。科ない義經様を疑がはせ大事のお前へ埋らせ。是迄さへ有ものを又此上の心遣。御苦勞成るか悲いと涕催す折からに。表に人

敷多と音して乗物昇居。立出る其形。装頭は薙髪の大男。足利様の長羽織平柄の刀引提立出。頼み入んと案内乞。女房立出誰殿ぞやと答ふれば。南蠻の骨繼郷右衛門と云ひ此家とな。在宿さらば御意得たし。ハア誰殿が幸宿に居まする。然ハ罷通らんと静しと奥に入。未だ不知案内御免めれ。郷右衛門と和殿よな。子細有て我名の中さぬ。骨繼金創の療治。御功者と承はつて推參致す。頼み入たしと有ければ。功者と御聞なさるゝ上は下手と申も諸ひがまし。某か癖として名も所も聞でも。御頼なれば療治致す。シテ其御痛は。療治して呉めされるか。忝ないくと弓手のかた肌押脱で。疵差向れば立寄て。包みし服紗物解ほと笈笈と見。ム、疵口は僅なれ共疵先骨に當て。然も手の口定ぬ鈍刀疵。是ハ腫か痛なされふが。療治致さバ早速御平愈。女房膏藥箱持てい。ホウ肩先にも古疵の跡。此方の切口とは違て、天晴な刀の跡。此時は應御難義。御仁躰に似合ぬ再々切れさつしやるの。然ば、其疵は十三年以前身も未だ浪人の時で養生に迷惑致いたさ。何として又切れさつしやる。浪人の時ならば辻斬追剣でも成れてのとかい。イヤそふでない。そふでなくば押入か強盗かどうせろくな事では有まい。ハテ迷惑をそふ問れては語すば叶ふまい。物てれじやる。此疵は十三年以前其頃の平

家の世盛。身か譜代の御主人は子細有て。東國に漂泊の御身。京都の便を窺はんと某一人都へ上る。頃ハ三月初方。地主権現の花盛。大政入道の次男平の宗盛。ゆやと云女を具して終日の花見の歸り。是ぞ能折節現參せん。六波羅密寺の小藪の蔭。立忍ばんとすれハ人有て。狼籍なり。何者と云。木にも萱にも心置く身の悲しさハ。平家より付置忍の番と心得て。返答もせず抜打に丁と切る。奴もさる者心得たりと抜合せ。したこかに切付しは此疵跡。然共難なく切殺し見ハ六十餘の老人傍に弓と矢あり。扱は此人も源氏の餘類。宗盛の歸を窺ふ我同服中。跡で心は付たれ共詮方なく。早追々に警固の提燈星の如く。見付られては事むづかしと死骸を引提。程近き五條の橋に捨置しは。詞其頃いか成者やらん。五條の橋にて千人切。跡で聞ハ義經公千人切の十三年。追善供養なされしとや。うれとは知す其仕業にせん物と。一時の計畧。今源氏一統の世と成て恐る方はなけれ共。かうじすらあきにはしりじ。必ずハ他言は無用。何が扱人には語るまじして其時の御家名を。澁谷の金丸昌俊今は澁谷土佐坊昌俊。親の敵通さぬとすはと扱て打かくる。飛しとつて抜合せ發矢と受。詞コリヤはやまるを扱は只今物語りし老人が倅よな。おんでもあいと。然も有ん急す共名を名乗如何に。ナ義經公の御内に然者ありと呼れたる。伊勢の三郎義盛。千人切につき交し其老人は我父伊勢の左衛門俊盛親の敵通さぬわい。詞どつこい先待其伊勢の三郎は。義經公の股肱の臣何故に此有様うれ聞たい。ナ、汝の今の物語交を討たる其時。我ハ駿州に流浪都に殘せし此妻が方より。知せに驚き早速都へ馳上たれ共。千人切もたや事濟で誰を敵と討べきやうあや。又東國へ下つて無念の月日を送る處に。不思議に義經公の家臣と成て。西海四海の戰にも蔭身も離れぬ我ありしが。五條の橋の千人切は我なりしと。去春初めて御物語。討ば主討ねハ親への孝立ぞ。奉公は猶あらぞ。母を養殺しての跡は浮世を捨坊主と。合點して暇を取。其昔盜賊せし時習ひ覺へし此營。昨日敵ハ外よ有と。女房がつき交の分を聞出ても其名を知らず。二度心を苦むる所に。思はぬ今日の對面は親人が是討と。手を取て連てお出成れたか。ハア、忝ない有難い優曇華ハ拜んで折。親の敵はあのみ打立上れサア參らふと詰掛たり。詞待て早まるあ云事あり。ヤア家來共卑陋千万何を立騒く。此家を遠ざけて歸るを待往。扱々承ハつて御心中察し入。如何にも此處はお相手に成。御本意遂させ度物なれ共あいと云れぬ其子細。物語る内先刀を引かれよ。今度鎌倉より義經公へ二ヶ條の御不審。平家一味の連判狀と卿の君の首取て來れ

と。梶原平次景高を都へ上さる。詞の彼梶原父子逆櫓の遺恨に依て。義經の御と種々に讒言すれ  
 ば。都へ上り如何様に事を破り。御兄弟の中悪く身身のひしに成てりと思。鎌倉殿の御前にて  
 一通の起證文を書。梶原と一所に此地へ趣。案に違ず堀川の御所へ忍を入。彼連判を盗取義經  
 の誤にせんと謀む。扱ころと某姿を變へ忍寄。念なふ其連判は梶原が手より奪取。密に義  
 經公へ渡さんと折を待。是此疵の其時の疵。梶原と一所に住む館の内。療治の取沙汰聞へて  
 は返答むつか敷。御邊が名を聞て是迄療治を頼に來り。思も依らぬ對面。我ころ親の敵よと。  
 名乗て討るゝは易けれ共。此處を能開れよ。今御邊に本意を達させ討れては。誰か殘つて義經  
 の御身の上。事あい様に取斗ひ鎌倉殿共御中能。梶原を鎌倉へは歸すべき。斯親の敵の願はる  
 上からは。御邊も義經公に恨なく。主従の禮儀よもや忘るまじ。梶原を鎌倉へ歸す迄了簡し。  
 此敵討を延て給れ。某が初一念も立。義經の御身も立聞分て給三郎殿と。低頭平身手を番へ  
 涕を。流ぬ斗あり。詞ヤウ聞分ぬ。知ぬ中は是非もなし。知ては半時も同じ天は裁かぬサ  
 ア勝負。それはきよくもない。所存の本意を達せんと思は。返討に討とも有べきがそれ  
 は道ならず。あふ御内所子細はお聞なると通り。歩に首を下られ鎧を肩に掛ぬ法も有偽な

し。梶原を歸す迄の宥免お執成頼み入。何が扱人にこそよれ昌俊様うこに偽は有まい三郎  
 殿。ヤヤと言共聞入ぞいや。女の知たぞでない黙て居を。コリヤ昌俊返討に討れふ  
 が耐れまい。うりや互に時の運。うらくさかへすあ一寸も待ぬ此座は立せぬ。サア立上れと  
 意地張聲。三郎待義盛待やぬと。母は臥床を立出て嫁を杖共柱共。引れ纏はれ。二人の中ヤ  
 アあいと座を占て。苦しき息をつぎあへず。連合を討しやつた昌俊殿は此方か。チ、健あ  
 よん器量や。義經様を御大切に思ふて。上京をつしやれた咄し聞まつた。いかい御苦勞サア  
 緩りとなされ。詞コリヤ義盛。余り物了簡過る。それでい思はぬ間違ら有物と。日頃叱た其  
 方が。昌俊の分ておもしろしやる段々の道理。今日に限つてなせ聞入ぬ。但し生死不定の世界。日  
 を延て其内に死やつていと思ふてか其の人に依る。梶原の都の逗留も長ふて百日か百五十  
 日。昌俊の命うれ迄に請合。了簡して先いなしませしやいの。ハア畏まつたぞ中上たいか是斗の  
 お許されふ。昌俊が命は五年三年延ても。少共氣遣ござらね共。結局お請合なるお前のお  
 命。明日も知ぬ御大病其病の起りませ。胡奴の親父様を殺した故。十三年の御歎物思。  
 又某か此方より暇取て浪人し。世の諺にも老の人まいとこそいふに。餘命なき御身も資

をさせましたも。胡奴が千人切の中へつき交た故。勿躰なや科ない義經公を。討れぬ敵と悔々思召されたお瘡か。積り積り此度の御大病。詞 すりや親父様斗じやない。お前を煩りせるも胡奴が業。一方ならぬ悪く一年來の蒙霧を散する。今日只今首取て。荒角のお笑顔が見たさに了簡は得致さぬ。女房奥へお供中せ。詞 サア昌俊立たし了簡をい。詞 裾端折て身繕ひ。詞 コリヤやい。今昌俊を討てり父の教養。母へも孝行にならぬうよ。とりいかにと端折を下し。驚側へ摺寄れば父御は宗盛を一矢射んと忍出で。二度かへらぬ昔語豫々母かいつたと昌俊殿の物語違ふたり。討た此人も討れた父御前も。同じ源氏の爲を思ふて味方討。親にかけかへの有物なら。此敵は討いでも。人か身性者とはよも云まいと思へ共。ろこは女の智慧に及ばぬ。今討て父の教養母へ孝行にならぬと云分いな。まろつと先迄義經公を親の敵と思ひつても得討なんだは。三代相傳のお主故でいなりしか。其お主み鎌倉より。御不審掛り。一大事の今此時立歸つて。御用に立ふと云所存なく。結局お爲よなる昌俊殿を殺して。梶原めが思ふ儘に義經公を取潰させてしまふたら。さぞ冥途の父御前がでかしたとれ譴なされふぞ。武士は町人百姓と違て。何ぼ親も孝行でも忠義と武勇を忘れてり。弦なき弓も同じと。耻しや昌俊殿君の爲み我を忘れ。頭を下げ手を番て段々の道理。敵同士に猶耻有もの。義理を忘れてなんぞや此座を立せぬ。詞 ナ、見事な武士道此上は留ぬぞ。サア討振上る太刀の下母か先へ死で見せふぞ。エ、悲しや其心では一生其身で埋もれ。伊勢の名字も是限是を思へば昨日にも死たらば。此愛目は見まい物存へて憂命やと。我身を啣ち子を恨み。かつはと伏して泣叫ぶ。三郎大きに身を悔み。詞 御存生の内敵の首お目に掛度と。思ふ一圖に主君を忘し誤り。眞平御免下さるへしと妻諸共。五体を。投伏詫言し。詞 ナフ土佐坊殿。子細はお聞成ると通母の心を休る爲。梶原が鎌倉へ歸る迄。此方ハ敵討を延す所存。貴殿も彌延て欲き御所存か何と。是はく忝ない必定延て下されか。ねんでもない。ハア執着仕。是と申も老母のれ情。お禮の中シ様えられよ。辛の物ころめれと。懷中をり錦に包む一軸を取出し。是ころ梶原が手とり奪取し。平家一味の連判狀是を老母に進上サスと。手に渡せば。押鞞。詞 天晴是は何よりの賜。我子が奉公歸參の願ひ義經公への土産物。此上の有べきか斯斗心有昌俊殿。サスよは及はぬぞ。我君の御とを呉々頼み參らす。詞 敵討の義ハ格別。其迄は義盛昌俊殿と申よふして君への忠義を忘るゝな。命めらば又れ目に掛る所に長居して。人の疑ひ受給ふな歸せ給へ昌俊

殿。實に能く心付られたりと御立上り。伊勢の三郎義盛と滋谷土佐坊昌俊が。契約金石の如く預りの大事の我命。只今持て歸り申す。さらば〜と立出れば義盛も突立上り。天に不時の風雲あり人に不時の煩ひあり。病氣ならば養生加へ早速に知らせ。何の扱へ御邊より預かる命。我身にかへて疎略はない随分堅固に勝負せん。ヲ、嬉し頼もし。さらば〜と立別る。鎌倉の義者都の勇者。東と京を娑婆冥途。なふ母様の御臨終と云聲に立寄甲斐もなき。佛。わつと叫べと歎けどもかへら忍死出の片便。情ハ情仇ハ仇見るに堪らね忍びかね。溢る涙。れし包み南無阿彌陀佛。彌陀佛と心で云も誓願力。長き闇地や照すらん

第三

風の勢は大海の浪を動せども。井の内の水を動かすと能はず。九郎判官義經公梶原父子が讒言にて。御舎兄右大將家の御不審日々彌増し。京鎌倉と隔つてしんぐ矛楯の折からに。北の方卿の君はや五月の御贖任。御腹帯の御祝儀も外様の聞を憚りて。御譜代直參の面々計思ひ〜に出仕有。愛度例を取結ぶ帯の祝を賑しき。お次の間より女中の聲。卿の君の御乳母侍從太郎守國が。妻の花の井襦姿しとやかに。列坐を性す打通り。御前に手を仕。同 サテ我君様

へや上ます。今日の御祝儀幾千代掛て未永き。お腹帯の儀式も相濟。卿の君様にもお里にてうれ〜とないお悦び。お乳母の役なれば夫侍從太郎參らるる等なれ共。今鎌倉より意地悪の梶原上落して。有と無と。可愛男へ忍びづまが日文を書て遣る様に。頼朝様へ知らせる。其故に目立ぬ様に私か參上致しましたと披露する。同 ナ、さる有なん〜此義經。梶原連を恐るにはあらね共。鎌倉殿を敬ひ補ふ心より。今日の壽も密かにと云付たりとの給へば。其に付此お愛度を幸に卿の君様のお願ひは。去年の春より行衛の知ぬ伊勢の三郎義盛殿のと。誤を御赦免有元の通り御家來と成下されかし。此間毎日〜お里へ来て。お詫なされて給はれど。彼一人當千な侍の見すほらしいを見る目も氣の毒。いとささに此次迄同道致しました。お腹帯の祝に持掛。伊勢殿の歸參の願ひは大きな吉左右。同 伊勢の二字を偏と作を引わくれ。人平に生は丸か力と讀とあれば。當る十月にぞる〜と。御平産の瑞想と色も香も有花の井の言に花を咲せける。判官始終を聞給ひ。稍黙然として在しが。傳聞伯夷叔齊は其罪を惡み。其人を惡まずと云り。すげなく追かへすも物の哀を知らぬに似たり。ことにたけ盛と云し頃より一方ならぬ好みの者。先々はへ呼出と有ければ。花の井額を疊に付有難ひ御仁心使の規模も立

處に御對面あらんと有。サア一是へと白洲に程なく。立出る。伊勢の三郎義盛が主の威光にせくぐまり。身に簾もなき倭小紋麻上下に垢付し。どでら布子も打しほたれ携へ持つ一つの箱案上にすへ置て遙に下つて平服す。詞 ナ、珍しき義盛。汝主に暇をも乞す逐電して。一旦見限し義經を又ひや幕來る。所存いかにとの給へ。伊勢の三郎承はり。恐有中開きなれ共。君牛若の御曹子たりし時五條の橋にて千人切の刻。我父伊勢の左衛門俊盛と云し者を。お手に掛られしと憐念に思込。恨を晴さんとすれバ三代相恩の。主殺の罪に落る所詮討れぬ敵討とあきらめ。詞 俱不戰天の父の仇を忘るゝからハ武士を立ても益なしと身退き。縊れても死んず命を。老たりし母の爲と存へ有しは。弓矢神の控綱。詞 此程誠の親の敵に廻合。敵にてなき御主人を須臾も疎し。天罰の勿体なさ。身に染々と思知りお詫願奉ると。涕に暮一言上す。花の井も取繕ひ何かは白木の此箱入。歸り新參の手柄初に献上と。御座近くに差出せば。お手すから蓋押開き。一卷を御覽有より。御氣色變り。詞 ヤア是ころ今穿義する平家の廻文我館へ忍入盜取し曲者は。扱は三郎己れよなど。思掛なき咎に義盛コハ情なき御疑ひ。詞 其廻文某が手に入し子細他聞を憚る密事なれば。最前御式臺にて武藏坊辨慶に。密かに語り留め追て御聞下さるべし。詞 イヤ猛々敷偽。誰か有アレ引立よと御詔の下。西塔の武藏坊辨慶。梨子打烏帽子引立て輪寶摺たる大紋の。袖まくり手に御廣間の。大火鉢を携へ淨々と御前に出。詞 コハぎやうく敷御憤。先刻廻文持参仕ると。此御疑有んと存じ彼がめんはれ用意致ゆ。コレ一義盛。昔のかららの臣は湯起證を取て君の御疑を晴したる例も有。御目通にて鐵火を擲り。身の半分立られよと。火鉢に焚たる鷹股の大矢一本。鐵を火焰に燒立て飛散る火花を打拂ひ差出。潔よく伊勢の三郎義盛の。平家の廻文盜取ざる正直心。是御覽せよと既に燒鐵手に取る處を。詞 ヤレ待辨慶早まるな義盛疑ひ晴て元の如。主従成どとの給ふ聲に。三人夢の醒たる心地ハ、ハツト飛退り悦び勇折てそあれ。當番の奏者罷出。鎌倉の御上使梶原澁谷同道にて只今是と申上れば。大將須臾御思案あり。ヤア伊勢の三郎。察する所此廻文渡せと有催促ならん。其時に汝心得持参せよ。先それ迄は休息すべしと。君の御機嫌義盛はつと領承し。伺候の人々諸共に。御前を立は。花の井悦しく。此様子を卿の君様へ御咄しもやたし。馬疋と辻風に逢ぬら疾々お暇と。お里を差して立歸。鎌倉の上使梶原平次景高。澁谷土佐坊昌俊を伴ひ入來れば。禮義正しく義經公辨慶諸共出向ひ。上使と有は方々は鎌倉殿も同前と上段の間へ進めやり。御身

の席を下り給ひ。翌應殊にこまやかなり。梶原平次會釋もなく。先達て仰越れし二ヶ條の御不審。日往月來れ共べん〜と滂中シ開なきに依て。右大將家以外外の御怒。急ぎ北の方卿の君の御首打て。廻文に相添渡されよとの御誑意れと。若々敷相述べば。物に騒がぬ御大將謹て聞召され。去頃腰越にて。神文迄差上しに。御疑晴ざるに依て須臾時節を見合せ。中開きを立んと思ふ處に。存の外御誑意追て返答中上と。仰も敢ぬに。澁谷の昌俊。イヤ此上に御返答延引致さば。由々敷御大事指を敷て近に有。右二ヶ條の御不審今日中に中開有べし。了箇強い梶原はともあれ。某は容赦仕らぬと。口には難面く心に我手より渡して置たる廻文にて。中開を立給と云ぬ計に云廻す。詞ヤア此景高を了箇強と。熟柿を笑ふ澁谷の云分手續し〜。誑意を守り卿の君の首打ふとの叫なければ。此通を鎌倉へ中遣す分のこと。づんど立を末座に控とし武藏坊。ア、須臾お待下されよとおし鎖めたる其處へ。伊勢の三郎義盛花やかに装束改め。廻文の一卷を。忝しく臺に据へ。御前に直せば判官坐上に遷せ給ひ。詞ヤア梶原。土使の一通相濟だれば。彼へ下つて平家へ一味したる者共の。名を一々に讀立よとの給へ。鎌倉殿の上覽にさへ備へられぬ廻文を。拙者に。イヤサ讀と云には子細く有早疾々と仰

に景高立寄て。連判狀の廻解開きユリヤ何じや。詞口の文言我等の寺にはすつきり無字。年號月日も知た事と。操明〜東國八平氏の旗頭大庭の平太景信。同次郎景兼。古郡新左衛門保忠と。讀としてぎつちり話。詞シテ其次の名。サア其は。サア何と。問詰られて。狼狽廻ば。判官梶原廻文捻取。去る一の谷の合戦の時。某に不覺を取せんと。己等一家が勸にて。平家にうら反たる侍幾何ぞや。否と云せぬ證據は是見よ、自筆にて梶原平三景時。同源太景季同平次景高と。親子三人の血判有。斯る舊惡を隠さんが爲に。誑意をかして此廻文奪ひ取んとは。おて〜敷謀よな。此外の連名讀に及はずと。一ツに丸め前なる火鉢へ打込給へは。折筋誘ふ山風に焰々として連判は。忽ち灰となりにける。急に急たる義盛辨慶詞を揃。鎌倉殿へ御申開きの種共成べき。一卷を焼捨給ひしは。不審御賢慮と憚なく中にぞ。ヲ、驚は道理問迄もなし。我心服を明さん。昌俊是へ近く召れ。只今焼捨し廻文のとは疾に鎌倉へ渡すべきを。某が手に留置しに全く舅時忠を憚はるにあらす。今源氏に隨ふ東國の大小名の中にも。連判したる輩すくなからず。事治りし上なればお咎なきにもせよ。廻文御手に入しと聞ば身に覺有者共は。自然と心隔り。終には鎌倉の騒動とならん。鎌倉の騒動は天下の大事。うてを

思ふて焼捨たり。是も我誤にならばなれ天下の爲兄の爲是程に迄思ふ弟を。倭人讒者の偽に惑わされて兄なからも。鎌倉殿の難面を御所存。誠に他人の初と能も例令し世の諺。今義經か身の上に比しと思ひ當りしと。猛く勇める御目の内涙。渦巻斗なり。せつ成君の御悔み思やつて伊勢武藏。感涙催し土佐坊も彼此答もなけりける。梶原は滅らす口某親子は平家を欺く智略の連判。誠に一味した者の爲には結構なれ情と。ひやうまづけハ。氣早き大將ぐつと急立御佩刀に手を掛させ給ば。辨慶中に掛隔たり。ア、御短慮成御振舞。梶原に御遺恨は私事。鎌倉への御返答苦しからずば御免を蒙り某宜しく仕らん。君には先々れ坐の間へいざさせ給へと諫むれば。尤ももどや思けん。ナ、忠臣は危に顯るる。汝の振舞主の難義を身に引受んと。健氣成志し然ハ我に成かわり汝能に計らふべし。義盛來れと引連て。帳臺深く入給ば。梶原平次笑齒に入。詞。サア辨慶焼た廻文は是非もなし。其替に明日共云ぬ。卿の君の首打て渡されよ又依掛れば。イヤサ先達て時忠卿を能登の國へ流れし上。最早卿の君にお構ひのない筈と。云せも果す。ヤア其二分の暗。平家方の娘を具せらるるからハ。鎌倉へ對して謀反と云んに拔差成まい。卿の君の首打て中開有か。但判官殿に痛い腹切せるか。二

ツに一ツ手短い返事承はらんと誦寄。通れぬ手誦を是非もなし。辨慶は拳を握。思案に暮て居たりしガ。ハア其よぐふてんだらうめいしと開時の善も悪も迷の前。北の方の御首打は不忠に似て主君を助る大忠信。いかにも誑意の趣。相心得ゆと述けれハ。詞。ナ、其筈。流石天台坊主程有て尤な氣の付處。然らバ今日八ツの鐘を相圖に女郎さいが死しやつ顔。梶原が受取に參るべし。罷歸ると突立ば昌俊も續て立。詞。必む卿の君に犬死させぬ工夫が大事。合點かと善惡兩人が詞語。一人の心に取納氣遣ある。詞。北の方の御首必ず打よ。念にや及ぶと。目禮するも白眼合。反打掛れば真中に義有土佐坊。俊有梶原忠有武藏范然と。立別てころ一行空の天さがる鄙にはあらぬ卿の君。雲井を出ていつじかに。義經の北の御方をなれて榮ある武家の妻。殊更に御懐胎御腹帯の御祝儀も相濟。れ上届敷は公の事繁く。お心に障る事もやと御乳母。侍従太郎が筈に須臾假居の先々迄。公家武家方の見舞の使者。門前市を爲にける。爰に腰元忍か母親おわさど云お物纏御機嫌伺とて來りける。侍従太郎の妻花の井女房達。能ぞ上られし今日殊なふお寂しそ故。誰をがなれ伽々と思しに。嬉しや。いざとてれ前へ連出る。珍しや此程は何として見ざるぞ。定て四方の紅葉見に。彼方此方と無面白きと斗。浦山



しやどの賜は。御意の通高梅尾嵐山。分て今年は稻荷山の薄紅葉が。いつより見事なまど。世上の噂。ほんに。はりの蚯蚓で聞ばかり。彼方からは早ふ来い此方からは疾ふ来いと。参るも。紅葉見のね囁小細の仕立物。夜を晝に京田舎が打交つて。それは。賑かな秋でござりますすげな。是ど中も義経様の京にござる。故じやと。中を聞は引方判官様鼠負。嬉いやら愛度やらお悦に上りたい。今日よ明日よと思ふ内娘の方から帯のね祝も。なせお悦に参らぬと叱て越ました。文をろくに見や見ず何か捨置取敢ぬね悦び。何ぞ上たいと思へど結好な物はあなたに有餘。責て是を差出す袂の内の服紗物。是ハ河馬と中て文字には海馬とやら書げな。めんよう奇たいのね産の咒ひ。私が曾祖母が十九人祖母ハ劣て十三人。母から私ハ手に傳へあの忍を産む迄ふ。一度も不覺の産をせず満足に産並た。腹覺の有捧げ物おつ付御産の月満て。此海馬に飛らりと召し。遣非遣使五位の尉源の義経様の若君我なりと。大手の門をぎつと開き安々と御誕生。お愛たやへ、ホ、ハアしんどやと饒りける。詞。ほんにつべこべ。と長口上息がはびむ。娘茶一ツ汲でたも中せば君も可笑の。氣輕にわさ。と物いやる。ねわさとはよふ付やつたと袖打覆ひ給ひける。斯る處へ與使の女

中々花の井様。君よりのね使に辨慶様ね出なりと。ヤ上バ女房達。サア。女嫌の武藏殿が見へたといの濡かけて否がらせ。お慰みにせまいか。よかる。と立騒ぐ。詞。是々皆の衆君をりのお使なれハ毎もと違どや。必々嫌まい先つれ合を呼で下され。おわさ女煎辨慶と云人見てか。未なら此に居てね違なれ。かんまへて皆の衆くつ。吹出まぬぞやとつま諸共に出向ふ。何に勝て武藏坊縁塗取て打かづき。大紋の袴踏したね静々と與入。むつと座して一禮し。詞。存たと違ふて御顔色もみづ。と。御機嫌の体先安堵仕る。是ど中も夫婦の衆の御介抱。大切に成る。御苦勞の甲斐が見て。執着に存るよ。是け。忝ない。御挨拶。御主人なから平産有迄ハ此所に預りの卿の君。殊に御存の如く御母君。娘ハ平産所の爲願ひを立。伊勢参宮の留守の内。彌我々が心遣御推量。義経公の御前幾重にも御執成。否々執成に及。物事の執成と云は。可あれハ合なことを十分に云が執成。詞。辨慶ハそれ嫌ひ。見た通を罷り歸り眞直に中さは。君も無御満足。扱是は御夫婦への咄ぢない。后學の爲郷の君への御物語。惣じて勇士の戦場へ趣く時は。三忘と中て忘る。と三ツ有。國を出る時家を忘れ。境を過る時妻子を忘れ。畷陣に望んで我身を忘る。婦人の懐胎も先其如。詞。一氣腹に盈る所取も直さず

勇士の國を出る時。御腹帯を成るゝ所が勇士の妻子を忘るゝ所。既に月満すは御産の綴を解るゝは勇士の敵陣へ駈入て。是ぞ能き敵を参なれ遁すまじと引組で。首を取取取るゝか能子を産は得産ぬか。生るか死か生死の境。此を能御合點なされ豫てなき身と思召せば。其期ふ臨んで不覺を取ぬ。ナフ御夫婦そふでござらぬか。ヤ我中ス事斗。肝腎勘文の御内談違なる。此の端近密に御意得たし。女中方も遠慮めされ奥へ参らふか。いざれ通り御案内と御の君を誘ひ。先に立バ喃御夫婦。豫てなき身と存ねバ。其跡に必未練が出でハ御坐らぬかと。鎌倉殿の難題を。終打明て云へば得を。須臾心おくの間に打連伴ひ入にける。年若けれ共利發者しのふ座配しナフ皆様。何との御内談暇のいらふも知まいに。お盃でも出してはの。それ〜マアお煙草益れ茶もて行ぞや。よからふ〜れ菓子も序に頼むぞや。然ば此間にちをつと母様此頃は顔も見ず。れ懐しやと立寄ば。其方も息災に有たの。明暮側に引居て見れ共飽ぬ獨子を。手放して置親心親懐しと思より。百千倍とは知ぬかや。假令御前の御意に入共。必々朋輩衆を袖にすな。隘口告口た〜なんぞ諸事を内端と控目に。出かし立して嫉るゝな。林の中にも喬木は風が枝をハ折ぞとよ。一人寢覺の度毎に逢ハ何云を斯云ふと。積て置た數々も逢ハ嬉し

うて口へ出ぬ。何を云も彼を云も身を大事に。煩ふてハしたもんなと手を取交し撫交し。心を盡す親と子の別なき風情を道理なる。稍有て侍従大郎奥より出る屈托顔。おわさ目早是は〜侍従様。阿の顔の色思れ目の内も潤で。氣の浮ぬ御容御内談と云は何ぞ。舌〜氣遣の氣の字もない。氣の浮ぬと微塵もなく。心がしよぎ〜とぼんを待かねる。ヤ能次手じや態と往も逢ふと存じた幸。じやちよと物語致さふ。別の事でもない物でござる。拙者其許の息女此忍に大執心。エイと親子が興さまし娘は母の後陰。少ふ成て身を忍ぶ。阿は辭退して貰まい惚て〜今日八ッ迄の内に貰ハねば。此方の工面が瓦羅りと違ふ。今奥の時計を見が九ッ過半時にはまだ成らぬ。秋の日は短かい八ッに成は手間暇入らず。サアおつと云て貰いたい。時忠の執權侍従太郎。年よ不足もない男。浮氣でない嘘言やさぬサア下さるかサアをさじやと。眞面目に成ばげら〜と嘲り笑ひ。阿有難い忝けない。深山の斧のまげら眉誰取上人もなく。徒らに埋もるゝ我娘を御執心。進せましたら何となされます。ハテ女房にしますわいの。あれ花の井様と云美しい奥様の有上に。否てや花の井は暇やつて。忍を奥様にするわいの。侍眞利愛宕白山爲ないと。云後に立開花の井くはつと急。顔は上氣の爪紅ちすぢ走り寄。阿何じ

や花の井の暇くれる。何をどぶして暇下さる子細の有。譯聞ねば自らも武士の娘。ついでつ  
 くと暇は取ぬ其譯聞ふ。詞 ヤア洒落くさい。昔より女房の衣服に喩へ。飽たれば何でも脱替  
 ても外の着物を着はひ。是より外の子細はない小言云ずと歸れ。ムウ聞へた。飽れて添て  
 は面白くない暇取た。實 正忍を女房に持やるの。諺言。持て見や。持て見せぬぞ。見  
 るぞや。見せうと我を張て。負す劣らぬ争へば。見兼てれわさ押隔て。呆れて太郎様にはい  
 つそ手の付られぬ。慮外ながらはしたる奥様。假令いか様にれつしやる共。お前を去せてを  
 んならばど。娘を進せそふなおわさじやと思召か。女御后に成ても。道あらぬ榮花を悦や  
 うな私共でいござんせぬ。氣遣せず共早中直らしやんせ。しつかり氣遣の沙汰じや迄と嘲  
 ければ。スリヤ氣遣の様に見ゆるかや。詞 やう多段てござりませぬ真氣遣でござりますわい  
 の。ハアはつと夫婦の顔見合須臾く詞もなかりしが。稍有て花の井。實にや思ひ内におれは色  
 外に顯る。氣違共狂人共見ゆる筈。心は疾から氣違に成て居る。其分は。詞 今日武藏殿の参  
 られしは。郷の君の首打て渡せと鎌倉よりの御難題。其爲に梶原平次景高。土佐坊昌俊の上  
 浴。打て出さねば叶はぬに極り。悲しや郷の君様のお首を取に見はひの。お幼稚から夫婦の

者が手しほに掛。育て上たあのお子。畏つた御勝手になされど。そもや首がきらされぬか。  
 殊更只ならぬね身の上。辨慶殿も切兼て取つ置つ思案の上。昔しよりの習ひではなし人の見  
 知つたね子でもなし。身代を立まいか其身代は誰彼と穿義の上。詞 年頃容儀も相應した此忍そ  
 れどもお家譜代相傳の人でもなく。命を下されと云程の。恩を見せたと云ではなし。無躰に  
 は殺され合點してはよも死なまい。何とせおとせぬ斯せふでは有まいか。幸おわさも來  
 て居やる大人氣なけれと太郎殿。忍に執心など云掛て。詞 無理に女房にお貰なされ。そこで私  
 が愠氣するの。悪い奴じやと暇か出る心得たも暇取は。サア今日の唯今から忍は侍従が女房じ  
 やと。婚献の盃した其上で。女房共先斯くじやと分を云て。我女房に成からの汝が爲にもお  
 主の身代。死で呉と延引させぬ。命をお貰ひ成れぬか。是能るふと談合づく。不調方な夫婦喧  
 嘩も。お主の命助けたさ。其なら己の娘は殺しても大事ないか。身勝手などを云道知す物知ぞ  
 と。見下も耻けれと正眞の脊に腹とやら。コレわさ女房了簡は有まいか。夫婦の者の苦みを  
 思遣てと計りにて。かつぼど伏して泣けれ。夫も座したる膝を改め。詞 浮世の中の無心と云  
 には是に上越す無心も有まい。其返報には夫婦の者を。ハッ裂にも成されちつ共惜まぬ。惜まぬ

命は二ツおれ共一ツも今日の役に立ぬ。本意なき無念と悲さを。推量あれと計りにてはら〜と泣ければ。忍進み出扱〜神あらぬ身は。其なまど〜は存せいで。年に似合ぬ恥知らむと思ひ悔りし。詞 十年二十年の宮仕もたつた一日御奉公中ても。あ主様に違はない其難義か何と聞て居れおぞ。私が様な者の首てもれ役にさへ立ならば。願ふても御身代に立たい。サア首切て御用に立て下さんせ。詞 中母様四年跡の大煩ひ壘程樂は利かず。死る命をお前の精力。たつた一ツで助つたれど。其時死だなど断念て下さんせ。私はお身代に死ますと。聞も敢ず飛掛り抱しめ〜。詞 是つか〜と物云んなみの。黙ておよぞ。是々此子いな。一人で出来た子ではござんせぬ。顔も知らず名も知らぬと父親が有。其人を尋て渡す迄は指も指せぬ。卒爾に斬しやつたら聞てつちやござんせぬぞ。コリヤやい〜。如何に狼狽されど。母親斗で出来る子の三千世界に有るか。其上顔も知らず名も知らぬ父親を尋ね。手渡しするとは何を印に尋るぞ。偽者表裏者。得心せぬ者無理やり身代に立おとは云ぬわい。子心にさへ主従の道を辨ふるに。見限り果たる女め娘を連て早歸れ。心忙し立て失せお女房こちへと立上る。なふす〜待て給。詞 偽者と云れては親故此子が顔汚し。顔も知らず名も知らぬ。夫を尋る印は是と。

上の二重をおし脱は右は變ぬ語袖に。左斗が振袖の濃紅の染模様。橘ならぬ袖の香の昔床しく忍しく。是を御覽なされても。子細を云ずは御合點か參まじ。娘への聞前恥しき昔話なれ共。詞 私は元西の國の在所者。親は所の何某。十八年以前頃は夜もなが月の廿六夜の月まのちの夜。私ごの所は諸方の入込。誰どの知す袖を引れてあの〜ものを云間もなく。聞がり紛れのつひ轉寢。つらや人の足音に。驚いて其人は起往袂を捕ゆる柏子行柏子。ちぎれて我手に残りしは此振袖。假寢の情はたつた一度の淺けれども。妹脊の縁や深かりけん。其月より身も重く臙胎し。詞 友達衆の介抱にて産落せし此忍。父なし子産でん家の耻。子を捨て嫁入せよと親々の異見。御尤とは思なから二人の夫り重まじ。縁あればころ子迄産ぶ物。此袖を知るべに尋ね逢んど。國を出て十七年水子を懐き抱へ漂泊ひ。種々の憂難わの年迄育てあげても此子の縁の薄いのか我身の縁の薄いのか。今に尋ね逢ね共此上にまご五か十年でも。女の念力。是こそ娘よ父御よと。名乗合る其迄は。詞 蚤にも食せぬ大事の娘。相應に物の道理も忠義も知たれど。お役よ立ぬり右の譯。奥怯てない未練でない中分。詞 なが〜と嘸れ氣か急ふサアれ入なされ娘立やお暇中そふ。コレ立やいのだと云を立兼見捨兼親子心の隔の一重。誰とは知ぞ忍

か脊骨障子越。ぐつと刺て一トあぐりうんと悶ゆる苦に。是はと驚く母の親侍従夫婦も仰天し  
 ヤア殺た人は武藏坊。斯る狼籍心得難し如何に〜と語掛る。母ハ泣やら氣ハ狂乱。扱ハ夫  
 婦の衆と同服に成て殺しやつたの聞ぬ〜。元の様にして歸しやと絶り喚げば。こりややい。  
 聲低にものを言。否高云ふなせ切やつた。其は段々子細が有。まあ手負を俾り介抱せよ、  
 何じや悼れ。悼はれと云程なら切ぬがよいと放さねば。待々見する物有とおし肌脱はは如何  
 に。下着の衣の紅。大振袖の伊達摸様は見たか。此片袖は其方にあらふ。播州姫路の福  
 井村十一兵衛が處の月待。廿六夜の假寝はうなたで有たな。エイ其時のお前の名は。チ書寫山  
 の鬼若丸。すれバお前は娘が父御。其父御が又娘をば。チ殺たハ身代お主のお役に立るわい。  
 ハア悲しけれ共るなれば恨みない。是なふ娘尋ねたそなたの父御と云ハ辨慶様。御對面中  
 しわけやいのと。抱起せバ起されて。母様何ぞあつしやるるおなが。耳が聞へぬも目が見  
 へぬ。必ぞ辨慶が側に居て前も殺されて下さんな。アハずつない苦しいと云聲も次第〜に  
 狭り來て。はや玉の緒も切果て此世の縁は絶よけり。ハア悲しや最早息がせぬわいのと。開て  
 皆々立騒ぎ見れ共ほとをり三りにて。其甲斐更みなかりけり。母は膝に抱き上げ。扱も〜淺

ましや如何なる因果を生れ性ぞいの。父御を尋ね初たハ五ツの時。詞。中シカ、様余所の子供衆  
 には父様も母様も有私にいなせ父様がござらぬ。逢せてくだされと云初て以來。一年〜智慧  
 の付に隨ひ。分を聞いて猶逢たいとせがむ故。在所にも在にあられず其夜は都の衆も有ものた。  
 若やと都へ上て尋ても。知なんだも道理な様有たもの。可愛や此子は一生父御を戀慕ひ。  
 一生物を思ひ詰今日と云今日尋ね逢。責て一時半時も我子か父様か一所にもおる事か。言葉  
 もかわさす然も父御の手に掛り。辨慶の側に居て母様も殺されなと。云て死だ心の内。如何斗  
 苦かりはらん。父御の仕方も憐たらしい。同殺す道ならバ。互に親よ娘よと。顔も見たり見せ  
 たり納得させての上ならば。是程には思あまいヤレ娘よ父御前こそ難面く共。母に恨みの有ま  
 いにたつたま一度母様と。云て吳よと斗にて。空しき死骸を抱しめ〜口説立聲も惜ます泣居  
 たる。辨慶も諸共に咽涙をれし隠し。詞。よしな母が悔み言咄しを聞と均しく扱ハ我子と飛  
 立斗。生顔も見たかりしが。なまなか見つ見てハ未練の心も起らんかと。生ぬやうにゑぐりし  
 ものト堪も堪よふか辨慶とても木竹ではなし。生てより此年迄後にも先にもたつた一度。戯  
 業なとして生れたる。我子と聞て悪くからふか可愛かるまいか。其様に泣を見て太郎御夫婦の

居やらすべし。泣より泣ぬ苦さは鳴く蟬をりも中々よ。鳴ぬ螢の身を焦す小哥も我身に知れたり。是に付ても親の恩の深きと。今取分て思知る。唐土の契贈か母の小袖を母呂と名付。戰場迄持たりと云其を學ぶにはあらぬ共。此下着は母の手づから縫仕立て下されし。汝に片袖を取られたれ共。亡母にそふ心して縫も直さず。振袖の此儘四國九國の戰場。今日の今迄肌を放さず持たればころ。名も知ず顔も知らぬ親と子の印となつて十七年目に廻り逢ひ。主君の絶命の大事のお役に立ると。單に亡母の此小袖に手を通し。親子を一所に引合給ふ廣大無邊の親の慈悲。子故に親は名を揚る。能死な出来しな。詞とは云つゝも息有うち是こそ尋た父じやはやいと。此な顔でも見たらば無福からう物。是計りが殘多い親も一生子も一生。云始めの云納。責て一ト口父様かいのと云ふて呉と。生た時れ産聲をり外には泣ぬ辨慶が。三十余年の溜涙一度に堰かけたがり掛。侍従夫婦の貫位。四人の涙入ツの袖入ツの時計を打交て。悲し事の数々を云盡ころ果しなき。辨慶はつと心付。南無三寶歎きに紛れしか。半時の時計も聞ざりしにハヤ入ツ。御首打て渡さんと梶原に契約の刻限。時移つては事六かし。サア太郎殿卿の君の首打て渡されよ。是より我は檢使の役と。席を改め座しけをば。實に公事に私

歎かへ難し。唯今郷の君の御首打中と身繕ひ。忍び死骸引寄て敢なく首を打落し。詞サア受取れよとどつかと座し。返す刀を我身の弓手の小脇に突込きりりと引廻す。物に動せぬ武藏が驚き妻の周章て絶り付兎角の詞もなく斗。詞ヤア騒くまい武藏殿。我切腹御合點がいかに。是も御邊か細工の卿の君の此似花。尤大概に似たれ共。誠は雲の上人と地下人の色香の違梶原が邪智強き眼に見咎め。詮ないとなつてはと思ふに付。郷の君の乳母とハ鎌倉殿も知し召たる。此侍従太郎が首添て渡さば。天地を見抜梶原もよもつくり花とは云まい。誠の花と見せももの。忍に犬死もさせまい物と思ふゆへ。御邊か細工も添て遣る。心斗の色香ぞや。詞吹るな女房是迄御存ないとを。うれないてれくへしらするか。万事武藏殿の差圖を受。あわさど中よ御平産の跡々迄。心を付るが夫への忠節。心得たるか泣なく。サア武藏殿時移る首打て給。サ、道理を聞上は辭退中さぬ觀念あれと抜放し。閃と見し刀の影首は前へぞ落にける。直に袂をれし切し二ツの首を。包むに余り目に洩る。涙と歎果しなく去べくと首を左右に掻抱き。立上れば是な須臾と取付て。我は未來の約束せん。我は親子の一世の限共に名殘に今一度。亡顔見て給なふと泣と慕へど焦るれど。心強くも振捨て見せぬも愁し見ぬも愛し

歸らぬ道におてがるゝ夫の別れ子の別れ。二ツ歎を一筋に見捨て。御所へぞ歸ける

第四 道行伊勢みやげ

思ふと。内外の宮に。引鈴の。鳴ずばよもやさばかりの。参宮道者はよもあらじ。義經の北の方。卿の君御懐胎御産の紐の安々と。時忠の御臺所娘思の御願立。二人三人の御供にて何か主やら家來やら。皆一様の染浴衣。着連て一笠のヤアまれの。肩にお被伊勢土産。包む人目や風呂敷や旅立。頃ハ曉の明星が茶屋を跡に見て。馴一都へ下向有櫛田の宿は名のみして。かみに擬へる梳帽子其色艶も行人の。袖に綻ると伊勢比丘尼。今の目元は椋本へ。晩に必ず松坂と。媚垂て行く雲出。是ぞ津の町かうの彌陀。太神宮と御一鉢佛神水波と分共。隔も浪の水溜。窪田も越て嬉野や果しなが野も。打過て。都の方へ向もとの木蔭に須臾休らひ給ひ。参りの時は一足も早ふ願の掛たさに。何處が何處やら齧齧と急心より此關の。尊き地藏もころころに拜しとの愚さよ。あれれ其處へ乗掛の馬子が小哥も外ならぬ。關のお地藏ハ親よりも。増じや似合のつま賜る。其一節も。御慈悲の。余りて深き其中に分て女の緞帶。五月めを守らんと此御佛の誓なれば。心に願かけまくも。忝げなしと伏拜み心も足もいろいと。坂の下よ

り鈴鹿山。山又山の土山に。誘嵐や。散や紅葉の乱れして。空に散ぬる散書。此處ハ硯の水口や。田面に落る雁の一行列なる如くにて。後や先やと子供の参宮た陰での。ぬけたとさ。あゝいととつとつと。さつと流るゝ横田川。淺く渡りて深きを知る。神の恵の動きなき石部の宿より梅の木村薬も花の香に匂ふ。好御所風となふられて人目恥ゆく。袖獲ひ。忍ぶ程猶聲々に。あれはたしかに都の女蔭。姿優しくしほらしく。其云て華美ならず移り氣な人心。裾袂の形風流にしんぞ此身を打込だ。チ、笑止。唄を聞ば聲の綾。流石に都遠からず。心勇みの花摺衣。千草の錦故郷に。かへすも須臾名に高き草津の。驛にぞ。歌「着給ふ。まどしや世の中能との。浦々里々。参宮道者の家々此家印。ござれれ是についてござれのよいとの。長閑に治る君が世のお禮参りの人群衆鎌倉参勤京上り。往來の人に荷ひ賣。女川仕出のでんがく鹽梅よしと賣聲に。物見長きは道者の癖我もと立集り。詞「なま〜皆の衆豆腐の初りでんがくの由來聞まいか。コリヤよかろ所望くと立かれば。鈍作云ふも商ひ口鹿爪らしく團扇を揚げ。詞「東西〜豆腐の因縁かたく共。耳をすまして聞しめせ。昔々天竺の達磨大師とせしは。顔に似合ぬ豆好で坐禪豆と名付。常に賞翫有けるが。初て豆腐を思ひ付

とて。壁を白眼で九年目に悟を開き。南無おみとうふくと那落の鍋へ落入たる湯豆腐も。終には浮み上る所を。南無おみ杵子の救はせ給ふ誓願なり。扱唐土廿四孝のとう婦人と云ふ嫁子は。豆腐の湯薬に孝行者其より和國辨當に弘つて。煮染に成竹輪に成。竹面豆腐は細きを厭はず。岡部とば白を嚙たる大内言葉。ね公家方には小野の道風。武家方には敵陣へ寄豆腐。名を萬天に揚豆腐。わきて此々々でんがくと才奉るは。忝けなくも白河の院より始て。都に祇園二軒茶屋。浪花に生玉島の茶屋。菜飯にでんがく品よいと神いさめも成ぞろし。其に増りし女川のでんがく。けんくしたるれ方には。生地焼にて参らする何かな不食な人でも。此太て飯櫃の底を敲いてでんぐでんぐ。唇にさへる否や汲込。飛込。咽は鎌倉海道の名物也としやべりける。有あふ人々吐と笑ひ豆腐の因縁聞たれば。心も晴やれ能慰みと皆々別て通りける。郷の君の御母上伊勢参宮の歸り足。袋の地下に畧せ共供の女中の取形も。ばんじやりとして可愛らし。荷片付でんがくやは不思議うふに立寄て。ヤア何も並々のれ人でのなさそふなが。男ざれも運ず伊勢参宮でござんすかと。掛問られて御臺所。然ばとよ。遙か西國方の者にて候ふが。是成二人を伴ふて。扱参と半分云せず。扱々とした嘘つかしやんな。詞光を

身の廻は田舎めいた参宮人と見れ共。物とし襦はづれれ都も都の内裏上藤のひんぬきと。星を指れてはつと三人顔見合て猶豫所へ。先定の侍鉄棒引摺。御上使梶原殿義經の北の方郷の君。乳母侍従太郎主従の首持せ。お通り成ぞ片寄ませいと呼はらせ。鎌倉へ歸る急の道中御臺は斯と開きりも。梶原が前に轉び出聲も涙にせぐり上。自は郷の君が母。平産の祈りの甲斐もなく。身ニツに成もせて刃に掛り死るとは。天照神にも捨られしか。宿世如何成報ぞや。姫と侍従が死顔を。此世の名残に只一目見せて給われ梶原殿と。消入計りに歎るれば平次景高ぐつと白眼。郷の君が母めとは能處で出替せた。おのをも一ツ首にして鎌倉へ連行。おれ引捕れ家來共。承はると一度に寄を。どつこぬさせぬと。てんがくやが。荷ひの負畜れつ取て難立く敲き退け。御臺の世話を焼豆腐。背後に圍ふて立たるは鹽梅よしとぞ見へにける。ヤア云はれぬみろめが肩持立。彼奴等から先細掛いと聲で威せさせら笑ひ。商賣の豆腐屋かでんかく料理の搦梅見よと。負畜のつくく並んぶる。主も家來も一くるめ打働れて詮方なく一度にべつと逃散たり。御臺を始めつきく造思掛なきでんかくやか。身に引掛ての働きは知音の人か何ぞいのだ。云間程なく大わらはに成て立歸れバ。詞コレく其方は何人で。



御臺様の御介抱名は何と云人ぞと劇しげに問掛れば。エ、急な所で名の穿鑿云間もござらぬ。義経様の由縁を聞て。世話をするから何ぞで有ふと思はしやませ。アレ此處へ敵の奴原一度で懲め手込の捕梅。二杯三杯八杯豆腐ざく／＼豆腐に刻んで呉んど。追まくり打拂ひ又立歸て。詞 コレ／＼／＼此處に居れぬ早れ退。跡は拙者が受取早／＼と急立る。イヤコレ重ねて禮云爲。其許の名をばついちよつと。エ、此脊戸際に根問葉問。云なら概略んで斯や某は。義経様の妾静か爲にり現在兄。親磯の禪師に勘當受し藤彌太とや者。是から跡は追付て道すがらやましよ一足も先へお出／＼扱は静の兄御よの。エ、静慮をやらざりませぬ。急に／＼と主従三人都の方へ落しやる。平次景高取て返し。詞 ヤア下主めよふも／＼も邪魔ひろいで三人共に逆したな。代りには汝れが首削落す観念せよと。一文字に切て掛る。シヤ直縁心得しと負奮で丁を受留る。偽勢斗りに梶原が刀と其儘豆腐やが。負奮も動かす須臾が程。相手と相手が顔見合。前後を見合兩人か。耳と耳とに互の口。何やら囁き領承合。出来た／＼此上をしおふすれば。コリヤ藤彌太約束の通り大名じやぞ。都には身か家來番場の忠太を殘置。云合て首尾能せよ。ハ、ア天晴梶原様。斯した仕組で付込からは義経の首は我手の内。都の首尾を氣遣あら

れぬ。チ、ろふじや／＼此上ながら人に同腹じやと悟られぬ。心得たりと又立向ひ二打三打。義経を誑る爲の仕組の切合。遠い手立を藤彌太に。退れて惣と逆て行。梶原平次が恐ろしき謀の程こそ。歌 天下。泰平長久の。弓も袋に納れやたけ。心のものゝふの。敵に後を見せいで。戀に腰を抜した。名に負ふ静か一奏秘曲の底を堀川の。御所は酒宴の表座敷いつに勝て賑はへり。御酒の機嫌も義経公。静か膝に寄添給ひ。詞 いつ聞ても美しい器量につる／＼琴の音色。取分今日より義経が北の方に直すれば琴の調子も一際勝れ。我つまどのくらゐの高さ。母を呼寄悦ばせいと云付しが未た來ぬか。早／＼／＼い／＼と重ねて急ぐ召使。しよ浪寄する磯の禪師只今はと立出る。京に名うての扇の指南。つさに離れて翳もなき引扱髪之二ツ折。色はなけれど香は残る昔を思や梅の。花の姿のあたは物惜や老木とひねぬらん。詞 母様おあがりなされたか。我君様のね待かねと氷いらすの親子の取次。磯の禪師參上と。手をつけば義経公。詞 アレかたいは／＼。女の三ツゆび物に假令て見時は。延紙に書たる一筆啓上かたいも道理。神代此方承はらぬ女の名に磯の禪師。其かたみを取置て向後は義経が姑御寮。斯ふ斗では合点がいくまゝ。ね知やる通り頼朝の咎に依て。あつたら花の郷の君散された聞の寂し

静を今より北の方本妻と定めねば。鎌倉の疑ひ晴ぬぞ。家老共が勸めに依て今日より静は奥様。此愛度を云聞せ老の身の悦ひに。重ねの悦を静に咄せとありければ。詞中母様の自らが身の上は冥加に餘る君の御情。また此上の情は前前の勘當遊ばした兄磯の藤彌太様。縁と云ふか不思議と云ふか。郷の君のれおくる様御参宮の下向道。梶原が見答て危き所を身に代。比類もあき大手柄。れ怪我もさせず供して此館へ。歸りなされ。顔見た時の驚くり嬉しさ。思ひ掛なき對面も。兄弟の縁の深さと聞に驚く母の禪師。アウ何といやる兄の藤彌太が此御所へ来て居とや。アイ戻らしやつたは一日。此度の働も底の心は勘當が許されたさ。我君も感じ給ひ。親子の中を直せと有て刀迄下さりました。何ぞや刀迄給ひつた。是は冥加ない。して其兄は何處に居るぞ。サア兄様は刀の冥加武士に歸つた身の悦び。神詣して來ふと今はれ留守。追付下向なされ程に勘當許して進せて。静が願へば義經も許してやれと御挨拶。ハア、恐れ有や我々式の俸が勘當。あつとや管なれ。其處を得云ぬ此母が磯の禪師と中名は。死別し夫の本名。連台も昔は武士の數も入し人。彼兄が惡黨にて武士を忘れし博奕好。世間を嘘で云捨める其殘余が親にも掛り。浪人とした不孝者。かたわあ子に猶可愛と親の

貧苦の厭もせず。七年前の臨終にも念佛はすさす。此のらめは何處に居る根性を直しなば。父が勘當悔しかると思死が悼しさに。詞ハテ案じさつしるな。連合の死後に此母が磯の禪師と名を呼ば夫婦此世に居る同前。心さへ直つたら二親一所に許すも同然。チ、ろふじや嬉しうおじやるとそれで浮世の思を晴し。迷いぬ正念大往生。連合に約束の詞も反古にならぬから。女にあらぬ男の名磯の禪師と世にうたわれ。今櫻指南の營に静の育てあげたれども。兄が性根はまじ直らぬか詫言には何故來ぬぞ。待に待た母なれと立かへつて見る時は。詞のし様が氣に入ぬ。静何故と見て見や。我君のお由縁へ御奉公せしも。其許や母へ繋がる縁。何の差置先母か方へ来て。此度の様子を斯々といふたらばおれが叱らふか。待處へは來もせいでお館へ来て手柄顔。殊に禪師が來るを知つて此處に居ぬの出違たか。何程父親の遺言でも。性根を見ねば許されぬ。斯念入るも其許が大事。又彼奴が無法出さば。兄にかつて妹迄君の愛想も盡やうかと。彼方此方を思ひ子の性根を確と見る迄は。御返事須臾御容赦と。女なごらも跡先思ひ道理を立て申せしは。磯の禪師と男名を呼るゝ器量と知れたり。詞ホウ母か詞尤々。此義經が謂れざる挨拶より。落ぶれたる昔の話座もめいつて氣も浮ぬ。今云通り静は本妻姑の

磯の禪師。重ねて舞も望まれまい。何ぞ此座をわつさり其儘下さし。扇の手。所望しと有  
 けれバ。ア、つかもなない此年寄。舞たどて謡たどて何がわつさり致ませふ。是非お所望なら  
 装束して。衣裳で化す老の舞。此ではお許し下されて辭退も聞かず。装束の舞は奥  
 で見る。年寄ばとて捨られぬ伊勢物語の業平。九十九になる婆アとさへねられた例も有ハ  
 る。ひらに。のお詞に静も側からは母様。御辭退返つて慮外。さあしとせり立られ。ム  
 是非もなない其なら舞まじよ。色も香もない此母が扇取手も皺だらけ。つと立ておし開。  
 北嵯峨の踊りつららほうしをしゃんと着て踊る振が面白。芳野初瀬の花よりも。紅葉より  
 も戀しき人は見たい物じや。所々お参りやつてと下向めされ梅尾賣茶。ホ、ハ、チ、耻かし  
 やお笑々。此舞直しはあれにてと微笑行ば義経も。打連。奥に入給ふ。跡に静は兄弟思ひ母  
 様御出は知て有に。此兄様なせ遅と氣を揉あせる後より。北の方静様。我君の召ますと腰元姿  
 見すばらしく。立出給ふ卿の君。静りはつと忍入。涙と共に御手を取。定つた御本妻卿の君  
 様共有ふ身の。鎌倉の聞を憚り。忍か名をかり初に。腰元姿の勿躰なさ。れ身の爲とは云なら  
 ら賤い静が上に立。忍とふせぬまふせいと。人目を粧ふ主顔も。唯ならぬれ身の上お腹に

さるやと様を。産迄の辛抱と堪忍して下さりませ。詞。なふ斷に及ぶとかいの。辨慶の心難面く  
 ば今は世にない我命。誠を云はこ尼法師共様をかへ。先立やつた忍の跡を吊ふが道なれど。輪  
 廻きたない女の心其迄は得思明らかぬ。斯して殿のお側に置て下さるが。皆の衆の情忘れはせ  
 ぬ。かまゑて。遠慮なしにかしこなして。忍々と頼むぞや。詞。斯いふ内も人目わり北の方様  
 ぬぞ此方へ。座を立給へ抱留。其れ心根が猶れいとし。上々様に苦くない物と思しに。  
 此な災難も有物か。人の名も多に忍どは誰が付て。今では北の方様のお身を忍。世を忍ぶ忌  
 ししい名で有はいと。かへら忍とをかき口説く。遣戸口に咳ひ兄の藤彌太が立かへれば。静  
 は色目を悟られじとコリヤ忍。兄様の今お歸りを母様へおしらせ申せ。アイといらへて立給  
 ぶを。詞。ア、是々々。先待たしの殿。母への詫言ハ早ふても遅ふても。否應云とぬ義経公の  
 取持。理届くさい母人も今度のはなが手柄を聞て。四も五も云ず合点で有ふ。イ、エお前やわ  
 しが思やうに合點なりやよけれ共。物毎に念入母様。假令大將の詞が掛らふが何を手柄を成  
 れふが。それには乗らぬ日頃の氣質。ぬらりくらりの間に合者。心の直つたを驚りと見届。其  
 上のおとおつしやつた。詞。ハテ小むづかしい心の直る直らぬは。嗅で知るか見て知か。其片意

地に懲果て今朝からの神参り。上加茂下加茂祇園の社。母の片意地止給へと祈程にける程に日脚も傾く腹も傾く幸の二軒茶屋。立寄端も元豆腐や。でんがく申から出世した二本差の身祝酒。俄武士の尾も見ず。微酔機嫌で立出れば。おいと跡から呼返で見れば面目なや。差付ぬ悲しさとんと刀を忘れて置た。何も彼も殿が下され此様な待に成たれども。詞なふく同じ差物でもでんがく申と違て。刀脇差は差悪い。是忍殿此様に身の耻を打開て云正直男。耻の序に心の思はく。耻かゝそあとかゝすまいと忍殿のお返事次第。此館へ来てちらりと見るより。首丈惚て居すると。ほうと抱付振袖の肌へ手を入媚垂れば。こりや兄様。戯業斗勿躰ないと引放せば。詞いや戯業じやない眞實物た。妹の仕ふ腰元に兄の惚るが勿躰ないと。如何して忍が勿躰ない。勿躰ない分開ふと。問詰られて南無三と驚ながら左あらぬ風情。詞エ、科々しい言葉答。勿躰ないと言たいな。親の勘當願ふ身が其訴訟を放て置て。脇道の姪。親の眞加に盡さしやろ。勿躰ないと言たが誤でござんすか。母様の奥の間で御所望の今様一トとし。お装束も出来たやら笛も鳴る鼓も調べる。ね前も他所から拜見して。舞もすんだ其上愛度たお親子の御對面。わしも忍も三味線の役人。心も急ばお先へと言紛して急行。藤彌太は兩人が詞

の端々素振造ぐつと吞込顔魂。鏡倉よりの忍者共。奥には白髪之母の舞。聲の細りも今様當流。琴三味線の音も戀に。寢巻の衣の肌薄し。愁いぞ憂ぞなんとせふ。詞フウ掬は卿の君を忍にして忍の首を氣疎し。やつちやしてこゝ此通り注進せおか。いやく。まご暮切に御門の出入。答られてはむつかしい。ハア、如何せうあ。詞深き思の淵と成。詞ホウそれよ。急ては事を仕損する。此藤彌太を犬ども知ぞ。甘ふ参つた判官殿。マア奥へ往て勘當のいやし。妹が今の素振。見に付聞に付。胸に迫し數々の。袖も乾ぬ。沖の石。哥の唱哥に引替て一筆知せの硯石。床の料紙を幸と蓋押明て摺墨より。回む心を試んと三味線携へ。靜御前。空酔づくり千鳥足。一醉たどさ。土手の細道危い合点じや危ない。兄御何を書んすど。聲掛られて驚くりしあたふた袖に狀押隠し。詞そなは三味の役ではないか。此處へ來の間が闕ふサア。奥へ。イヤ大事をぞんせね。母様の舞も一番すんで我君の御機嫌。酒一ツ呑も一ツ呑と平強に強られて。酒の揚句に亂る。片小浪彼方へざらり。此方へざらり。彼方よりは此方さんのざらり。ざらり。書しやんした今の文隠は曲者其見たい。否其文とはあの物よ。隠た分りあの忍に思ひく。いよくひげんと書たるは。穂出の種が花薄。ほん

に誓文。詞戀じや有まいよくと見た。よくとは妹何を見た。まご直らぬ心を見た。人への洩さ  
 ぬ兄弟中。サア有様に云しやんせ。チ、云なれば云お我も云。私に云とは何の事。ヤアとばけ  
 まい。忍と云は郷の君。濡にと寄抱付腹帯を懐に見た。其見付て如何さしやる。鎌倉へ注  
 進する。エイ。フウ扱は勘當詫言とは。チ、嘘じや。梶原と心を合せ。伊勢道くら付込で静か  
 兄が味方顔。釋迦でも食す鹽梅よし。斯した思案はまごでんかく。義經の首を申差と。駈出す  
 を引止め。詞。エ、きよくもあゝ兄様。悪事に與して身が立ふか。恐ろしい謀の段々聞た者は妹  
 斗。外へは聞へぬ奥の咄。鼓や歌に紛るゝもれ前の仕合親の慈悲。サア舞の終らぬ内に悪心を  
 翻へし。善心に成て下されど。兄を思ひの眞實心涙は詞に先立ち。詞。ヤア兄が出世に不吉の泣  
 顔。即今染込此大望いつかあ如何な蹶へさぬ。破出すからは一時勝負いで注進と又駈出す。先  
 に静か立懸り。遺物一何處へもやらぬ。エ、面倒な女郎めとすと抜て切掛れば。得たりや  
 紫壇の延棒に發矢と受止。詞。妹を殺さふとは人ぞなしの猫の皮。不幸の上塗罰あふりと拂き刀  
 を又付込。此世の暇取さんと。太刀筋血筋の遠慮もなく。兄の剛力刀物業。妹はかよはき  
 無刀の挑合。三味と白刃の響音調鳴いゝつ掛聲二上に。心揉入る三下り。三世の縁の糸筋も切

て再び海老尾。轉手糸ぐらさん。に乱散て争ひしが。ついに三味線切折れ廻る静を藤彌太  
 が。取て引敷膝の下びつく共働かせず。詞。サア此兄と一ツに成か。否と云ば突殺すと胸に刀を  
 差付る。物音奥へ聞てや姪は裝束脱間もなく。走出で抜打に兄の肩先すつばと切り。叫と仰に  
 反ながら。死損ひの老めと親に刃向ふ極悪人。臥なごら静が諸足かけば。どうと倒をれて立  
 上らんと。動めく藤彌太起しも立ぞ。胸腹ぐつと刺通す。老女の手なみ早業に手足を張て苦る  
 しみし。心地よくころ見へにけれ。母が心は張弓の藤彌太が響片手に掴み。ぐつと引上つ  
 打守り。詞。コリヤ此刀を抜ば命かない。息の有中云事有。眼も未だ眩ますば此親が出立を見  
 よ。烏帽子水干男の裝束母と思ふなて。親の磯の禪師。エ、己れ淺ましい。本心に立歸らば父  
 親が勘當悔みおろと。母に禪師が名を譲り。待に待たる甲斐もなく悪に悪を積重ね。現世後生  
 を迷すゆへ。磯の禪師か蘇生して手に掛たを覺へしかど。烏帽子裝束かな操。藤彌太には  
 たと打付て。詞。此迄は父の役禪師と云名を力にて。思切は切たれども、母が身にも成て見よ。  
 現在我子を手を掛る母も因果おのれも因果。悪けれを佛に成おれとわつと叫ひ入を見て。静  
 も共に泣屈折云て歸らぬ此有様。責ては最期に心を直し親子兄弟睦しい。詞を替して死でいの

と取付突く其聲の。藤彌太が耳にや入たりけんむつくと起て眼を開き。詞ハッア過つた〜親を親共思ひぬ我を。親ひ我子と思召し父の名を母に譲り。勘當許さんとの御恩を無下にするのみか。天の冥罰二親の。お手に掛る不幸者。元此館へ入込し。梶原と心を合せ。郷の君の實否正し。義經公を科に取て落さん爲。二ツにハ番場の忠太京都に殘し置間。示合せて。夜討の手引大將の首取ば。梶原が取持にて大名にしてやらふと。慾心に親の慈悲を忘れ。御手に掛りし今此時。一生の非を改め善心に成たれば。最期に責て寸志の忠義。詞これ静今宵鎌倉武士共。夜討にせんとの仕度有。必御油断なざることを義經公へ申し上や。云置とも是迄を貫く刀に手を掛て。拔ハ絶行息の往來生死の道を定なきエ、死たり殘念や。其根性をまめ三寸。早ふ直して何故呉なんだ。辨慶殿の娘御は女なれ共。父の手に掛つて忠義の死。我も母が手に掛て死ぬるに二ツハなれ共。根性の直り様か遅さに。犬猫の死やうに此死様は何事と。空しき死骸に取付て。老の操言親と子の別れハ盡忠歎あり。静は涙の。暇よりも云てかへらぬ御悔み。鎌倉勢奇るとあれば歎きは無用是母様。もふ何時でござんせふ。今宵も夜半あの太鼓ハ。時打敷共思はれぬ。ほんに劇しい鐘太鼓如何やら世上も物騒かしい。必定夜討に

疑ひない。此次の間に釣て有鐘を鳴せば。御家來衆が駈付る。豫の相圖滅多無性に鐘は。此母が心得しと走り。行より相圖の鐘こう〜とこそ「響けれ。静小襖をかい掲げりしげに聲を上。夜討が寄てゆぞ起合給へと呼られ。奥口取〜女中の騒。何ぼ起しましても酒の酔殿様のお目か醒ぬ。醒いで是がよい物か妾に任しやと立掛り。御具足箱の蓋おしあけ鎧取出し重たげに提るやら。引摺やら御寢所の障子押明させ。お枕元へ投やれば。天性其器備て武勇に聴き御大將。御鎧の金物からめく音に忽然と。御目も酒の酔も醒むつくり起き。鎧引提端近く立出給ひいかに〜との給へば。有し次第を細々と申内からてつ取早く。鎧直垂小手脇當金作の御佩刀。弓矢兜の次第よく取て扱かふ機轉の靜。天晴御身は弓取の持べき妻よと御戯れ。さわやかに出立給ひ。誰も〜休息せよと仕度にかへせば。宿直の武士も有合まじ。よし義經が手を下さハ何萬騎有共皆殺。馬引と呼はつて椽の上に突立給へば。靜長刀抱込で。御側を離れずひつ添處へ。時も移さず夜討の大將法助武者。表門を込入て廣庭に駒掛居。詞義經の首給はらんと土佐坊昌俊向ふより。最早逃れぬ御腹と聲々に罵るにぞ。詞ヤア義經を討んとはしほら敷土佐坊が夜討よな。相手には不足なれど。此世の暇取せんと太刀拔々バめ廣椽よ

り。飛らりと飛鳥の早業早即。静長刀甲斐しく。切拂ひ難廻る勢に避易して。寄手も輒く進み得ず須臾支て居處へ武藏坊を始として源八兵衛伊勢駿河。退々に馳來り御大將にひつ添しは。天帝修羅の戦に須彌の四天王。帝釋天を守護せしも是には過じと云つべし。寄手は憶せぬ土佐坊昌俊采配振立諸軍の下知。辨慶寄つて進出。坊主の相手は坊主か能。引な昌俊逃るな土佐と聲を掛て飛掛れば。擬勢にも似ぬ土佐坊昌俊逸足出して逃行を。いづく迄も追て行源八駿河も抜連。登る軍勢一人も余さじものと。「切立れば。さしもに廣き堀川御所散はひもなく逃散て御所も密そと静まつたり。斯る處へ御門の脇より武者一人寄せ來り。土佐坊昌俊是にありと弓矢携へ突立たり。伊勢の三郎篤と見。辨慶に追駈られ跡も見ず逃げ去し。其昌俊とは出立の幾何變りし鑑直垂。但鎌倉殿の御内には土佐坊二人有やらん。實否をゆせと詰掛る。チ、不審尤なり先達我名をかり寄來りし土佐坊。梶原が郎党番場の忠太。只今向ひし某こそ左馬頭義朝公より。鎌倉殿へ二代の忠臣澁谷土佐坊昌俊なりと。ちよつへい頭巾脱捨れば實にも疑ふ所あり。伊勢の三郎為せ笑ひいかめしき忠臣呼えり。日外日の岡にて出合し時。延引ならぬ親の敵。討場を討ハ判官殿お爲しを誠と思ひ。義を知る武士と思

しに偽を以て命を助かり。今此處へ寄來るは取所もなき表裏者刀汚しを思へ共義盛が親の敵一步試に試して呉んいざ來い勝負と身つくるふ。詞ヲ、義盛が疑尤千万其にこそ子細あり先此一通御大將の御覽に入て呉られよと。鑑の引合より取出し差出を取次で。義經に奉れば不審なかられし開き見れば牛王に血判せし。野心なき起請文大將猶も不審時ず。詞ヤイ昌俊此起證の文言は。義經に弓引敵たは。日本大小神祇の御討を受んと書ながら。今宵夜討に寄たると起請と相違せり。心底いかゞと仰せける。さんい鎌倉殿梶原父子が中に任せ彼奴を君の討手とある。元より科なき義經公。梶原斗上しては御大事と思し故。某遮つて望みしハ。討手に事よせ罷上り御兄弟の御中日月の如くせんものと。思ふ心を梶原に見透され。其場の争ひ武士の意地。詞義經の首取て罷歸るか。さなくば昌俊が屍を堀川の土に埋むか。二ツに一ツは違へじと一通の神文。鎌倉にて書しゆへ。頼朝卿の中に及せ梶原迄疑晴し。肌ゆるさすより謀を聞彼が盗む平家の廻文。先へ廻つて奪取義盛公へ渡せしは君に難義を掛まい爲。我は澁谷金王丸とて義朝公より譜代の家來。頼朝卿も判官殿もかうの殿の御かたみ。大切に思奉れば何に魚負依怙もなし。鎌倉殿へも起請文判官殿へも起請文。二通の起請を反古にせじ

と。夜討に寄せたる昌俊が心を見する此籠と。重藤と共に投出を伊勢三郎ねつ取て。見ハ弓には弦もなく矢尻を抜たる籠の矢幹。實に敵對わせぬ證據ぞと。大將を始め義盛も心を深く感じ入。昌俊重ねて。是伊勢の三郎。日の岡にての約束違へず親の敵。土佐坊昌俊打て本望遂けられど。襟おし潤ろげ待かくれと義盛は中へに。昌俊が忠義を感じ。打んぞ氣色なかりける。義経深く感心有。斯迄我に忠義の土佐坊伊勢が討ぬも道理あり。此上はあがらへて義経に仕へと。仰も果ぬにからしと打笑ひ。昌俊が主君は鎌倉殿。討手に向ひし判官殿刃向のざるは義者の道。奉公せよとハ恩の御誼。昌俊が此堀堀川の土とならずんば。鎌倉殿への誓紙ハ反古。生ては武士の名の穢此御所の庭を借て義盛の手に掛れば。不忠と呼ばるゝともなく。二枚の起證も武士も立。さり乍ら。判官殿我を我と思し召し。存らへと有言葉は生々世々に忘れまじ。心に掛ハ御兄弟御中和睦を此世にて。見奉らぬ残念。此上なから御中能く未來の御父義朝公。我にも見せて給れと。目にてハ泣ぬ武士の言葉が直に涙なり。大將御目潤せ給ひ。今の世の人心士農工商に限らず。賊に立て賊に書く誓紙誓言皆叛くに。汝はそれに引かへて偽に誓紙を書き。誠に命を捨ると。亡らん跡迄汝が譽を殘す爲。祇園のお旗に隠な

き。官者の宮に相殿せさせ。誓文の神に崇むべしと。御感の詞末の世に十月廿日の誓文拂ひ。此昌俊を祭るとかや。ハ、恐有や有難。人数ならぬ昌俊命一ツ捨ずんば。古今無双の御大將の斯る情を聞べきか未來の譽此上なし。サア義盛首取て父に手向年來の本望遂られよと。すつと密てとつかと座す義盛も此上は。辭退中に及すと太刀拔放して後廻り。伊勢の左衛門俊盛ハ一子同名三郎義盛。親の敵只今討昌俊殿御免あれ。弓矢應護の八千餘の神ゆるさせ給へと振上げ。首は敢なくちかたに重ねてつくる間の聲。敵かと思れば左にあらず源八兵衛駿河の二郎。鎌倉勢を追拂ひ凱歌上て立歸り。今夜夜討の大將を討滅しては共。武藏坊追駈けへば追付召つれ參るべしと。中上れば御大將ヤア今夜は圭昂きろくの日。戦を急ぐへからず。夜は何時を曉方近し。一番鷓の鳴を相圖に軍を出し。逃げ屈む奴原を片端より斬盡せこれ。義経が軍慮の大事方々其旨心得よと御下知智謀は吳子孫子張良。陳平。韓信に諸葛が術を暗し給ひ。然も劍術早業の雲にも駈り水にも入龍に翼や虎の巻。七書を胸に隠みこむ。御大將の御勢恐れぬ。物ころなかりけり



明わたる野邊も山路も照空也。敵の心は鞍馬道。夜盡共辨へず。逆るを追掛打つめて土佐が乗たる駿足逸物。おろしも立ず飛乗てあひ合馬の二人乗。るぐひり武藏坊主の好物。しり馬に打跨り馬歴神の帯たる勢にて。鞭振上げてう〜。人と馬とを碓の柏子しつていからころさつ〜。はい〜はいがい打立おつ立辻も小路も飛越跳越。室町通り横切に堀川御所の前に乗止めて大音楊げ。土佐坊昌俊生捕て参たりと。呼はる聲に義經公源八伊勢駿河一様に躍り出。コレ〜武藏其や違ふた。土佐坊は義盛が親の敵夜前手に掛本意を遂た。其奴は似者番場の忠太。ヤア道理で滅多に顔を隠すと頭巾を取。ハア番場の忠太。昌俊をだしに遣ふ土佐のにせふし。此なまぶし三人中へ振舞ふぞと馬上にぐつと差上て。受取やつと投付れば腰も折ふし足立ぞ。揺めきあから手を合せ。土佐に似たも梶原が皆差圖。忠太が命助と吠ぬ斗の見苦しさ。武藏坊馬乗放し忠太が背骨しつかと踏へ。助けるハ坊主の役おのれに似合た戒名つけ。引導渡して得させんと三尺五寸をしやに構へ。汝元來梶原が家來ながら。昌俊と嘘をつき。自業じとつくはつひにはころりとろつ首を落され畢ぬ。ア、悲しきかなや。今月今日。昌俊が名を借て殺るはおのれの損。其損を名に取て。昌損と付けてこます喝と云ふ

て打太刀に首は飛でぞ死してける。扱こそ似せと正具の土佐坊昌俊土佐坊正尊。二人の土佐が名の紛れ義經公に敵對しは此正尊かことなりけり。判官御悦喜ましく〜て家來と云共差敵なれば梶原を打たも同前。勇や〜との給ふ所へ。女中の預黒井の軍次罷出。先達靜御前に仰付られし。今様の女舞早や御舞臺も成就し。役人殘す相詰候。直に御覽あるべうもやと申上れば。判官いよ〜御機嫌よく老中か今度の勳功。勞を晴爲。はや始めよと御説も君が御代永き。末廣扇今様舞臺賑ふ御所ころ

花扇邸の枕

浮世の戀よ迷ひきて〜思ひをいつか晴さん。是は色里の傍に住者なり。我好色に身を宴し。太夫天神或は夜發の假寢にも。露の情を受しより露の情の文字を直に。名をも露情天じんともて囃されしも今早。親のかん氣に肌寒き紙子の。皺のよるとあく晝ともわかず通しに。未だ色道の悟を聞かず。誠や在原の業平を。好色の神に祝ひ込し岩本の社へ歩を運び。諸分手管の道を辨へ。序なれば鳥原の御方方へ立寄んど存じ。諭只今彼里へと急ぎし。通ひ馴し道は昔に變ねど。變る姿と口の端に。いひ編笠の一字西に傾く。日影さへ。しゆしやか

の野邊に照添て。歌行ハ程なく出口なるこんたんの宿に着にけり。詞ハア、昔に變らぬ三  
 枚方でおす。ユリヤたまらぬ。ア、浦山しの廊通と。人目忍ぶの軒の下笠傾くる暖簾  
 の蔭。主の御内より出。詞ア、是々謠なら聞たふない。通りやく。否苦もない己じや。誰方  
 ぞいと笠を覗いて。エ、イお前は。扱もお前は露情様か是はしたり。あんど久しやく命おれ  
 ハじや。先御息災。其方も無事で重畳。扱此れ姿は。はて愚痴な事を問ふ。云ずと形で推  
 量しや。鬼角契情買と灰吹は青い中に賞翫なされ。粹よ成と追出る。が一時つきりと。廊へ  
 往。色の褪た灰吹男と睡なきがなするであらふ。其方は辛い顔もせずはつばとつば。詞忘れ  
 留守と。一人拍手たり舞を見て。詞イヤ。只今は所望にない。心遣無用。然らば一種こ  
 しらへて久しぶりのお盆。どりやお伽上ませうと押入より枕取出せば。詞ユリヤ珍しい色めい  
 た文枕謂れの聞たい。然れば其張枕也。此里のよね様方。もん日の催促身請の相談。付文投文  
 或は付合間夫狂ひ。可愛悪い嬉し悲しの種々無量の。文共を一つに集めて妻が仕事にあんた  
 の張枕。是をなされて睡み給ひ。詞同過去行末の悟を御開きゆへ。我等は其間酒の爛して参ん

と。布團引着入にける。詞エ、きざわ者じや是非に紙花と出たい所。今ハ漸々鼻紙にも紙子の  
 袖を枕に當。實や盧生が見し榮花の夢は五十年。詞我も此一睡に。昔の夢を見るやと魂膽の枕  
 に伏にけり。廊通ひハ皆駕でおす。おれも通へど駕昇ておす。押手勝手もまかひなき却  
 が門に駕籠昇店。此處じやくと内よ入る。詞如何に露情に申すべき事のゆ。其如何なる者  
 ぞ。いや私でござります。ヤア手代の彌六かては何故。とハ御吉左右御勘當のれ詫叶ひ。お  
 向ひに参りてゆ。きたか。てんど。びやくらい嬉しやく。イヤまたおれが親父程有て余程  
 にもてる。扱思懸もないと急に御許された。詞おせひをばいかで斗るべし。御身  
 勘氣を許さるべき。其瑞想こそ在すすらめ。早々駕に召れ候へ。詞おつと心得乗移り。宿へ歸  
 らば來まどならぬ廊の見納。是より直にれせ。と。躰上れば紙子の袖も故郷へ歸る錦の  
 袂。昔の姿に鉄刀木折に幸い三味線の。音じめに連てもてるか。息杖の音二上に乗て合せ  
 てもてるか。駕籠ももてますはい。ゑいさ。ゑいさ。榮花も夢とハ島原の  
 楊屋を指てぞ。浮れ来る。今此里に川竹の身をば流の島原の。ヨイ。ヨサ。出口の柳振分  
 て戀と情のヨイサヨふた思ひ。結ぶ契はあだ人へヨ今の。嫉ハ誰故ぞサイ。世渡る業の假枕勤

の身ころ傾りなや傾り求て。又この。里の名うての太夫職。ぬき八文字の連道中。今日も變  
 ぬ花の宿。もんじが許に入來れ。太鼓の喜作出立。詞 ヨウ見事く夏花様冬菊様二季相並し  
 ね姿。月花はいそ一對の珊瑚の玉。色を競べる二人の君。露情様の穂出の種。いかな天女も  
 蹴躑躅で逃さんしよやつちや〜と讚言葉。二人も完爾と笑顔して又惡戯なまど斗りと。ま  
 たはにとんと腰打掛。庭の紅梅咲わけて。紅白美目を争り。又露情様を争ふてか。お二人  
 の顔がわるい。はて惡ふても如何しても夏花の先の相方。せんでも萬でも此冬菊は心意氣。詞  
 いやそふは成まい。誰か私かとせり合中へ。詞 おつと見へた。合差合なげとたんのわれ喧嘩の  
 貴ひ。此處で我等が智の字を揮ひ。お二人様のね文を是此様にと椽先の。手拭掛に括付。是で  
 れてきの心を知る狐畏露情様の見へる迄奥で呑ふと誇り立。歌 深い浅いは上から様見えぬヨイ  
 ナ。底の心は寝にや知ぬ寝て〜知る。唄ひうち連入にける。座敷には金銀の襖を立。四方  
 の女郎のかしかりに出入人迄も。色取風の粧ひは誠や名に聞し借錢の都機嫌上戸の。樂も斯  
 やと思ふ斗の景色哉。夜晝通ふ露情大じん。色と酒とのもんじが座敷。醉狂闇や阿房殿のしや  
 うづけの間に入にける。詞 爰に喜作の才覺にて心を引見二通の文。手拭掛に掛置たり。詞 ア、

恐ろし契情の心や。おのれが心を見ん爲に正眞の狐畏。思ひり〜べくゆの油揚がぶら〜。  
 あんじや冬菊より。夏花より。又惡ふはない物。開いて見よふ。いや〜此方を見れば彼方が恨  
 めよ。彼方を見れば此方が恨みん。所詮此文見ずに歸らふ。歌 いのやれ。我住宿へ歸ろやれ。足中  
 を妻立ちよま〜とつま立。詞 ア、思へば二人の君か心の式を書たる文。ア、儘よ。いや  
 〜只恐しいふつと止よ。イヤ止まいと。行て歸り歸りて足も四度路に行惱む。喜作ハ  
 いそ〜ヤア旦那。伯藏主の御身振どふも〜も。中々寝に掛らぬお前は狐の骨頂。扱此お小  
 袖はお二人の太夫様から。詞 皆迄云ふな是も露情を引見爲か。外に心は空蟬れも扱の売衣。君  
 か移香誰にか着せん。服はやらじと引寄抱寄。詞 其處を喜作がおつ取て。互に陪氣の花摺衣片  
 袖斗り打着てきせて雉の靴鳥様。片袖はおん鳥様。比翼のとりなり所望〜。詞 我等は又下男  
 とるどし帯に路次笠も。待ば甘露の日傘氣轉きかして差かくれば。詞 コリヤ出來た。是で二人  
 が恨も有まい。太夫とおれが二人前。左六法右小襖。姿もしやんと振分て。歌 限知れぬ。アリ  
 ヤ。コリヤ。歌 思の淵よ。いつそ沈ば。此身も共に。沈里は何所〜。上の丁下の丁。中の中  
 の中の町を通掛に。詞 何と太夫久しや〜。お前も御無事で嬉や〜。ア、歌 鳥も鳴け。鐘も

鳴く。二人寝し夜はいなしたふもまだく。ハツアないかさ。詞 よいや露情様の振分姿たま  
 らぬし。何を隠そふお前の事で二人の君も終羅の種。唐土の玄宗皇帝は雙六の勝負にて。揚  
 貴妃虞子君のきさき定め。例しを引て二人の君に手鞠つかせて。相方定め。詞 よからふし。  
 れれを抱ふと抱まいと。ほんの二人が勝た次第一杯につかせい。おつと障子をれし開け  
 は。豫て趣向の夏花冬菊色を争そふ深紅の糸。鞠も心もつまして勝ば否應云さぬと。悋氣嫉  
 のちどりがけ手玉も由良につき初る。且那は胡弓我等が三味も不調法げたたき次第出次第  
 の。音じめに合す手鞠うた。とんくくとんと諸國の戀のわけさど敷へ敷へマヤ。武士も道  
 具を伏せ編笠で。張と意氣地の吉原。花の都のうたで和らぐ。敷島原に。勤する身は誰と伏見  
 の墨染。煩惱菩提の鐘木町より。難波四筋へ通ひ木辻に禿立から。室の早咲うれがほんに。色  
 じや一イニウ三イ四ツ。夜露雪の日しもの關路も。共に此身を馴染重て。中丸山唯丸かれと  
 弾き歌ふ。詞 おつと手鞠は喜作が預り。千年ついても取外さぬはお前方のたしなみ。ね二人の  
 悋氣争ひ拙者。のどんとあつかふて。互ひちがひのさめと可愛かつたりがられたり。其の露情  
 の望む所誓文ぞれりやかはらぬ。詞 ハテ主様さへかわらすは夏花様冬菊様。二人して大切に

としがらふと寄添は。愛度く是で御中睡し。御祝義に一踊且那諸共サアれたちと。喜作か  
 文作高々と鼓大鼓三味線の。なりよや見よやな袖振姿。ふりもとき四季の榮花の一踊。是を  
 来て見よかしのへ。まんづ揚屋の座敷に。西の三十疊には黄金のどさん盆に。太夫天神居流  
 て。園には不老の櫻を咲せ。春の榮花ぞ面白や。東の座敷は三十疊に寝間の屏風引ならべ。  
 白い肌へをあらわして。睦言なんども聞たり。つゝには五色の菊をいけ。秋の景色に色添て。  
 廊に花をぞ咲しける。榮曜にも榮花にも實ふ此上や有べきかと君と。手に手を取替し障子開け  
 ばまはいかに。晝かど見ば。月又さやげく。春の花咲けば紅葉も色濃く。夏かと思へば雪も  
 降て。四季おりく。の榮花も夢なれば。今迄騒きし女郎太鼓の聲と聞した窓うつ風。楊屋の座  
 敷も皆消しと失はて。有つる却がかりの宿。こんたんの枕の上に眠りの夢は酔にける。爰  
 に露情はもめさめてア、南無三寶掬い夢にて有けるか。よく思へば手管諸分の道辨まへる  
 此枕。是も偏に岩本神の恵み實に。面白やこんたんの色世ざと悟り得て。望を叶へ歸  
 りけり。義經悦喜限りなく御代を祝する静か舞。面白し。是も偏に京鎌倉。和睦をすべ  
 き瑞想と。悦び御座を立給へば。伺候の諸士も壽きて静御前の御臺なり。三國一の名將に隨ひ

御所櫻堀川夜討 八四  
 魔く武士も。勇あり智あり仁義有。三々九郎判官の。御威勢御果報夜に増し日に増し年に増そ  
 實に動なき源氏の御代五穀成就民安全。百億萬歳未掛て納まる國こそ愛度けれ

御所櫻堀川夜討終

近松半二

半二は浪花の儒家穂積以貫の子なり若き時は頗る放蕩ありしが天稟の詞才ありて歌道に達せり竹田出雲に従ひ寛延四年始て役行者大峯櫻を作り遂に竹本座の立作者となれり近松門左衛門紀海音は文藻を以て稱せられ竹田出雲近松半二は脚色の妙を以て稱せらる著作中の傑作忠臣講釋妹脊山山婦女庭訓新板歌祭文等は半二一人若しくは主任として作りたるものなり門人近松徳三紀の上太郎共に名聲あり天明三年二月山科の閑居に没す享年五十九才といふ

○近松半二著作目録

書名ノ下ニ記シタル名ハ合作人ナリ

(聲曲類纂ニ由ル)

- 役行者大峰櫻
- 世話狂言漢楚軍談
- 伊達錦五十四郡
- 愛護雅名歌勝鬨
- 葛蒲前操の弦
- 小袖組貫練門平

外記 松洛 冠子 外記 松洛 冠子 外記 松洛 冠子 外記 松洛 冠子 外記 松洛 冠子 外記 松洛 冠子 外記 松洛 冠子 外記 松洛 冠子 外記 松洛 冠子

寛延四年十月  
 寶曆二年五月  
 同 年十一月  
 同 三年五月  
 同 四年二月  
 同 年四月



- 亭主方東山殿櫻御殿五十三驛 善平 兵藏 同 年十二月
- 上客二休禪師 善平 松濱 同 九年四月
- 蝶方武士艦 善平 三夏兵工 同 九年七月
- 時代時誌 善平 東南 安永二年七月
- 世語撰 善平 東南 同 三年四月
- 性根競姉川頭巾 善平 館野 同 五年正月
- 鯛屋貞柳藏旦啓 文吉 同 安永七年四月
- 心中紙屋治兵衛 文吉 同 同 七年七月
- 道中龜山咄 善平 同 同 七年九月
- 徳兵工往古曾根崎村噂 東南 能輔 館野 安永九年正月
- 假名寫安土問答 同 同 同 年九月
- お松新板歌祭文 同 同 同 十年二月
- 時代織室町綿繻 同 同 天明三年四月
- 伊賀越道中双六 近松 加作 同 同

久松 新版歌祭文

座摩社の段

近松 半二 作

敬 白 難波の里の大社座摩明神の鳥居前。張廻したる一構へは。手の筋失物走り人息もすた  
 北濱から。四季の草木の賣買は。花の顔見せ冬籠。新参古参大當り。御馴染御最負綱八を。  
 今入かへりお休みと。打たり舞たり神樂所の。鈴の音さへ賑へり。参詣群聚山家屋の。佐四  
 郎のお百度の錢繩の數をへ九ツ時。瓦屋橋に子のいから。年季重ねて久松が。屋敷廻りも勤か  
 ら。主の目鏡に油屋の下人小助と二人連。宮にへお百度現の佐四郎。見るより小助が思案類。  
 立どまつてアイタ。土邊に尻餅作り病ひと知らぬ久松。何とした小助殿怪我ないかと悼  
 れば。イヤ怪我のせぬが夕邊から冷腹で。アイタ。まりや寒の中の水汲だれともし。久  
 三の病ひで急病じや。奉公の身のつらさは大概な事は押して居れど。斯痢氣が差込でからり。寸  
 白様になど掛らにやならぬ。エ、ひよん事じやなふ。小倉の屋敷の商ひ銀壹貫五百目。晝迄  
 に請取にこいどの御使。霜先の銀念の爲の二人連。といふて遅なつたら親方の無調法になる事。

いつろ私一人往てこふかい。そんなら太義なからそふして下され。是での中々一足も往れぬ。コレ氣をしづめて茶店などで待て居やんせ。エ、丸子持て來たらよいに。戻りに返魂丹買て來て進せふぞやと。朋輩の氣をかね財布裏表なき小倉綱。屋敷をさして急行。後よ小助の山伏の園の傍へ小聲になり。詞法印殿。チ、油屋の小助殿か何ぞ用か。チ、貴様に銀設けさす事か有る。アレおの宮の内でも百度参りして居る人は。山家屋の佐四郎と云ふ銀持。こちらの娘のお染様にきほい惚やう。うれ故にあの願参り。爰らが貴様の能代もの。それがどひ打て貴様に祈禱頼ます仕業。今あそこへ往てあのわろに逢て咄す中。何も角も筋か知れる。貴様そこから立開して居て占ひの奇妙を見せると跡が銀じや。鹽梅よふ懸つたらニツ山じや合点か。ム、ろんならあのわろが彼大身代の山家屋じやの。うまいと法印おしめし合してよい時分に。小助がさし足さは知らぬ。佐四郎はれ百度を。廻り仕舞て神樂所の前に平伏柏手ちよん。南無坐摩大明神。油屋の娘を染を私に女房に持まする様に。とぞおぼはちから惚まする様に。なむ神明なむ稻荷なむ八幡。なむ大帥遍照金剛なむ觀世音菩薩。申し。佐四郎様じやござりませぬか。ヤ油屋の小助か。わが身やいつの間に爰へおじやつた。イヤつた今來て後からお前のぼ

やきを聞きました。聞たかエ、面目ない。山家屋の佐四郎共云へれる者が。戀なればころコレ此錢ざしを見てたも。シダリ百度参りとはきつい凝やう。イヤ凝た段ではない。元油屋の家には親共から。百貫目餘の取かへ。夫を急に催促せぬはあの娘故。後家のね勝にとふから云込で結納迄入て有。それに今日此頃後家が云分に。いかにも上ませうけれど。縁の事は親の儘に無理押しにも成ませぬ。おきの心を聞てからの何のかの持の明ぬ。うこでわが身に槌打をふと思ふて時々用の無心。イヤ羽織の裏がほしいの。加賀の襷を買はの。髭剃の色拂ひ迄吞込で遣た此山家屋。夫にマア。おつといふまい働きが鈍いとおつしやるのか。慮外ながら急度働らいて居ますぞへ。夫ならころお前のね望み。十分の物九歩の埒が明て有。ヤアろりや本かいやい。ゆんか嘘か此間の文の返事。かはいらしいに染が筆。爰に持て居るけれど。ろふ云ふお前の請なれバマア、お目に懸まいわい。ア、ありや拗強すどちやつと見せてくれ。見せたら此働き代は。ハテ此望みが叶ふたら。禮はきつと飯櫃形てするわい。マア其文をヤア滅多に代物手放されぬ。當世貸高ひは浮雲。マア後での禮の禮。先へちつと力付ぬと勢かない斯せふ。此文私か請で聞します程に。よい返事の文句なら冥加錢を上さんせぬか。さらは開帳致さふか。ハア



何じや。よふぞや御文下され嬉しく拜し参らせ候。ソレ嬉しいと書て有ぞへ誠に數ならぬ我身に  
 淺からぬ御しんもじの程。身に餘り辱を存参らせ候。ソレそこで冥加錢。心得嗜み銀入から。  
 豆板一ツ。詞 サア〜其後ハ〜。身に餘り辱を存参らせ候得共母様の有身にて任せぬ御坐  
 候へば。先々御斷り申上参らせ候。ヒヤアこりやどふじやサ、ハ、爰カ味じや母親の赦しさへ  
 出たら。私ハ前よ添たいといふ事じやはいな。又々母様に尋ね候へば縁の事はどふなりとそ  
 なたの好た殿御を持と御申なされ故。うれハ〜嬉しう存参らせ候とけつかるハ。エ、  
 忝い冥加錢。今度ハはつんで二朱一ツ。ナットしめたと又着服。詞 うふして後ハ。嬉しう存  
 参らせ候へ共何分私ハ前がいやにて御坐候。イヤアいや〜急まい〜。こりや是ちつとし  
 た調やうしや。私を私前がいやで有ふと云ふひざりの文じや。其證據ハ後にああたにも私を御  
 なぶりの事と推し参らせ候ソレ〜。若又眞實にて候ハば誓文〜私が事ヲソレ爰が肝心の性  
 根じや。今度は歩じや冥加錢〜。サア遣はいや。マア氣がせく跡を早ふ聞せいや。誓文  
 〱私が事はぬつりと思ひ切下され候。何の因果にお前の様な男に。ヤ何と其跡ハどふじや  
 〱。サア此跡ハ。イヤもふ聞あんすな跡ハはんやくたいじや。壹分一ツ井戸へ落たと思はん

せと。聞て佐四郎はあろ〜顔。れ性根取れた鼻紙袋。下地が抜たぎし斗の百度参りも恨めし  
 き。詞 申うふ力落した物でもない。れ前の戀の邪魔と云ふは久松と云ふ丁稚め。何でもこいつ  
 に腐り付て居ると見へます。尤男ハおいつよりちつとお前がつぎなれど。肝心の所で喰付した  
 ら乗かへるは知て有。サイヤイれれが背中の 獸のすんに。是ほどな疣が有ていつが前後に振  
 かつて有くらしいなら。恐らく前髪先には仕負ぬ物を殘念やと尻を捻つて無念がる。詞 イヤ申物  
 には所願といふ事ござります。幸あそこ山伏の有。久松とれ娘と縁切をお頼なされぬか  
 ホンニ是は氣が付なんど。第一れれが戀の成るか成らぬを見て貫はにやならぬ。シタカ若ひよ  
 つと成らぬといふたら。又十二文損するのじやと。根のしはんばの妾物から。網に罹つた鳥居  
 の前占御判墨色相性の考。見て上ませふお這入と呼込れるを機にして。ハいる佐四郎さし  
 こんだ小助が相槌。詞 あなたの年とは三十一でござりますな。ム、三十一當年三十一歳の男  
 れ生れ年カ寶永六年己丑。御一代の守本尊は月の二十八日不動明王性分ハ火にして。則住所  
 より。南少東も當り水邊に待人有女と見へます。こりや色事でござるな。且那何とまついか  
 〱。成程此且那大色事仕でござります。八卦の面にうふ見へる。トキニ其許様ハ丑の年で牛

の寐た程金銀を持ってござる。此度東に當て金銀の星か顯はれまする。是が其許様の年頭に當る  
則彼金銀の勢ひで此女はお手に入筈じやが。爰に一ツ障りが有。其許様にハ背中の骹に疣  
が一ツ有ふがの。イヤアサア〜見通しじや〜。サア〜なけりやならぬ理じや此疣の有所  
が悪い。惣体背中に有疣ハ背疣といふて。只今師走には或は牛房鯨鯨何なれ角なれ人ハ物をや  
るばつかり。錢銀を取れる斗では迄願ん事が一ツも堪が明ぬと見へます。とんと其通りそふ  
有ふ時に又一ツ大きな邪魔が有ハテかはつた物四角あ物じやが。坎良震巽りかんがすかん、発  
中断とつてたらばたの兌の卦に當る人相に取てはこりや前髪と見へます。彼金星銀星が寄合  
ふとする中へ此前髪の眞鍮星が毎晩夜ハ星に成て邪魔するといふ卦休サア夫がけたいで成ま  
せぬ。とふぞ其前髪を此法印が行力で祈り殺して進ませませ。先縁結びの星祭りこりや其元様  
の御家へ参りて致さるにやならぬ。サア其が第一お頼申たい。申さぬ事は聞へぬが金銀の星を祭  
るハ、同氣相求めるの道理で。金銀の元入が餘程入ます。サア何ばでも大事ない。備へ物ハ隨  
分大きな饅餅十二重跡は法印が受納致す。扱祈禱の間酒肴で我等を御馳走なされるが能。斯申  
せば迎手前が喰たい呑たいでござらぬ。則夫が星様への御馳走。物をほしかるによつて是星

なり。祈禱始めに宮の内の福屋でマアちよつと御神酒上よかい。旦那こりやよござりまじよと  
おだてる太鼓神樂所の鼓片手に糟禰宜が。山家屋佐四郎様。御献上の神樂の只今上ります。サ  
アれ出なされませ。是はいかな様交てとんちやんと。是もやつぱり今の願。モウ神様を頼むに  
及ばぬ。コレ神樂の酒手じや貴様も御神酒の相伴さすぞ。イヤ有難いハさらば福屋で腹存分。  
禰宜山伏の位争ひ。願主様先お入と鼓より先舌つゝみ打連茶屋へ勇み行。小助はろろ〜  
小戻りし。手招きすれば寂前より。待兼山師の浪人者鳥居の影より又一人。是も手合と顔見合  
せ三人いつしよに寄こざる。中にも勘六氣をせいて。シテ〜ごんの物は。コリヤ聲の高ゆ。  
あの井の内に仕かけて置た。此鈴木彌忠太久松めと子細有て。意趣の有中彼奴めを仕くぢら  
す工面は小助斯々合點か。よし〜彌忠太様は勘六と。福屋で吞でござませ。前髪めが戻る  
を待て手工合首尾よふ〜と。耳から耳へ相談さらり。しめて三人別れ行。人一盛り夢の世や  
浮名の端の種油獨り娘と寵愛の。お染が思ひ日に千度行は戻りつ蝶々の。縫の摸様を振袖に。  
包むとすれと娘氣の。迷ふ心を一筋ふ。座摩の宮居に歩み來る。下女のお傳が申お染様。詞  
の内の茶店でもとれ休みなされませ。私ハ爰に張番して彼の人ハ今でも見へたらコレ斯とい

へば染はほゝ笑なから。神の祀庭で勿躰ない差合のゐい時に。顔を見るのが樂みと。待人を  
 りも待るゝ身。久松はいきせきと屋敷の用事そこゝに。足元かろく立歸る。お染は見るより  
 コレ久松様と云れもせず。爰に〜と番添ば。久松も途中の目目。コレ祀傳殿小助殿の見へ  
 なんだかと。云つゝ傍りに氣を付れば。吞込お傳が。申御察人様。わたしや市の綱八の芝居  
 の一切見て参じさい。ホンニそなたは芝居好。敷入でなけりや行れぬに。けふは幸い勝手に往  
 てれじや。随分緩りつとだんないぞや。ハイ〜らんから往て参じよ。久松様もお染様と。と  
 こぞそこらへ敷入さんせと。はずすの猫に鯉木の。氣を通り札鼠木戸。是も忠義と行跡に契り  
 し中の詞數。云ず取手を振放し。申御察人様お前様の追付ゑい男持持なさるげな。私は下  
 人の事。何とせふしよ事がないといて拗強のやつぱり愚痴。勿躰ないお主様の。是迄のお志  
 眞實冥加なふ存じますと。押下れば摺寄て。コレ夫はマア何の事。内では人目か有にそつて  
 久松〜と家來めしらしひ。様といふ字は口の中で。常住消て居るのいの。せめてこんな所で  
 なりと。女房がお染かと。いふて湛納さしもせず。お前様の御察人のと。献上向な挨拶はまだ  
 わし氣を疑ふてか。ろもや見初し其日から。エ、こんな事何やかや云たいけれど。人か見

るので何にも云れぬ。とこそ人の聞ぬ所で。しつほりや咄したい。こつちへおじやと手を取  
 ヤア誰もあいはいの。外から襖は戀の癖。サア此間にちやつといのと。手を引主従三世相。二  
 世を兼たる妹背鳥忍び入ころわりなけれ。神樂の鈴も時移る。ほろ酔機嫌に法印はどろ〜目  
 して鳥居前。エ、きやつも呑ひやつじや。喰れもせぬ吸物にたつた酒三銚子。ホンニ端た酒  
 呑ふ迎店を明たは不用心。山伏物盗れては見て貰ふ所かない。ヤ、何やらぶつ〜呷くやう  
 な。此内に人の聲有の。ハテ怪しやと緩藤の内。差覗いて驚り仰天。這入れもせず氣は上づり  
 繪馬に上つた一來法師。立すくみに成て居る所へいきせき走つて下男。コレ〜法印様一ツ見  
 て貰ひたいと。入んどすれば。ア、コレ今内へ這入と水火木金乱騒ぎ。水火土金粹を開せい  
 やい。八卦なら爰てもついで見てやる。失物か走りか心中か。つた者なら奇妙に所を指て見せる  
 ぞ。イヤろんな物じやない。こちの旦那山家屋の佐四郎様が。今朝から今に祀歸りなされぬ。  
 ム、それかよいは。此山伏が行力を以てたつた今爰へ天降らして進せる。佐四郎様〜。チ、  
 法印坊ろまにかと。出てくる佐四郎にすれ違ひ。そつと後ろの襖から鳥居の中へ行二人。戀し

いお染と夢にも知らず。詞 サア〜〜一時も早ふ星祭り。是から直に手前が宅へるんなら参  
 ろか。イナ待たり肝心の商賣道具。持参致すと圍の内。詞 イアテモ素早い奴もう逃れつ。扱  
 は今のが彼前髪めで有たな。よふはん代を喰返に仕おつたな。よい〜此意趣返しはたつた今  
 お染がれ前に靡く様に祈伏るは我珠數先さんげ〜六根大聖南無不動明王〜。何ぼ赤に見つ  
 とむふても。男はれま持喰ぬバ立ぬ。身軀よしの山家屋で。腥料理喰次第。蒸菓子羊羹責  
 らけ〜榮耀の有たけえいさ〜。さしもの娘も喰にほき。魂の返るは今の中とあさん  
 で打連歸りける。南の辻に人立し喧嘩〜と騒ぐ聲。驚き出る久松に染。下女もどつかは  
 久三の小助。一所に落合ふ床几の上。喧嘩は振物國侍。相人は町人胸ぐら取れ。引立られて  
 も痿まぬ男。詞 こりや何とさつしやります。何と〜は素町人め。武士の足を泥脚で踏ながら御  
 免共ぬかさぬ慮外者め。サアあいわいな。慮外なら誤るふん。マア爰を放さんせ。踏だはれ  
 れが脚踏れたらこな様の脚。武士じや町人じやて、脚に違ひは有まい。そんなこつき喰男しや  
 ない。聞ぬといふてとふさある。お太刀ひねくつた迎滅多に切れる物じやない。人詮せずとお  
 侍。とふなど召れとすり寄體。詞 エ、儂しきぶち取する刃の穢れ。とふしてくれおと傍邊り。

有合財布眉間へむつしり。ハツと驚く久松を。お染が抱しめ押ゆる袖。氣を紅裏の裏へ行小助  
 がきつと。コレ申。詞 あの包は手前の銀財布。断もおつしやらずれ侍には似合ぬ仕かた。誠  
 にはは心せく儘手前の魚相眞平〜。なむ三寶少々血が付申した。幸の井の元と。清むる穢れ  
 へ薄けれと包みし悪事摺かへる。手目を見せじと小助が氣配り殺に成て。立綱の財布手早く。  
 詞 コレ久松此銀は懐へお染様掛り合にありや悪い。私もれ供サア〜早ふとせり立る。エみの  
 底は白歯のれ染久松早ふと手を取てせはしい所が結ぶの神。足を早めて立歸る。跡へ人たへ宮  
 芝居の切のめりやすしめやかに。騒く二人が仕濟し顔。詞 彌忠太様首尾は。チ、件の物は手洗  
 鉢の下に有うまい〜と立寄て財布取上。詞 彌忠太様。けふの働き代へるソレ金三兩。エイ眉  
 間に疵送付られて。たつた是かいな。サアよいら。其賣貫五百目とふで小助にも。口錢やらは  
 や聞れるまい。そんならあてうらとやでせふ。ぐれのおぬ内サアでんせと。銀懐へ取納め連で  
 ない顔跡先にのし〜歩む鳥居の影。盜賊待と聲かくる。驚りしなから騒かぬ顔。盜賊とは誰  
 が事。儂等が事と。エ、何を証據に盜賊と。ヤアぬかすまい。今日此方の屋敷にて油屋の下  
 人久松に渡せし銀子。子供上りの若いやつ何共心元なく。跡より來り窺む見るに儂等が街事。

かやうの吟味仕れとれ金役より付置れた。岡村金右衛門といふ者たはい。サア儕等引くつて屋敷へ連行。腕を廻せと詰かけられ。ハテうふ見られたら是非のない。成程其銀ハ衞りました。此お侍は通り合して連に成たばつかり何にも存存ないお方。私一人細かけて。サアれ引なされませ。サア〜と油断を見すまし彌忠太が差たる刀抜打に肩先すつばと金右衛門。同じく抜て切結ふ兩方劣らぬ牛角の早業。彌忠太は八方に。眼を配つてソレ〜そこをど。聲の助太刀ちからにて。強氣の勘六まくり切。薙る刀を請損じ牢籠所を付入て兩脚ながれよろ〜こんどのつけに倒れ伏。勘六ハ一息ほつと。人や見ぬかど見廻す彌忠太勘六をふした。氣遣ひさんすなもふとまつた。ホイシテ此捌きはどふせふ。ハテどふといふで高ふけり。ヨ、身共逆も爰には居られぬ。トレ其銀を此方へ彌忠太様。お前此銀取と笠の臺が飛ぞへ。藏屋敷の侍をばらしたうらは。どふでたりや遁れぬ命。逆も助らぬからは。何も角も勘六が引受てこな様の名は出さぬ。づきの廻らぬ内早往かんせ〜。尤エ、適男や縁有ば重て。細言いはずと早ふ〜。チ、さらば〜と別るゝ跡。納めた勘六をろ〜と。死骸の傍へ立寄て。首尾能行たぞ。チ、もふよごんすかと。むつくと起る體は血まぶれ。勘六殿今のでよかつたか。能共〜。物した物を又こはちへ。是も貴様の切られ様が上手なから。何ほ切ても疵痛せぬ。紀州の源藏太義でこんした。ヨ、サうころをさす物かいやい。シタカ余り柏子にかゝたて。よほ程の疵。いたみやせぬか。何のいやいもお前吉野丸付て置た。夫れを知らず今侍めか。逆て逝おつござま。ユリヤ此位の疵はたつた一付で直るはいやい歎れめが。ソレ酒代の一兩。忝い。サア〜是からこちらの商賣。紀州源藏様お歸りじや。ア、ユリヤ立前所じやないアレもお芝居が果る人の見ぬ間に早ふ行。チヨ〜。幕際綱八の。切狂言の果太鼓音に紛れて

## 野崎村の段

年の内に春を向へて初梅の花も時〜る野崎村。久作といふ小百姓せはしき中に女房は。万事限りの臍病ひ。娘おみつが介抱も心一ばい二親に孝行白の石よりも。堅い行儀の爪はづれ。在所に惜き育りや冬編笠も爛り三味線つぼもすまたの彈語り。御評判の繁太夫ふし。本は上下とち本で六文。お夏清十郎の道行〜。おづまからげのかいしよなきこんな形でも五里十里。通らしやれ。喉様の煩ひで三味線も耳へは入ぬ。手の隙のない通つて下され。清十郎涙ぐみお夏が手を取顔打なかめ。同じ戀どい云ながら。お主の娘を連て退是より上の罪もなし。

聞とひない。通りや〜といふ聲よ。久作は納戸を出。大坂ではるや繁太夫ぶしそなたにも聞いたけれど。病人の氣に構はふ本など讀で氣晴し仕やと。義理有中も子を思ふ恵みは厚き古合羽の。煙草入からこつて〜錢取出して。ドレ一冊買ませふ。ナンジヤお夏清十郎。道行戀の濡草鞋。コレ見や。此れ夏の手代と念頃して。姫路を欠落する道行。同じ娘でも世は様〜。纒か三里の大坂へ芝居一ツ見にも行ず。今度の大病から目の見ぬばの介抱。達者なれど喰物迄其様に氣を付てたもる孝行娘。若勞れでも出よふかと。ねりや夫を案じるはいのふ。チ勿躰ない事云しやんす。煩ふて居ぞんす喫様より。健なお前のお心苦勞。せめてもの手助けと思ふた斗。其様な事苦にやんで煩ひでも出よふかと。私しや夫が悲しうござんす。ハテわつけもない。したが百日と限りの有ばが大病案しるも無理ではない。が立庵殿の加減の藥で。今朝から末の椀蓋にねも湯が二はい通はた。見かけに寄ぬ功者な醫者殿。ヤ幸今日の日和もまし。久松が親方殿へ歳暮の禮に往て來る程に。随分ばいに氣を付やとい〜つ〜脚絆草鞋がけ。紐引しむれば。調 ヲ、と〜様とした事が。此短い日にモウ晝過。明日の事になさんせいで。何のいやい年ころ寄たれ此足に覺へが有。一時三里大走り日暮迄には戻つてくる。歳暮の

祝義はコレ〜此藁苞山の半は體に成。久松が年が明たらば。われは又ね内義に成。夫樂しみによふ留守せい。ドリヤ往て來ふと身拵へ。藁苞肩にやゑいとこな。表へ出しが立どまり。取譯今年は早ぬ咲た此梅。何より角より能土産と。春待顔に咲花を。手折て苞に一枝を。添へてひよか〜野崎村。跡に見なして出て行。影見送りて久松が事のみ思兎や角と。胸に一ばい半分の水量り込薬鍋。一魚ぎ入る生姜より。辛い頬はき久三の小助。久松引連入口から。久作内に居やるりと。つ〜と這入ばねみつは嬉しく。チ、久松様よふマア戻つて下さんした。定めてあなたは送りのお方。お茶と煙草と嬉さに。立たり居たり氣もろ〜ろ。エ、やかましいわい。うそ穢い在所の茶飲みにはこぬ。コリヤ這從せず聞て置よ。此久松めが親方の銀。壹貫五百目ね山狂ひにちよろまかしたに上はて。今日連れて來たはな。久作と三ツがなりで詮議するのじや。親父を出せ出せ〜〜と辰己上り。身の誤りに久松の差俯ひて詞さへないには若やと思ひながら。詞 ね腹立はれ道理ながら。何のマア久松様に限つてよもやそふした事ハ有まい。定めて是れ何ぞの間遠ひ。覺がなくばないといふ。ツイ云わけをして下さんせいなハ〜へるは饒舌の。コリヤヤイ天窓ころ前髪なれ其素早と。傍輩には辭宜もあしに。取て置の

れ娘迄。此跡は云すにこそす。裾資乏のはつた行過丁稚め。首綱のかゝる事云譯に如在が有かい。小倉の屋敷へ請取に往た爲替の銀。御役人から改めて渡つたは正眞。内へ戻つて明た所がわやひんのどふみやく。道の間ですりかへた品玉の太夫。早咲久松でございます。ハリトウ。白眼剣は無念なか。無念なら銀立るか。有まいがな。サア久作ハ何所に居る。出さらずば引出さふと。駈入袂を久松引とめ。成程銀を摺かへられたは皆私が無調法。身の明りの立迄。在所へ行と後室様の結構な御了簡。其をうなたが。ヤイ。何吐すぞい。其やわれが勝手了簡の聞損ひ。これには此詮義仕ぬいてこいと。内證で後家御の云付。じやに依てめつきしやつきするか何じや。ひんこめ出されと大聲を。おみつが押へて。コレ申御尤でござんすけれど。奥の病人に能事がましお聞しましては。病氣の障り最そつと辭に。イヤ高ふいふのじや。是程わめくに聞耳潰すは親仁もぐるの仕事じやな。イエ父様はあなたの方へ。歳暮の禮に往かれました。とふして道が違ふた事。若持病やなと發りばせぬかと。外も氣のゝり病架への聞へも氣づかい。久松が身の云譯に差込んだ。癪を覺へぬ斗なり弱みへ付込悪者根性。大坂へ往たが定なら否ながら道で逢筈。うんなてれんぬかすなやい。コレ最家捜しと出かけぞ

成まい。邪ひろくなどれみつを引退。取付久松面倒など。踏やら蹴やら無法の打擲詮方もな蛇折からに。道引返しにゆきせき戻る久作駈入て。小助を引退突飛し。留主の間へ来てわつばつさつば様子に寄て了聞せぬぞ。ヲよふ戻つて下さんした。最前から久松様をな。ヲ、をいてや。久作が戻るからは娘もじつと落付と。納める程猶ふる腹沸し。大まいの銀引負した其ばかりめ。詮議に來た小助ハ親方の代。夫を又わりや何で投たのじや。是は迷惑な。ひばり骨見る様な手で。血氣なこなた投たのではない。怪我のはづみ。出端れの曲り途で道が違ふて留主の間へ。大坂から息子が來たぞやと。若い者共が知らしてくれたで。行戻り五六里を助つた。徳安堤引返して戻つたが。うんなら何か其引負で久松ハ戻つたのか。ア、夫聞てマア落付たマア。何角は指置て傍輩衆の御世話で有ふと。影ながら云まばはかり居ますはいの。寒い時分によふ連立て来て下さつたなふ。ソレれみつと茶など汲んかいやい。コリヤ納めな。わりや夢に見た事も有まいが。壹貫五百目といふ銀高。子の科は親にかゝる銀立るか。但は又願はふか。ニッ。返答聞はい。ハテよいわいの其様に息せいはるは大きな毒。兎角人間は心長ふ持のが薬じや。ヤ其薬を思ひ出した土産にせふと思ふた此山の芋をどろろにして。

出来合の麥飯を進せふかい。置けやい。見せかけ計りの正直倒し麥飯のころゝのど。ぬらくらどい吐させぬ。あんだうくさいと蹴ちらす藁苞。破れてぐわらりと出る丁銀。ソレ久松が引負の銀。渡したからい云分有まい。とつと、持ていなしやれと聞ておみつも久松も思ひがけなき驚きに。小助もぎよつと仕なぐらも包改め。こりや正真じや。テモ出にくい所からよふ出たな。吹きや飛様な内のさまで。泥龜三ツで一貫五百目請取がらは云分ないわぬ。チ、そつちに云分がなふても。こつちにくつと云分が有と云も古い物じや是迄御世話に成た親方様。御恩こそ有恨みはなけれど。人に欺され取れた銀引負の悪遣ひのど。名を付て貰ふては世間が濟ぬ。といふて無理隙取ではない。親が暫く預つて置程に此通りいふたがよい。モウ廿年これが若いと。ぬこれにはぐつと。馳走も有と入ざる殺生。サア、早お逝がよかろと。云れてどふやら底氣味悪く。銀の出入さへ濟で仕廻や外の事は構ひないさらば暇申さふと。打違取出し捻込押込。ハ、ア命冥加な一貫五百目内へ逝て出した所が、縁になつて居やせまいか。ハテ仇口を開ず共足元の明い中。ナ逝いじや。銀こそは主の物。何の其れがでに。これが旁げて。これが足で。これが歩行て。これが骸が逝るに。ぐつ共云分ない等と。へらす口

してとつば門口柱で天窓。アいたし小助は足早よ大坂の方へ立歸る。おみつは親の氣を兼て。諸へ無れバ久松すり寄。此身の手誥は遁れても此れ暮しで余程の銀。跡でれ前の御難儀には。ハテこれじやとて相應のかくまいはせまい物か。始末してためたおの銀は黒谷の方丈へ上る冥加銀。氣づかひ仕やんな。まんざらおれ斗でもないわいの。改めていふてはなけれど。未はわの身とひとつにする約束で此おみつはバ、が連子。あれも否でもないろふなり。折も有ば親方殿へ隙の事を願ひおと思ふて居たが。是がほんのもつけ重寶。最大坂へは逝しはせぬ。早却なれど日柄もよし今日祝言の盃さすぞ。何ぞれみによ嬉しいか。我等は又天窓を丸め参り下向に打かゝらふと。頼み寺へ願ふて袈裟も衣もちやんと請て置たてや。幸い餅は搗て有酒も組重も正月前で用意はして有。サア、早お拵やと。藪から棒をつゝかけた。親の詞に吐胸の久松。しらぬ娘は嬉しいやら又耻かしき殿もふけ。顔は上氣の茜裏袂くへるればこそを。見るに付けては今更に。否應ならぬ親の前急に思案、出の口の。壁にいの字を垣一ト重。裏の病架に咳嗽聲。ホンニこちらの事に取込で定めてばバが淋しからふ。久しふりや久松にも逢して。此事を聞いたら薬より利目のよい。ハテ俯いて斗居せとおみつ。鱧も刻んでれけ



久松おじやと。先に立悦びいさむ親の氣を。知て破らぬ間似紙襖引立入にけり。跡に娘は氣もいろ／＼日頃の願ひが叶ふたも。天神様や観音様第一は親のた蔭。エ、こんな事なら今朝あたり髪も結ふて置ふ物鉄漿の付様。挨拶もどふ云て能かうやら覺束繪拵へも。祝ふ大根の友白髪。末菜刀と氣もいさみ手元も輕ふちよき／＼。切ても切ぬ戀衣や本の白地を惣かに。れ染は思ひ久松の跡をしたふて野崎村。堤傳ひに漸と梅を目當に軒のつま。供のおよし聲高に。詞 申彦察人様。かの人に逢ふ斗寒い時分の野崎参り。今船の上り場で。教てもろふた目しるしの此梅。大かた爰でござりませふぞへ。チ、もそつと靜にいやいのお。久松お逢たさに。來事は來ても在所の事。目立ては氣の毒をなたは船へ。早ふ／＼と追やり／＼。立寄ながら越かぬる戀の時の敷居高く。物申お頼み申ませふと。いふもこは／＼綾羅越。百性の内へ改つた用が有なら這入しやんせ。ハイ／＼卒爾ながら久作様は御方でござんぞかへ。左様なら大坂から久松といふ人が今日戻つて見へた筈。ちよつと逢して下さんせと。いふ詞つき形かたち。常々聞た油屋の扱はれ染と格氣の初物胸はもや／＼ろき交贈まな板押やり。戸口に立寄見れば見る程エ、美しい。詞 あた可愛らしい其顔で。久松様に逢してくれろんなお方はこちや知らぬ。

餘所を尋ねて見やしやんせ。阿呆らしいと腹立聲。心付ねば。詞 ホンニまお何ぞ土産と思ふても急な事。コレ／＼女子衆。さもしけれ共是成と。夢にも夫と白玉か露を帛紗に包の儘差出せ。詞 ころや何じやへ大所の御寮人様。様々々と云れても心が至らね置しやんせ。在所の女と侮つてか。欲しくはお前にやるはいなど。や、腹立に門口へほればゆきてばら／＼と。草に露銀芥子人形微塵に香箱割出した中へつか／＼親子連。出てくる久作。詞 どふじや繪は出來たで有ふ。扱祝言の事婆が聞てきつい悦び。じやが年は寄まい物。さつきのやつさもつさで。取上／＼たか頭痛もする。いかふ肩がつかへて來た。ア、橙の敷は争はれぬ物じやはいの。左様ならそろ／＼私が揉んで上ませるか。ソリヤ久松忝い。老てり子に隨へじや。孝行にかたみ恨のみない様にれみつよ。三里をそへて呉。アイ／＼そんなら風の來ぬ様にと。何が表へ當り眼門の戸ぴつしやりさし艾さ。燃る思ひは娘氣の細き線香に立煙。詞 サア／＼親子ぞやとて遠慮はあ。艾も疥癬も大掴みにやつてくれ。アイ／＼きつあつかへてござりますぞへ。そふで有ふ／＼次手に七九をやけてたも。ヨットこたへるぞ／＼。サア居ますぞへ。アツ／＼ゑらいぞ／＼。あすが日死ぬと火葬は止にして貰ひませふ。丈夫に見へてももふ古家。やねも

ねだもまりや一時に割普請じや。アツ、ハ、ヲ、ハ。爺様の仰山な皮切は任廻でござんす。ホンニ風が當ると思や。誰じや表を明たそうな。しめて参じよと立を引とめ。詞 ハテよいわいの晝中に儼どしい。ノウ久松——。コリヤ久松餘所見斗り仕て居すと。しかくと漆まぬかいの。サア餘所見はせぬけれど。エ、覗くが悪。折が悪い。悪い——と目顔の仕かた。詞 ヤ悪いの覗くのと。足に灸こそ居てゐれ。何所もねみつは覗きはせぬ。サアアノ悪いと云まじたは儘今日は瘟痘日。夫に灸は悪い——といふたのでござります。エ、愚痴な事を。此様に達者なは。ちよこ——灸すへ作りをするうて久作。アツ。エ、何じやはい。吾身達も。達者な様に灸でもするのがれいらへの孝行じやぞや。ヨろふでござんす共。久松様にハ振袖の美しい持病が有て。招いたり呼出たり。悪休らしい。アノ病ひづらが這入ぬ様に敷居の上へ大きおしてすへて置たい。コレねみつ殿。振袖の持病のと。種々の耳こすり。はしたない事聞てはゐぬぞや。ホ、ハ、ハ、變た事が氣に障つた。ヨ、障らいじや。こりやれかしい。其譯聞ぞへ。いふぞやと。我を忘れていさかいを。外に聞身の氣の毒さ。振の肌着に玉の汗久作も持あつかい。詞 ア、コリヤ肩も足もひり——するがなく。まご祝言もせ惣先から。女夫い

さかいの取越かい。灸業のかはり。喧嘩の行司さすのかいやい。二人ながら暗め——。イエ——構ふて下さんすな。今の様な愛想づかしも。病ひづらめがいはしくつさる何をいふやらモウ——兩方共。れれが貰ひじや。ヨ、中直しが直に取結ひの盃。髪も結たり鐵漿も付たり。湯もつかふて花嫁御を。コリヤ作つて置けど打笑ひ無理に納戸へ連て行。其間遅しと駈入れ染。逢たかつたど久松に縫り付。詞 ア、コレ聲が高ふでござります。思ひ掛けあい爰へはどふして。譯を聞いて——と。問れて漸顔を上げ。詞 譯はうつちに覺へが有ふ。私事思ひ切。山家屋へ嫁入せいと。殘しておきやつたコレ此文。そあたは思ひ切氣でも。わしや何ぼても得切ぬ。余り逢ささ懐ろしさ。勿体ない事ながら觀音様をかこつけて。逢み北やら南やら。しらぬ在所も厭はせぬ。二人一所に添ふなら飯も焚ふし細細ぎ。どんを貧しい暮しでもわしや嬉しいと思ふ物。詞 女の道を背けどは。聞へぬわいの胸欲ど。恨のたけを友禪の。振の袂に北時雨晴間は更になかりけり。曇がちなる久松も。背撫さすり聲囁め。詞 其お恨は聞へて有ど。十をの年からけふが日迄。船車にも積れぬ恩仇て反す身の徒。冥加の程も恐ろしければ。委細は文に残した通り。山家屋へござるのが母御へ孝行家の爲。よふ得心をなされやと。S入

と語へも涙聲。詞 否じや〜わしや否じや。今となつてそふ云やふるは。是迄わしに隠しやつた。云號の娘御と女夫に成たい心じやの。是非山家屋へ行ならハ覺悟は疾かう究めて居ると。用意の刺刀取直せば。夫ハ短氣と久松が。留てもとまらず。詞 イヤ〜そなたに別れ片時も。何樂しみに生て居よふ。留すと殺して〜と思ひ語たる其風情。詞 そんなら是程申ても。御聞わけはござりませぬか。添れぬ時は死るといふ。舊紙に啞つかれふかいのふ。ハア達て申せば主殺し。命にかへてそれ程迄に思ふが無理か女房じや物。叶はぬ時ハ私も一所に。お染様。久松と。互に手に手取かはす惡縁深き契りかや。始終後に立聞親。詞 其思案惡からふと。云はれてはつと久松お染騒ぐを押へてア、大事な〜。詞 マア〜下に居や。因縁とは云なから。和泉の國石津の御家中。相良丈太夫様といふれござの息子殿。聊の事で家が潰れてから。吾儕の乳母ハおれの妹。其縁て十の年迄育て上た此久作は後の親。草深い在所に置より。知恵付けの爲油屋へ丁稚奉公夫程迄に成人して商ひの道讀書迄。人並に成たはコリヤ親方の大恩。其恩も義理も辨へぬは。是見や。先に買たれ夏清十郎の道行本。嫁入の極つて有。主の娘と喰なかつとは。道知らずめ。人で無しめ。サこりや清十郎が咄しじやわいの。疾から異見も

仕たかつたけれど。てうど今の様な事が有ふかと。夫の悲し〜一日延二日延する間。降つて沸いた銀のもめ事。是云立に隙を貰ひ分て置のが上分別と。思ふから。引負の銀の工面。どの様に氣づつても高の知れた水呑百姓。僅の田地着類着をけ。おみつめか櫛笄迄買代あし。漸拵へたさつきの銀。なさぬ中でも親子と云名が有からは。肉心分た子を同然。可愛ふなふて何とせふ。詞 コレ染様ではない。此本のれ夏とやら。清十郎を可愛がれて下さるは。嬉しい様で恨らめしいわいの。開ての通りれみつめと女夫にするを樂しみに。病苦をこたへて居るアノ婆様に。今の様な事聞したら。何と命がござりませぬぞいの。若い水の出端には。そこの義理も糸瓢の皮と。投やつてこな様といつ迄も。添添られるにしてかうが戸は立られぬ世上の口じやない。エ、アノ久松めは辛抱した女房嫌ふて。身上の能油屋の智に成たは。コレ榮耀がしたさじや皆欲じや。人の皮着た畜生めと。在所は勿論大坂中に指さるれ。人交はり成させふかいの。コレ〜〜爰の道理を聞譯て。詞 思ひ切て下され。申コレ拜ますはいの〜。是程云ふても聞入ず。親御達が満足に産付て置しやつた其骸を。切さいて淺間しお死るのが女の道か心中か。サ久松も其通り。不義密夫の惡名請。實親の名を汚す斗か。世間の義理も主の恩

も。ひちやちやにして仕廻さの。侍の子か人間か。返事次第で思案が有と。眞實眞身の剛  
異見。骨身にこたへて久松お染。何と返事もあいじやくり。是程いふても返答のないは。コ  
リヤ二人ながら不得心じやの。ア、勿体ない。實の親にも勝つた御恩。送らぬのみか苦を懸  
るも。私か不所存から。イヤ／＼そなたの科ではない。皆此身の徒かう。親にも身にをかへ  
まいと。思ひ詰ても世の中の。義理にはどおもかへられぬ。成程思ひ切ませふ。ヲ、よう御合  
點なされました。わたしもあつ／＼思ひ切。おみつと祝言致します。そんならうなとも。れ  
まへも互に目と目にしらせ合心の覺悟は白髮の親仁。アノさつばりと思ひ切て。祝言をし  
てたもるか。何の嘘を申ませふ。娘御も今の詞に。微塵も違ひはござりませぬか。久松の事は  
是限り。わしや嫁入をするはいの。ヲ、出来た／＼。ひくつけな親仁めと腹も立す。よふ聞入  
て下さりまいた。晩の間のしれぬ婆が命。息の有中祝言が濟すと聞して下さるが。大きな善  
根。善を急げじや。今後で。不益さう。おみつ／＼と叫ぶ聲聞へてや病架より。母ハ漸  
探り出。親仁殿久松もそこにか。待に待た娘が祝言嬉しうて。此間だにない氣色のよ  
さ。大煩ひの上目迄潰れ。因果人佛様のお迎ひを待兼たに。難面命か有たりやこそ。悦ぶ聲を

聞といふも。孝行な久松か蔭。ぬつ／＼かな在所生れ。心には入まいけれど。末の面倒見てくだ  
され頼まするといふ中も。痰火の胸にせき上せば。エ、此寒いのには寐所にやつばり居たがよ  
ござります。冷れハ悪いと蒲團の上。抱きかへて久松が。介抱如在納戸より親子の中も丸盆  
に乗せた盃銚子鍋運ぶ久作。コレれば。やつばり寐ては居やらいて。したか嶋臺のない  
代り。世話事の尉と姥も新しい。目の見へぬは目出度秀句じや。ハ、ハ、エ、目出たい次手に  
此嫁は何所に居るぞい。れみつ／＼と尻輕に。立て一間を差覗き。ハテ出くすみをして居る  
は。夫ては果惣と手を取て。サア／＼マア／＼嫁の座へ直つたり／＼。エ、トキニ一家一門  
着の儘の祝言に。改つた綿帽子辭としから取て遣と。脱すはづみに。并もぬけて惜げも投  
嶋田。根よりあつはと切髪を。見るに驚く久松お染。久作呆れてこりやとあじやと。いふ口れ  
さへて。コレ申と、様をれふたり様も。何にもいふて下さんすな。最前から何事も残らず聞て  
れました。思ひ切たといはしやんすは。義理にせまつた表向。底の心はお二人ながら。死る  
覺悟でござんしむがな。サ死る覺悟で居やしやんす。眞様の大病を命が取どめたさ。わし  
やも頼と思ひ切た。ナ切て祝ふた髪かたち。見て下さんせと兩肌を。脱だ下着は白無垢の首

にかけたる五條袈裟。思ひ切たる目の中に浮む涙は水晶の。玉より清き真心に今更何と詞さへ。涙吞込吞込てたゆるつらさ久松お染。久作も手を合せ何にも云ぬ此通りじや〜。

詞 エ、女夫にしたい計りに。そこら邊りに心も注す苔みの花を散して退たは皆れれが鈍ながら。赦しすくれも口の内。聞へ憚る忍ひ泣。ア、冥加ない事れつしやります。所詮望は叶ふまいと思ひの外祝言の。盃する様になつて。嬉しかつたはたつた半時。無理にわたしの添ふとすれば死しやんすを知りながら。どふ盃か成ませそいな。ねみつの何をいやるやら。女夫よなりやるを此母も。悦びこそすれ何の死の。ノワ親仁殿。ウシヤワイノ迎も此世はなゝい縁でも。せめて未來は。ア、イヤ未來迄も變らぬといふ。盃さそと立上り。口に唱名ぶつ〜と佛壇明て取出す。花瓶の松に鶴龜も。あの世を契る心の島臺。サア〜斯〜てなりと盃さすのが。せめてもの心許し。エ、云たい事だらけじやけれど。此やうな座敷には。たべ付ぬ此親仁。三々くどふは云ぬが花嫁。一ツのんて久松へ。ア、目出たい〜。バこも囁かし嬉しかろ。チ、嬉しい段かいの。一世一度の娘が曠。定めて髪も美しう出来たてある。さき并に結やつたか。イエそんなら兩輪か。ヨ、兩輪共〜。思ひがけあふすつばりと。アいやさつばりと能出来たはいの。チ、親仁殿の云はしやる通り。自慢じやないが髪は大ては上手じやござらぬ。ホンニ前方大坂行の土産に貰やつた薄の簪。けふの曠に差やつたかや。着物は取て置の花色。加賀の裾襖様それか。アイそれ着て居やるか。アイナ。チ、吾儕にはよふ似合どいの。成ふ事ゑら鐵樂付て顔直しやつた大人さを。たつた一目見て死〜ら。善光寺様の御印文にも勝つて未來ハ極樂往生。ホ、ハ、ハ、ハ。わしとした事が。目出度中と思ひしと。久松 必氣にかけて。たをんなやいと子に迷ふ。暗き目盲に夫どとも。知らず悦ぶ母親の。心を察し誰々も泣聲せじと嘸る。四人の涙八ツの袖。覆並八ヶの落し水膝の堤や越ぬらん。見聞つらさに忍び兼。れ染ハ覺悟の以前の剃刀。なむおみだ佛と自害の体。久作わつて押どめ。コレ娘御何の不足で死るのじやと。聞問違ふて娘ぞと。母は驚きコレれみは待て〜と這寄て。探る手先に五條袈裟。ヤア此袈裟といひ此はむり。どふして髪を切たのじや譚を聞して〜と。急げばせく程咳のぼし。病苦に悩む母親を。見るに娘は猶悲しく。コレ嘸様てらへて下さんせ。添に添れぬ品になり。私や厄に成たはいな。ヤア〜〜そんならさつきにらう母が氣を休ふ爲。サイノ來世の縁を結ぶ盃。此世の縁は切て有はいの。ハア。チ、尤

じや〜。そなたは見へぬがいつそまし。傍でまじ〜見て居る心推量してたもいのだ。云塵  
 咽に詰らせは。詞 サア〜。其悲しみをかけるのも此に染から起つた事。死るがせめて身の  
 云譯。イエ〜。死ねばならぬ此久松わしから先へと駈寄を。久作剃刀引たくり。詞 此程いふ  
 ても聞入ぞ。是非死たくはれれから先へ。物の見事に死で見せふか。爺様か死しやんすりや。  
 わたしも生てゝ居ませぬぞへ。チ、娘出かしやつた。むさい在所に育つても貞女の道を辨へ  
 て。そふ尼に成やつたのふ。そこみでざるが噂に聞たれ染様か。お前様や久松を殺しとむない  
 ばつかりに。蝶よ花よと楽しんだ一人娘を尼にして。出かしたといふ心の中思ひやりが有なら  
 ば。なせ存へて下されぬ。折角娘が志無足にするとは胸欲と。堪へし涙一時にわつと計に  
 取乱せば。詞 チ、道理じや〜。サア〜と有ても死たくバ。婆も娘もおれも死る。三人な  
 がら見殺す氣か。サア夫ハ。思ひとまつて下さるか。但し死ふか。サア〜と三方が。義  
 理と情と恩愛のしめ木にかゝる久松お染。死る事さへ叶はぬをいか成過去の報ひぞと。前後正  
 体泣倒れ咽返るこそ道理なれ。久作涙拭拭ひ。とふやら斯やら合點が行たそふな。詞 嘸母御様  
 が案じてござらふ。大事の娘御儲な者に。イヤそれには及びませぬ。母が儲に請取ましたと。

云つゝ這入ハ。ヤア唄様。ハアはつと計りに詞多く差俯けは。詞 コレ〜た染野崎参り仕やつ  
 たぞ。聞て余まり氣遣ひさ。アイヤ氣慰みに能からふと跡追て来て何事も残らず聞た。夫婦の  
 衆の深切れみつ女郎の志。最前からわの表で。わしや拜んで計居ましたわいのだ。サア観音  
 様の御利生で。怪我過のなかつた嬉しさ。是から直に御禮参り。ホンニ是はさもしい物なれ  
 ど。御病人への見舞の印。鹿末ながらと詞數云ず出過ぬ杉折を。供の男が差置ば。詞 マア〜  
 冥加もない御見舞戴きますと取上る手元はつれて取落せば。中よりくはらりと以前の銀。詞  
 ヤアさつきに渡した此銀を。ヲ、表向で請取たりや事は濟む。改めて尼御へ布施せめて娘が冥  
 加じやはいのだ。云譯が立からは久松も元の通つ。戻つて目出たお正月仕や。取込の中長居も  
 不遠慮。娘もれじやと手を引て表へ出れバ久作も。門送りして。詞 是はマア〜何と礼を申  
 ませふやう。お辭宜致すも却て無禮。せめてものれ土産に。折て置た此早咲芽出たい春を松竹  
 梅ど。お家も榮へ蓬萊の鋤物。幾久松が御奉公大事に勤めて此御恩。忘れぬ證と差出せば。詞  
 オ、心有げな此早咲。譬て云ハ雨露の恵を請ぬ室咲は蒸も早し香も薄し。盛の春を待といふ二  
 人への能教訓。殊更内よ口さがない者も有ば。何角に遠慮せねばならぬ。幸わしが乗て來た。

あの竹輿で。コレ久松。そなたは堤は染は船別れ〜に逝ぬるのが世上の補ひ心の遠慮。左様  
 でござりまする共。お志じや。乗て往や。娘は船へと親々の。詞に否も云兼る。鶯の片羽の  
 片〜に。別れて二人は乗移れば。ろんなら久松も亦行きやるか。来る正月の藪入を。母も  
 必待て居る。兄御健でれ染様も亦去らばと。詞迄早改まるれみつ尼。哀を餘所にみなれ  
 挿籠にも積れぬ御主の御恩。親の恵の冥加ない取譯ておみつ殿。斯成くたるも前の世の定り事  
 と諦て。れ年寄れた親達の。介抱頼むと云さして泣音伏籠の面ふせ。船の中にも聲上て。よ  
 しないわし故れみつ様の。縁を切したお憎しみ堪忍して下さんせ。ア、譯もないお染様。浮世  
 放れた尼じや物。そんな心を勿躰ない。短氣起して下さんすな。チ、〜娘が云通死んで花  
 實は咲ぬ梅。一本花にならぬ様に。目出たい盛りを見せてくれ。随分達者で。ハイ〜お前も  
 御無事で。お袋様もお娘御も。お去らば。去らば。さらば〜も遠ざかる船と堤は隔れど。縁  
 を引綱一筋に。思ひあふたる戀中も。義理の柵情のかせ杭。竹輿に比翼を引わくる心々ぞ  
 「世ならけり

下の巻

長町の段

鬼は外福は内。打納めたる日暮から。晝を敷く長町の夜見せ賣物家々の春を。請取貸づき屋。  
 賑ふ白取袴の音。どん〜疾からせつきにくる。下女が丸顔とり粉ぬる。鏡の大小子持か〜。  
 分相應の年始め實神國のしるしなり。忙しの中で油屋の小助は肩に風呂敷包。ぶら〜来る餅  
 屋の門。アア勘六爰にか。今日は年越で一日の休み所を透さず。賃搦に迄雇はれるとは。き  
 つい精の出し様じやな。イヤモ是もせふ事なしじやないの。何が寡なり宿りなし。年中の飯米  
 は淵鉾か餅か。五文取の代五六百。此雇賃で帳消すのじやが。貴様の世話でそちの内へ。絞りに  
 雇はれて行に付。いつぞやの座摩での仕業。久松めがじろ〜とおれが顔を眺めおると。ど  
 ふやら氣味が悪いわい。ハテ扱日頃に似合ぬ正直な事云わい。貴様を絞に入て置のも。久松を  
 目論にかけてばい出す仕業の種油。あすは大晦日仕廻仕業じや朝から来てたも。今夜は槌の子  
 でも抱て寝る晩。ころて我等も隙貫ふて是から色の所へ行じや。ア、そふかして月代もすつば  
 り。ア、こりや障つてくれな。たつた今床で結立じや。ム、ろれに又其風呂敷何じやぞい。  
 是か。まりや立に行大盡衣裳じや。内からは着て出られぬ故爰迄小出し。羽織は則此隣の手  
 屋に眺へて置た。ヤコレ。此間の茶縮緬仕立て有かな。ヤ何じや。も亦追付出来ませ。エ、遅

い。今夜色に見せに行のじや。爰から直に着かへて行。何でも今夜はゑら立じや。勘六貴様も辨慶に連れて行。其代りおれを旦那めしらいにしてたも。コレ必久三といふまいぞと。太平樂の下稽古。隣へ入れは立替る。季もわら玉や往來の。足も春めを祇園道。主持身には年徳の恵方参りもそこへにせはしう戻る久松が。摺違ふたる桃燈の。印に目早く見返る女。申し。お若い。ハイどなたでござります。イヤ卒爾な事じやが若れ前はと云つゝ明りに顔見合せ。久松様か。ヤア乳母のお庄是はとバつたり小挑燈。チ、危ない灯をけさずと。篤りと久振りの顔見ませふ。半元服さしやつてから。お果なされた丈太夫様にとんと其儘。チ、きつとした能殿ふりやの。此間の文定めて見やしやんしたて有。孔母が日頃の念願叶ひ。今度殿様にお目出たで。多くの科人も御赦免成さるゝ折柄。一の功さへ有ならバ丈太夫が倅久松。和泉の本國へ歸参するは此時。其功の立様へ先達て紛失の吉光の守り刀。則此度のお目出度に正月三日鑑開きにお銚りなさるゝ。それ迄に其刀を詮義して差上る。跡目相續相違有じと。御家老中の仰渡され。また年も有けれど。親方様へ暇の願ひ。聞届か有たかまぶか。マア年越に健な顔見て。嬉しうござるも餘念なき眞身の詞に久松は。今更國へ往れぬ譯。明ていはれど。

夫はマア嬉しいが。師走の内も今日あすに成て。余りせはしい急な出世。そふして其吉光の刀は手に入たかや。さればいな。大坂谷町の質屋に有と聞た故尋に往た。其質は半年前に流したといふ。彼の刀の失た折から。お國を出奔した鈴木彌忠太。こいつが盗んで立退たは知れて有。其質の置主の名を尋ねても云ぬからは。此質屋も相對と思はるゝ。フウ何といやる。谷町の質屋とは若し。山家屋とは云ぬか。ヨ、ろれ。其山家屋佐四郎。彌忠太は此長町に居るげな。儲な手懸り有からは。必氣づかひさしやんすな。まらつとの所じや煩ふまいぞ。コレ和子チ、マアわしとした事が。やつぱりぼん様の様に追付千五百石の若旦那。立派な馬に乗まして。いしい同勢お國入。お目出たふござります。何から何迄乳母の深切孤子に成久松けふ迄命恙ないも。そなたの兄久作殿のお情。其刀の質受にも。定めて金が入ふだの。是はたしにも成まいけれど。重々世話の恩返し。萬分の一步七ツ八ツ。守袋を明て出す。はづみに落るお染が起請隠すを押して。コレ申久松様。奉公人に似合ぬかね。誰に借しやつたぞ。台點の行ぬ。ア、イヤ、氣遣ひな事じやない。此壹歩は小遣ひにせいと御察人様が下さつた。其書た物の大事の守り。こつちへたもぬの。イヤ待しやんせ。ハテ情深い御察人様じやな。シタ



カ余り親方の情過るも善し悪しの。なには兎も有。しほらしいお前の志の金預つて置ませ  
ふ。此書た物の熊野の牛王か定めて大切な守り有ふ。神様の名を書た物。うゝこしうしては  
今の様につい溝へても取落せば守りが却て其身に崇る。こりやわしが預りますと。ちらりと見  
付て懐へくろめる乳母は守り神胸に納めて。久松様明日の私もお家へ参り俱々に暇の願ひ。  
親方持じやマア早お往いやんせ。諸事は翌と云殘し立別れて立留り。コレ申必國へ行の  
じやぞへ。ア、どおやら濟ぬ頼付じや。ほんに又油斷のならぬいつ迄もぼん様じやと思ふて居  
る内。終坊の親にならんすなへ。コレ怪我さんすな和子。いとじや仕馴ぬ奉公をぞ。昔思へハ  
ひと涙催す師走空。見返りく「別れ行往來人絶へ長町の。夜店の賣聲。小歌物真似。詞な  
まいたんやほ厄拂ひまじよ。落しまじよヤアラ目出たいな何ぼう目出たいな。こなたの御壽命  
申うふなら。鶴は千年龜じやないか。三か六かど一所へ眩やき夜の小働。ナント能仕事し  
たか。サアひがごいの幻妻。侍に合て物いふ間に。ちび引た。ヤア結構な守りじやな。中には  
壹歩書た物も入て有。日本橋でうおせふ。アレく又幻妻が此方へうせる。かへせくそば  
らくに。散る三人を見付た勘六。跡を慕ふて飛んで行。非道の刀追世を。忍ひ頭巾の浪人  
に。小腰屈めて付添お庄。うさんな者ともし召。れ名をれ包なさるゝは尤。一昔過た事なれ  
ハ御見忘れなさる筈なれど。此方にはよお覺へております。石津の御浪人鈴木彌忠太様。其時  
の同家中相良丈太夫が家來。三平が女房のお庄でござりますはいる。ハテナ。成程うういやれ  
ハ見受た様な。シテ此彌忠太には何の用。ハイお願ひがござりますああた様が國元を。お立退  
あさるゝ折節。紛失致した吉光の刀。其誤りて主人丈太夫家返轉。此刀が今でも出れば。主人  
の跡目相續致す。承られハ當所の質屋。山家屋に質物に成。限月の切たれど其置主さへ知れた  
れば。質札を買取。此方へ請戻したさ。色々ど心を碎いて金子十五兩。才覺致して参りまし  
た。どおど其金で質札を。私へお賣下されふなら。ヤコレく何と云めす。スリヤ其質の置  
主を。此彌忠太じやと聞召つたか。イヤ左様でもござりませねど。夫に又廉相千万其置主は則  
盜賊。さし付て身共じやと云やれバ。此彌忠太を盜賊といふを同じ事。女と思ひ聞流せば。慮  
外至極どかさ押にきめ付る。イヤ全く左様ではなけれ共。若あなたが此置主を。御存あらばお  
知らせ成されて下さりませいを打消して。ア、師走の果に左様の事。相人になる馬鹿が有ふ  
か。とはいふ物の。侍の相互尋てやるまいものでもないが。其詞偽りなくハ十五兩の金子。そ

こに持て居召れふの。イヤ旅宿に預けて置ました。ム、手前も只今急用で。他所へ参る。明日参つて篤と談せふ。お手前の旅宿は何所ぞ。ハイおんな事も有ふかと。則旅宿の所書。認めて置ましたと。何心なふ懐へふつと氣の付守り袋。捜せと見へずはつと恠り。詞 イヤコレ身も只今の心せき。重ねて緩りと早参ると。袂ふり切急ぎ行。ア、是申今暫く。詞 エ、折もおり今の守り若人に拾はきてへ久松様の身の大事。其も氣遣ひ。今来た道へ。イヤ。刀の詮義の延されぬと。我身は一ツ二筋道忠義一途に追ふて行。勘六に締上られ。手をすりごうの痛い顔。詞 ア、申出します。出しあかれ。今働いたは此守り。一步が八切其儘でござります。まだ是計じやない。何も角も吐出しおると。せごす後に立聞彌忠太。詞 ヤアわりや勘六じやないか。ヲ、彌忠太様か。彌忠太かとは横道者故よお身共をやつたな。サ、何にも云しやますな。コレ此紙入のお前ので有ふがな。ヤ何の。ハテサれ前のじや。中にはしつかり。是が日外の入かへ。ナぬいかへ。ム、いかに身共か紙入と盗んごな。まだコレ此印籠。ヲ、それも身共ののじや。イエ。其二色ハ。お前様のじやござりませぬと。いふを云せぞと盗めと。二人が寄て踏つ蹴つ。いがみの物取大盗人に。命から逃て行。二人は跡

を見廻して。詞 彌忠太様。先度の壹貫五百目。八丁半でころりと仕舞ふて。ぢき文もたのしまさぬ夫で。算用ずつてみさんせ。エ、ふといやつ。そふして此紙人への何程有ヤアこりやはしお錢じやぞよ。うまい人じや銀なら何のこなんにやらふ。マア。腹立さんすな。此守り袋には。お性根が入て有たれと。ろりやれが飲で仕舞ふて。跡に書た物が有儘に證文と思はる。おりや讀ぬにとつて。こな様に進上すると。渡せば取て夜店の明り。詞 ヤア、ありや是。れ染と久松が起請よい物か手に入た。油屋へ仕懸てぐずりの種。コレ。そんなら。ニツ山じやぞやと。何でも取付餅屋の隣り。詞 待た暫く。此小助も其仲間へ入て。貰をとぬつと出たる男ぶり。久三のどんぞ引かへて。壹丁目脇指やつ仕立。當世風の且那衆天窓。詞 彌忠太様何とあらいか。能事聞た。祝ひに今夜は我等立じや。そりや過分なが。未一口設の手筋。片付て跡から参らふ。ヲ、此勘六も今一白取てから。貴様の餅搗祝ひに行ふ。そんなら勝曼て待て居る。打てくれ。シヤン。最一ツせい。しやん。祝ふて三度おーやあやんのしやん。しやん。しやんと引別れ。護費も拆ら能時分。行んとせしが立とまり。詞 ハア併と。久しう行ぬ馬場前の。田中屋へ行ふか。アいや。きやつが所はぶと打て有。それよ。勝曼の色め

が醜あまきけに。生姜せまが入て待て居る筈はず。先此方へと行ては戻り。詞ア、可愛かあいや髭剃ひげりのれふさが借銭しやくせんの咄はなし。正月屋げつげのせんぞいをも。お前まへと氣入きいらずに喰くたいといふたが。是も行たし。醜あまきけも忝かたじけなし。どふせうか。斯勝かうとまん曼まん六道だうの。辻つぎに待たる以前の丐がい共。詞こちらが仕事しごとの邪魔じやましをつた侍さむらいめはッレそいつじや。たゝめ〜と三人が。有無いうへを云せず引立ひきたる。夢見ゆめみた様さまな。小助せうすけか難義なんぎ。悔いり駈か出す勘六かんろくを。そいつもぐるじやと掴つかみ付。心得こころえ立た白しろどり〜の。餅もちに片足踏あしふみでんで。べつたり尻餅しりもちも重ね。運うんの杵臼きうすつか攪かみ付。末香まっこうげんのま五文取ごもんとり。起上おこつて〜又またまる〜。取粉とりこなにまぶれて頬真白ほこましろどれがどらやれ味方かた同どう士しぶつやら踏ふやら暗紛くらまぎれ。跡あとをも見すして「走り行

油屋の段

難波なにわ詠なめの其中なに。名なに大坂おおさかの鬼門角おにもんかく。油あぶらのしめ木引きひしめて異見いけんの種たねも後家育ごけだま。山家屋やまがやへ嫁入よめいれの日數ひかず迫せまりし大年おほしの。拂はらひは宵よに片付かたづて。春はるを齋こゑく注進しゆじん飴あめり。松まつの盛砂もりすな高盛たかたかの。飯めし椀わんつらりと仕事しごと仕しの夕飯ゆふめし時とき賑にぎひし。詞ア、れさつ殿遣とのんぢひ立たました。今日けふは大晦日おほみそひ一年中いちねんぢゆうの仕事納めしごとなめ。早はやふ仕廻しまわふて知行米ちかちやまいはマア腹はらへ取込とんだ。此勘六このかんろくめんどつちへうせた。めんよふ悪い癖くせで飯時めしときに飯めし喰くず。又酒買さけかひにうせおつたか。あいつの大方おほほうさか子こに生うれおつたでわろ。イヤ〜酒喰さけく

ひの筈はずじや。あいつは薦こもかぶりから成上なつたやつじやげな。傍そばに居ゐぬ者もの譏あざわり合あふ。詞口の惡わるいは欠徳利かけ提さげて外とから。詞ヤイ〜勘六かんろくが事譏ことありやあがつたは長八ながやちめじやな。イヤおれじやない久兵衛くべゑじや。イヤおれじやないぞ〜。エ、喧なましい。どいつまいつの用捨もちない皆覺みな悟としてけつかれ。人の錢借かねかては呑のまいし。それが酒呑さけのんぐら汝等なんぢらが足あでもひよふ付つか。何なにのいのちつと傍そばあたりが熟柿じやくし臭くさい計はかり。吐はかかれんな。惣体そうたい油絞あぶらしぼりといふ者は編絆あむはん一ひとツで働はたらく商賣しょうばい取とり分わけてれれば寒かんの師走しすわも日の六月ろくにんも。年中裸なつかで暮くす故ゆゑはの勘六かんろくと異名いめい付つた男おとこ。此仕事このしごとせいでも能錢のうぜんを設たけるけれど。打入うちい打上うちあげるけつな身に付つけた例たとかない。儂おのらは錢かねが無ないから得喰うぬぬのじや。おれが此嗅かをかして呉くますを有難ありがたいと思おもひけつかれ。一盃いちばい入いて跡あとで飯めしも喰くのじや。此盛もて有あれれが飯めしにどいつでもほでさいたら腹袋はらふく引裂ひれぞ。何なにてもふしづく鬼おにの面めん。そつた腕かひは惡鬼あくきの看板かんばん。障さらぬ神かみに崇あがりなし。詞仕事しごとの賃ちんをへ貰もらふたら逝いて早はやふ年取としとる。チ、どふなど勝手に仕しをれ。ねりや逝いふにも盆ぼんはなし。此酒このさけの勢いきほにぐたたりといつう來年造らいねんぞう一ひとト寐入ねいれしてこまろと。裏うらへ轉込くるま搦強者なほつねに。搦かまはぬ手間取てま家様いへさまへ能あたやうに。詞ホンニ此久三このくさむの小助せうすけは今朝けさからとんと顔見ぬかほみぬ。サア夕ゆふべの年越としこからまだ戻かへらんせぬ。ム、年越としこらと有ある何所どこの

豆を喰に往かれた。大かた納屋の下の影裏豆。こちも逝て唄の煎豆に福へ内に待て居よと住家  
 へ立歸る。木綿てもなく絹てもなく。せふ事なしの山蚕紬。久三小助が里通ひ勝愛の。茶  
 屋で夕べから。しゆつぼく酒の二日酔。こそこの山に送られて瓦屋橋におつと氣が付。詞 ヤア  
 こりやうかへ来て早こちの内じや。もふ逝てくれ。サア最前からいねいひじやけれ  
 ど。内方が見たさに付て來る。ア、コリヤ覗くな手代衆が見やしやる。イヤサ手代共は大事な  
 いけれど。女共が見たら愠氣する。ちやはといねいね。そんなら且那樣かた三日違へなへど。  
 ぴんじやん歸るを待兼て。番部屋の物蔭で着かへる衣裳縹子の帯。上着くる。すつぽりと  
 元の。久三の尻からげ。急かし顔で竹帚。夕べの野等の掃溜を跡から拭ふふき掃除。手桶の  
 切水ばつ。浮名は餘所に立ぞ共知らぬ久松小隠れに。愠氣口舌も聲高に。云はれぬが苦  
 の世界なり。詞 ね染様ちりや何れつしやる云號のれみつさへれ前には見替ぬ私。うれに何の浮  
 氣らしぬ外の色事所かいな。イヤへ何ぼう云やつても合點が行ぬ。是見や久様と書たれ山  
 の文が再へ來るは。どふでも茶屋狂ひ仕やるに極つた。コレハ又疑ひ深い。何所の奴が其な  
 状。誓文が茶屋へ行たら。西から日が出る東堀。いつこ川筋師走の懸取。詞 田中屋でござり

ます。中拂ひの残り拾貫五百文御算用頼みます。ム、田中屋といふは覺へぬがこな様何賣たの  
 じや。イヤ私を馬場前の茶屋でござります。久様にれ目に懸れば御合點。女良衆の取かへが六  
 貫三百變りは御洒取肴。ア、是滅相な此久松馬場前とやら終に往た事もない覺へない。ハ  
 テまな様の知つた事じやない。久様に逢して貰を。サア久松のわしじやはいの。イヤ久松じや  
 ない久といふは此内の且那殿。且那に逢はば分るまつちや。イヤへろんな名は爰にはない。ハ  
 テ扱。コレ且那の口から直に聞た。それが名は油屋の久三郎とれつしやつた。久はひさとい  
 ふ字。ろこでまつちの島では久様といふわいの。エ、ろんな事こちや知らぬ。知らぬじや濟ぬ  
 と聲高に。見ぬ顔しても居られぬ小助。門から手招き。詞 コレへ愛じや。久三郎是  
 になれる。イヤヤれ前は久様且那樣かど。恠りあたふた門口へ。エ、不粹なやつでは有内へ這  
 入といふ事が有物かい。デモれ目に懸らにや濟ぬ出入。じやがれ前はテモ薄ひれ姿で。ろして  
 御自身に門掃どのこりやどふでござりませ。サイヤイ大勢の人を使ふ者へ。且那から斯して見  
 せねば廻る者じやないはいやい。ハア、聞へました。時に聞へませぬは日外から。お風が替つ  
 て勝愛へれ出なざるべな。そして是程の御身上に私が纒の懸を。サアへやるはいやい。ソ

レマア三步取て置。跡は後にこつちから男共に持してやる。それも面倒いれれが直に持て行。ろりや有難いそんなら必。違やせぬはい。是迄算用せず置たは。ね山めがいき方が悪さに肝癪で態と引すつたのじや。イヤろりや且那れ道理なれど。ね山の肝癪で呼屋を踏とは大きなつば。ソレ重井筒にもござります。踏を呼屋に科もない。火燧にたんと火をいけて。待て居ますくいつとれ立と。ころ屋はいたし。生玉さして。立歸る。コレ小助殿。此間かしい大晦日何所へ居ていやしやつた。へ、前髪がなまちよさい置てくれ。久三と手代二人前の此小助。請拂ひは昨日しまふ。年越し隙頁おて戻ると直にはき掃除此働きの目に見へぬか。イヤくそふ斗じやない。明日の節會の枕家具藏へ行て出してこいと。かゝ様の云付。イエー藏の出し入は久三の役じやござりませぬ。ね氣に入の久松。御察人様と連立て行きや。それでは詞に角が有て氣の毒今のばわしが云損ひ。サアいつしよにと傍輩の機嫌取手をひつしよなく。ハテ行なら行が邪広になるがな。あすは元日。大かた姫始めの取越ね染様の藏の鍵。明ましてれ目出たふござります。エ、同じ傍輩で門口から御禮申事へならぬ。此久三には何ぞ成と。けたい悪口傍輩倍氣ふつくさ眩やき立て行。年一日も暮かゝる。四十の浪も世話による乳母のね庄は

久松に。尋ね大坂油屋の。中戸に音ない頼みませう。どなたと内より出合頭。久松様か。マ、乳母か。能來てたもつた。マア、爰へと深切は替らぬ中の行燈の影。男が先へ箱挑燈灯し立たる禮衣装上下ため付山家屋佐四郎。歳暮のね禮とつと入。コリヤ喜八よ。今夜は是て夜か更る夜半前に迎ひにこい。ね勝殿は與にござるか。ハイ左やうに申ませお暫くね待とつて立て。行も見送る主思ひの。乳母か氣の付煙草盆。ほんに幸い能折から。今日もあなたへ参つてね尋申さにやならぬ譯。彼吉光の守り刀。ア、是一昨日も申通り其刀は手前質に取たれ共。もふ疾に流れました。サア其義は承はりましたが。其置主は。若鈴木彌忠太とは申ませぬか。イヤもふいかい事の口數。すゝきやら齧やら此方覺へん致さぬと。齧灰付ぬ詞の鹽。ね茶上ませおと久松が。差出茶碗引たくり。エ、小じたくるい丁稚めじやな。手入らずの染茶碗ちよこ。破そふな煩付茶碗の代りに親方の前て何もかもけつ破てこます。けふは後家に逢てめつきしやつき嫁入の延るもほらうすか有。結納れこしてから幾月にある。今夜中にね染を渡すか。そふなけりや結納の證の脇差一腰金拾兩。取戻してまちから變改。其代に又借て置た百廿貫目。毛迄算用して取のじや。サア案内仕たれ丁稚めと。しやちこはつたり麻袴持持足の穂

に願ひれ。問ぬに夫と乳の人。其なら和子二階で待て居ますぞへど。心残して立て行。藏か  
らうつと。小助か悪智恵。小判の包封押切。先拾兩忝い。此盗人を久松めに。そふじや  
と一人笑。人に難儀を塗文庫の。中へ目録蓋ひつしやり。しめたぞ。時に此金ちつとの  
間。何所ぞに。奥から小助殿と呼立出る下女のねさつ。コレく小助殿今奥で山家屋の  
旦那様とお家様と。結納を戻せとやつ返しつ其中に取交て。結納の金が見へぬといふて。大  
ていの詮義じやない。サアくこんせ。ヲくくろこへく。エとこへ隠して置所に。事角  
折敷飯碗の高盛へつ。込小判のこもく飯。上から押付そしらぬ顔。打連て行奥から口目から鼻  
へ抜目のない女主人。後家み負ぬは銀の利の。うさにかつて聲山家屋。れ勝様結納の證潔  
白に戻さふと云しやつたから。今更否は云れまい。サアく戻して貰ひましょ。サア今ね聞な  
ざる通り。大切にして箆筒に入。しつかりと藏に入て置た結納の金拾兩。今に成て見へぬとい  
ふり。コレ置しやれ。云掛りで戻さふとは云これと。結納戻せば百二十貫目立にやならぬ。所  
で何など引延す。てれんはたべぬ。人にこそ寄れ山家屋の佐四郎。一保が講釋三年聞た。男じ  
や。そんな計畧に乗てたまる物かいの。ガ又嘘でなくば其結納お出しなさを。サアく何と  
つゝかゝる主の當惑取分て。氣の毒餘る久松。私が差出がましけれど。大まい銀さへ立ふと有  
れ家様。纒拾兩の金を惜んで何の真似合れつしやろふ。油屋商賣は大勢の仕事任。毎日入込事  
なれば。誰が業かわ知らぬ共失たには違なし。私共も銘々身晴俱吟味して。今夜中に。度急お  
目にかけてませふ。れ疑ひ晴されませと。挨拶する程むつと顔。何がな小みづをくり出す勘六。  
かたへにどつさり大あぐら。コレ丁稚殿貴様あぢいな事いふの。爰の内に金が見へにや仕事  
仕のれいらが盗んだのか。イヤくろふではないはいの。イヤそふいふのじや。仕事任が大勢  
入込うさんなどいふからた。絞り仲間を盗人といふのじや。殊にれりやけふ頃日の新面じや。  
猶以て耳に立ぞ。但し何ぞ證據が有かヨ。證據もないに盗人呼はり。けたいが悪いぞ。思く  
しいぞ。ア、是々聲高にいやんないの。イヤくろふ留やんな小助。あのせんまめ仕様が有サ  
ハ尤じや。我身の立ぬ様にはせぬ。マアく待ちやいの。イヤ留やんなサアく能い  
わいの。我身の立ぬ様にはれがせぬ。喧しいやんなく。古町じやはいの人立はいの勘六  
正直者じやさかいゑらふ腹立召るハハ。イヤコレ久松。ちよとれじや。サア云てしまやい  
の。云へどは何を。ハテ我身が金盗ん事コレく小助殿。そりや何いふのじや。覺へる

ない事を。ハテ扱もふ叶はぬ事を。其眞顔が否じやはいの。證據の出ぬ中。サア奇麗にいふて仕廻ふたの能からぶぞや。サアおれに云や。エ、知らぬはいの。ヤ實正覺へないか。エ、氣の毒あがら。證據出さすべ成まいと。久松が手習ひ文庫引さげ出。こりやはわれが文庫。アノ左四郎様から。結納の證に付て來た目錄我部屋の入物の中に。コレくく入て有たが通れぬ證據。サ天命じやの。是でも我身が盗まぬかと。差付られても覺へなき。身の災難に詞なき久松が胸づくし取て引すへ勘六の。イヤばつめうぬが盗んぞ金を人にぬつて。よふれれに紋付たな。コレく勘六喧しう云やんな。金の有所ぬかさねば。とづき居て云すのじや。エ、吐しあがれと責せつてう。ね勝は聲かけ小助待ちや。エイれ家様おせに留なされませ。ハテ下人と云ふても人の子。疵でも付たら何とする。殊に其金の盗人急度久松には極らぬ。アノ是程知れた證據有に。サレバイやい。其久松が文庫は。明て有たか錠がれりて有たか。金盗む程の者なら。其目錄は破つて捨る筈の事を。我科の知れる様に。わざく我文庫に入れて。置て然も蓋明て置そふな物か。但し又錠がれりて有たをそなたが明たら。人の箱錠切切ハ盗人の行作。サ夫ならうちにも疑ひが懸るぞよ。サうれば其様に手荒おせずと。靜にしても詮義は成と。ぎつくり詞の角屋敷納めた後家に。いらつく佐四郎。ヤアろりやれ勝殿魚負の裁きじや。現に知れた盗人の久松。そつちで詮義がならず。町内へ断つて代官所へ引摺て行。小助しめ上て詮義仕やいの。ハイ合點と立かゝる。コリヤ主の詞を背くのかと。主命流石うちつく腕。小助せくな。此丁稚めハ勘六に任せて置と。久松が前髪引付平手でびつしやり。起直つて。コレ勘六。こりや何とするのじや。大すりめ小助は傍輩さけで手ぬるい其日雇はれの勘六。どなたにも遠慮はない。金はき出さじや。商賈の油の滓喰はずと。胴骨の油糟。絞り出しても云さじや置ぬと。土間へ引立階落され。髪もばら。あら涙こたへ兼て駈出る乳母。マアくく待て下され待てぬのと庭に駈れり。コレ久松様。ね前の身に曇のない云譯は私がする。ほんに今でこ町家の奉公。筋目正しい此和子に。そんなさもしい心が有るか。無念にござんじよ。最前からお前より。わしが口惜ふて成ぬえいなアと。背撫さすれ。ハ、何じやけたいな婆が出さくにも立ぬ云譯せずと。今爰でだはの勘六が。盗人の政道するをよふ見て置。じやが酔醒で俄にぐつと肚餓なつた。飯一ぱい喰て腹大丈夫にしてから。どふするぞ見てれれと。飯椀引出し箸取懸れば小助は驚り。ア、コリヤ滅

相な〜。夫はマア何するぞいやい。ヤ何するとは。これら飯をこれが喰のに。其が何で滅相な。イヤサ夫はいかにも我が飯そふなどいふ事。サア。これが飯じやに依つて。ア、コリヤ〜。其飯喰ないやい。妙な事をいふ人じや。ム、ばりめを行ふのに。隙が入といふのか。よい〜。らんなら飯喰〜やつてこまろ。一責せめたら。白状さすは膳の上の箸と飯椀放さぬ勘六。ア、是は又情けない。ア、まりや。〜。マア夫を下に置け。此飯は喰されぬいやい。エ、けたいな。そりや又何で。サイヤイ。金の盗人が知れぬ中は仕業仕にも皆疑が懸て有。ヨウ若我が盗んどのなら。盗人に飯喰す法が有か。身の垢を扱た上で。跡で喰と云事。ム、まりや理屈じや。らんならこいつもふしてて仕廻えにや成らぬ。ア、是々大事のこれが扶持切米物いひの付た。飯じややつぱり爰に置て貰を。様々の事で食をめしられる。これが爲にハ食欲饑には是喰はずと。割木引提立かゝる。勘六待ちや。家來の吟味は主がする。雇ひ人のろあたが入ざる差出扣へて居や。らんなら小助が。イヤ我身も頼まぬ。チ、すりやあを様の直の吟味見物致うと。つゝはる佐四郎いやと云はれぬ此場の表。頼みませう。小助表に案内が有小助〜ハイ〜ハテ。となたじやと。出迎ふ門口。兼てや示し相けんを。

互に見ぬ顔空とぼけ。拙者浪人者でござる。此度有付て國方へ参るに付路用の拵へに手詰り。れ家を見かけて御無心と申て唯の申さぬ。實は身の差合せ。賣に参つた一品ちよと御覽下されど。懐より取出す一通。コレ浮土宗一向宗にはあけれ成ぬ。圓光大師の一枚起證贖か正筆かは。たつた一目御らふじると忽知れるれ見知りの手跡ナ何と是斗は買つしやれずは成ま天爵起請文の事。此跡を讀ぎに直を付るが商の秘事。娘御に買て進せられたら。一生の災難を遁れる守本尊でござらふぞや。但し御所望にあいか。ナニ夫にござるれ若人。其元にも入用の物じやれ求めなされい。現當二世の起請文。イヤもふ〜有たがい御文章。れ望みならば。讀んで聞せ申さふかと意地くね悪ふ鬼門の肝先。トレ拜見致うかと。立寄る佐四郎は金神の。中かられ庄が引取て。一枚起請買ましたわたしに賣て下さりませ。御不肖ながらと差出す金包手に取上。こりや僅金拾五兩。こんな事では。サア〜夫を當座の手附。ム、手附と有べ請取た價は何程致さふと。わたしがアイ買ます。今年ハ夫の十三年。此有難い御文章が。何と人手に渡されふ。コレ久松様。れ前の親御丈太夫様。預りの御重寶失ふた科阿辰拂ひに逢の無念さ。れ覺悟の切腹。夫三平介錯の上主人の追腹。れ前は漸六ツの年兄久作



の在所へ預けわしは國にとまつて。とぞ今一度相良の跡目相續の願ひ。御家老中へ月々の訴訟。其時失た殿の重寶此大坂の質屋に有と聞たはれ主の出世時と。其爲に拵へた此金なれど。差當た地獄の苦患通るゝは此一枚起請。其大切な事を何共思ひしやんせぬ。親御の恩を仇に思ふて居さしやるから。コレ見やしやんせ。妙譽西岸信士俗名三平。こりやわしが夫の戒名片時も肌身を放した事はない。お前の親御の御樹所等覺居士。其心では命日も。忘れてかな居さしやらふ。コレ此位牌の夫三平が。忠義の心を少しでも思ふ氣が有あら。未來の約束。忝い御文章を反古にして。國へ歸つて命長ふ。家相續して爺御様に。草葉の影からにつこりと笑ひしませて下されど。恨みも異見も十分一明て云れぬ百千万。我子の様に。養ひ君思ひ詰たる眞實の。母より深い大恩慈悲。誤つたく。もふ堪忍してと歎けば涙拭てやる。あまいは乳母の習ひなり。歎きを餘所に山家屋が伸欠氣。ア、こりや盗人の詮義が來年よ成るふな。イヤコレ御浪人見た所があゝの噂。跡金の才覺心元ない。手附限の事である。いつうこれ買まじよか。イエ、外へんやらぬ。わたしが先約。サア跡金は何ぼでござんす。惣高金ハ五百兩。エ、イ。安い物じや。サア只今請取ふと聞て今更。ハツと計り當惑類を。見て取れ勝

イヤ、無禮なごらりや出來まい五百兩なら私が買まよ。今がよりよ渡さお程に。さつきの手附はあの人へ返しなされ。成程、そおなふて叶はぬ所めくさり金で大事の代物。買取ふとのふとい女め。手附金。ソレ返すと。投出包み。お勝が取上。お侍様。こりや最前の手附とは違ましたな。何が違つた。イヤ違ひました。中は見いでもしれて有る。大かた是は戎様の贖小判。ヤア、ろりや何か手前存せぬ。あの女が。イヤねつしやんか。此や最前の金ではないわしがよふ見て置た。あの人が渡した金は反古に包でござんした。是は是白紙。包が違ふて有からん。お前が内から拵へてござつたふきかへの贖金。正眞の金は懐に有ふがな。日外久松が街られたもてうと此傳。是をたぐつて詮義したら。何が出よふもしれまいと。穴を見付た發明後家暗い仕業は油屋の。明りにきようつく化のかは。イヤ其詮議よりこちらの詮義ドリア起請の正体を顯りしてお目にかけおと。立寄小助を勘六が。取て突退起請の一通す々に引裂たり。コリヤやい、大事の證據を破つた。こつちへたせと云せも立す。廉をつさり片手投。コリヤ何しをると掴み付類に飯椀菩薩の罰。ソレ久松小判が出よふか。ホンニ丁を拾兩。ろんなら此盗人は。チ、こいつじや。もふ通れぬはい。道理で飯惜み仕をると思

また。何でも三ツ山の約束に。儂一人よい事せふとは。去とは下心の悪いごき。もふ此勘六魂  
の返つて。是からは久松が味方。何も角もいふて仕廻ふからは。何所へ尻が行ふも知れぬぞ。  
エ、もふ救されぬと取付を脾腹の當身久三郎。きう共云ず目を白黒。一の裏は堪六が。みたの  
かへりに山家屋も傍杖まゝのるたんば色。同サア佐四郎様拾兩の金子出しましたぞへ。持てお  
歸り成れませ。是でも私が盗みましたか。何のいの。正直正路な丁稚殿。有所さへ知れたら持  
て逝には及ばぬはいの。ム、そふおつしやれば娘にも。云分はござりませぬか。何の有ぞい  
の。ろんなら嫁入の日限は春永に。ア長居致した早ふ逝でいねつみませふと。そこく  
底氣味悪を彌忠太も。ろろくく表へ。同侍待た懐の金置て行。但し勘六が引出そふか。イ  
ヤ、コレあの拾五兩の御文章の代金。深い志の金お庄殿へのわしご返す。どつても波風な  
い様に。わざと何にも云ぬぞへ。チ、サ身共も何にも云分ない。強い顔でも胴震ひ肝を菜種  
に油屋の。辻から横に逃歸る。お庄はいそく。結構な家様の御了簡で。久松の明りも忽打  
て替つた勘六殿。急に能過て合點が行ぬ。同コレ氣遣ひせまい此勘六。久松殿の肩持ねばあら  
ぬ譯え。是見て下され腕に卒都婆の入痣。妙譽西岸信士。ホンニ此位牌の戒名と。合たり不思

議母者人健でござつたの。こな様の子の三之助でござんすはいの。ヤア。別れたは十四の年。見  
忘れさんしたも尤。斯いふ髭類になつた物。一体が小さい時からいけずで有て。倍臣の悴の分  
て歴々の家中の子供衆に礮打たり天窓はつたり手討にもせにやあらぬ處を。親父様の慈悲の勘  
當。間も無死しやつたと聞てかつくり。始めてちつと人間の魂が出来たれば悲しや體がみど  
れ同然親の墓へさへ晝り得参らず。夜の中に寫して來た戒名。命日に坊様呼ふにも。宿なしな  
れば佛様は猶なし。せめて親の之恩を忘れぬ様に彫付た。此腕がわしが佛檀。置所の惡さ下手  
を合しての拜まれす。毎朝片一方の手で御禮申ますわいの。餘所ながら聞けば御主人丈太夫  
様。御切腹なされた元はといへば。紛失の吉光の刀。此大坂に質物よ入て有由。エ、是を請戻  
してお家を立れば。お主へ忠義親父様の位牌へ。是に上こす手向はなぬと。思ひ立た其日か  
ら。金の工面に様々の街事。日外座摩で摺かへた。其銀故に難儀さつしやる久松様が。主人の  
若旦那で有たとは夢三寶。たつ今聞て腸がひつくり返つた擲的。目當の外たも不孝の罰。  
母者人。堪忍して下さりませと。眞實眞身の後悔は。昔に返る稚顔。其氣になつたら親子じや  
物。何の憎かる。よふ健で居て呉たあ。母者人懐かしかつたぞ。抱付緋緋の袖を絞が誠。大つ

げ涙殊勝あり。詞、親子の心底感心しました。夫程に二人の衆が心を盡す吉光の守り刀の爰に有ぞや。エ、そりや又とふして。お前の御手に。サア縁は不思議と久松の人がら。よし有人と見た故に尋ねて聞た氏素性。守り刀の入譯廻り廻つて山家屋に有と聞出し。お染を望むを幸に。こつちから乞て取た結納の證。久松をなたに是のやりさい斗りに。嫌ふ娘を山家屋へやらねばならぬも爰の譯。是を土産に本知に歸れば。和泉の御家中相良久松様。いつ迄も油屋の丁稚で居るの美目で有まい。まゝ年の明彦中と。わしへの義理や何やかや。譯もない事思はずと早ふ出世さしやんせと。渡す後家鞆ぬけめなき情けにれ庄が。涙不甲斐ない我々が思ひ込だ念が届いて嬉しい共。有がたい共。詞、久松様御禮を。ア、是禮は來年ゆるりと。詞、マア行しやんせホンニ母者人。うかして居る所じやない。今夜の内に藏屋敷へお供して。お留主居へ御目見へなされずば。歸參の願ひが叶ふまい。サア、若旦那。早ふに久松は。お染に引ると乱れ髪。撫付る間もせはしなく。突出す鐘は。早夜半時刻が移ると勘六が。先に押立かけ出す足首。片息ながら取付小助投込く、り戸。御家様おさらば御無事で。まめでと内と外隔つる。一夜大年の鐘は百八煩悩を。跡に見捨て「急ぎ行。跡にむざんや油屋

の。お染は一人娘氣に。思ひ詰たる久松に。別る、様子立開に。聞て氣もきへ胸せかれ。爰で添れぬ縁ならば。未來で積る白雪の。庭へ泣く折柄に。詞、お染くと母のお勝が聲すれば。アイくと元の座敷へ立戻る。お勝は左あらぬ顔色にて。詞、あすは目出たい元日。年の終りは寐ぬ物じやげな。譬へそなふても寺々の鐘の音で。寐られぬから持病の癪が差込で。ア、イタ。ちつと爰を推へてたも。あいと娘を何氣なく。手を差入る懷を。明て夫とは細帯。障る手先にお染は恟り。詞、喉様こりやお前腹帯じやないかいなど。思ひ懸なき輿轡。娘をあた腹帯と云物。して見やつた事が有るか。アイい、何のママ。腹帯とやら。ついに見た事も無いけれどお腹にやを胞した時。此様に巻いて置物じやと咄しに聞た斗り。詞、サ、よふ知つて居やる。いかにもこりや腹帯。イヤサア。癪を押へる腹帯。此癪の直る薬をコレ見や。買ては置たれど。下女にも男にも煎じて囉ふ人がない。我身太義ながら此の薬。誰も人の見ぬ様に。こつそりと煎じてたも。ア、喉様の何云はしやんす。薬上るに誰に遠慮。詞、イヤ、人に見せられぬ。こりや此癪を押下るれろし薬。エ、イ、サ、肝が潰れぬ娘の手前も耻かしけれど。太右衛門殿に別てから。後家へ立ても離れぬ煩悩。詞、嵐三右衛門の芝居に誘われ。名云

れぬか美しい若衆形をふはと見てから。思ひ切にも切れぬ悪縁。それが積つて情けない。ツイこんな癪に成たはいのふ。かういふたら定めてうなたの心では。噂様の未練らしい。わしらがそんな事か出来たら。井戸へなりと身を投て死で仕廻ふに。身性な命惜む共思やらふが。夫では我身斗じやない。世間へばつと沙汰に成て。油屋の家は是限りわしも色香を知らながら。心に好ぬ山家屋へ嫁入さすも家大切。今の若衆形の事ふつぱり思ひとまつた證據に。おなかの癪をおろし薬思ひ切て煎じてたも。折角佛様の御世話で。五月にも成たもの。いちらしければ。子を助れば親が死。いひ替した男迄生ぬ氣を知た故。三方四方を納るはコレそなたの思ひ切一ツ。とはいふ物の。譬にも子よりも孫は可愛といふに。初孫に日の目も見せず。水になせとの胸欲を教へる母が心の中は。コレ鬼じやはいの。男の爲親の爲家相續の爲と思ふて。氣に入ぬ嫁入してたも。コレ一生の頼みじやと。我子を拜む母親の義理の腹帯しめ泣に。いかに嫁入致しませふ。チ、出かしやつた。くよふ云てたもつたのふ。其替りにどぞして早お飽れて戻る様にわしや神佛を祈つて居ると。粹な親程取分迫るせつさ。娘の心。互に思ひやるせなき。親子の誠ぞ道理なる。やと時移り。久松は最一度お染よ暇乞。死ぬる覺悟に立戻り。塙の外面に有どとも。知ずお勝りチ、嬉しや。翌は日出たい元日。泣顔ふいて神様へ何やかや頼申そ。サアおじやいと連て行。見越の枝に三尺帯ひらりと内へ久松が。おはや人陰見られじと潜む。暗き夜藏の戸の明たを幸ゆそつと入。跡から付て見濟す小助。外から戸前をどつさり。鼠落しの仕濟し顔。折から外には小挑燈雪の傘差かこる鈴木彌忠太。後を慕ふて勘六が。息もすた。彌忠太殿。一遍こなたを尋たひいの。身共に何ぞ用が有か。有段か。こなたが盗んで立退た吉光の守刀。質屋に有て。手に入た故。たつた今藏屋敷へ持て往た所が。眞赤な贗物。正眞はこなたが持て居よふ。サア尋常に出した。ハ、いかにも推量の通り。質屋めも一杯食はしたのじや。正眞はたれが持て往て立身の種にする。淵に渡してよい物か。夫聞たらもふ能。其刀は大かた爰にと柄にかける。手をもぎ放し。直にすらりと抜打を傘でばつしり請身の手だれ。内は妹背の椽側より庭の井筒に合掌し。南無阿彌陀佛の。聲聞取お染様か。ヤア久松か。どふでも死ねば。ならぬ身の上。未來の一所に手に手を取て。組合ふ外の暗紛れ。手に障つたる小脇差。探つて見れば九寸五分。扱こそ吉光。夫やつてはどむしやふり付を踏飛し。エ、忝い武運の花の開き時。久松様は何所

にござると。夫と白雪白壁の。藏と庭とにあむあみど。アツト苦しむ一聲に。驚くお勝久三の小助。久松めたくたばつたど。呼はり出るを取て引敷。同エ、早まつた御最期と。恨むに甲斐も百八の鐘も打切るしら〜明。かひの聲と諸共に。年のおはりに明渡る。春を重ねて久松が。名は大坂の東堀今に傳へて残りける

安永九庚子年九月二十八日

久松め新版歌祭文畢

紀海音

淨瑠璃作者中近松門左衛門に亞て筆才他人の庶幾すべからざるものは海音なり姓は榎並氏貞峨と號す俗稱喜左衛門後に善入と改む俳歌師榎並貞因の次男して有名なる油煙齊貞柳が弟なり黄樂宗を信じ一度和州柿本寺の僧となりしが歸俗して大坂に住し醫を業とす又契冲阿蘭利の門に入り歌道を學び元文元年法橋に叙せらる元祿寶永の頃より豊竹が爲に作る所の淨瑠璃數種有り之に紀海音と著名せり今出板する所の心中ニッ腹帶鎌倉三代記等は就中傑作なり寛保二年十月四日歿す歳八十といふ其著作目錄左に録す

紀海音著作目錄

- 傾城懷子 元祿十二年八月
- 末廣十二段 同十五年五月
- 新百人一首 同十六年五月
- 坂上田村營 同十六年五月
- 信田森女占 同十六年五月
- 八百屋お七歌祭文 同十六年五月
- 傾城つゝじか岡 寶永元年九月
- 聖徳太子舍利都 同三年二月
- 富親王嵯峨の錦 同三年二月
- 油屋お染袂の白絞 同六年六月
- 平安城細石 同八年四月
- 正徳二年正月

○八幡太郎東初櫻	正徳三年二月
○播州曾根松	同年十月
○鬼鹿毛武藏鎧	同年十二月
○傾城思弁屋	同年五月
○鎌倉尼將軍	同年二月
○鎌倉三代記	享保三年正月
○義經新高館	同年正月
○神功皇后三韓	同年五月
○鎮西八郎唐土船	同年正月
○日本傾城始	同年九月
○三輪丹前能	同年正月
○吳越軍談比翼臺	同年九月
○大友王子坐靴	同年正月
○心中ニツ腹帶	同年四月
○東山殿室町合戦	同年十一月
○玄宗皇帝逢萊鶴	同年正月
○傾城無間の鐘	同年七月
○八百屋お七戀緋櫻	同十七年正月

鎌倉三代記

紀海音作

廣徳神異録に曰く。天地は凶惡を長育せず。蛇鼠は龍虎と成る事能ず。天網恢恢たり去て何處に行んとす。天性大樹の御氣性。花實備はる鎌倉山。動きなき世に扇が谷。千代万代の龜が谷。春知りがほの梅が谷。「時めく源氏ぞ芳ばしき。時維建仁三年源の頼家卿。故右大將家の譲りを請け征夷將軍に拜任有る。虎は威有つて猛からぬ廿二歳の若みどり。丁固が松と見ゆれども李白が酒杜牧が色。ニツのしるに身を浸し政道怠り給ふ故。秩父北條土肥小山齋老竹馬の忠臣等。度々に諫の術盡きて。勤番出仕も遠ざかれは。辨伎邪曲の若者共。晝夜れ側に踰躍する中にも比企の判官が。いつき娘の若狭の前君御寵愛淺からず。一幡君とて當年は四才の若君まじませば。勇心に邪を裁けど御前能員とて。貪慾驕邪のあら入道同名三郎員家。笠原太郎兼澄中野の五郎廣教。胸に惡事を徒党の武士まくらをわつて謀計の。色には出ず判官は謹んで申様。同。扱も此比出羽の國羽黒山の山伏。願行院豪海とて當國に徘徊し。假令は手足叶はざる年來の病人を一所に働かせ。啞に忽物言はせ盲人に眼を開かせ。難病癡病加持力にて本復

鎌倉三代記

させすと云ふ事なし。世擧つて此驗者を活不動と尊稱す。去に依て某も密に私宅に招き寄せ殿若君の御身の上御祈禱を頼みしに。丹精を擡でて御壽算二百余歳迄は。髓に加持し延せしとくはんじゆを持参し今朝より。御廣間へ相詣させ置く。御目見得を遂げさせ度願ひ入ゆと詞を盡し言上す。願家御機嫌麗しく其驗者義は某も。先達て聞てあり急いで招喚致すべし。それ此方へと御誼にて。奏者に連れだち願行院。悠々と立出て御目通に畏る。願家御覽じ。願行院豪海とは貴僧の事よな。世は濁乱に及べども三密ゆがの功積り。病苦を救ひ且うは又鎮護國家のしくはんの旨。甚以て神妙なり。今日よりして願家が祈の師ぞと。宣ひて。渴仰あるこそ笑止なれ。豪海詔ふ氣色もなく左右を見廻し打咳き。其昔役の優婆塞孔雀明王の咒を主持し。鬼神を役し人民の壽命を延し。法流を汲知る者は今の世に恐らく拙僧只一人。此度修法の加持力にて御壽算二百余歳迄。懺に請合申せしと廣言放つて言ひ散す。問注所に扣へたる朝比奈の三郎するくと走り寄り。豪海が膝元にとつかと座り。コレ御坊。某元來武骨者佛法も有難いも仙術の不思議なるも。曾て以て存せねども。大かた人の壽命にはほう量の有るべし物。大食大酒滯事を随分謹み嗜んでも。百年は活にくい。よし又和僧の咒咀で。我君二百余

歳迄御長生なるとも。誰あつて其時迄御奉公を仕り。慮か誠の証據には何者が出て立べいぞ。と云やら護摩の灰臭い。判官殿も旁も。獨結仲間のぐるらしいと頷叩いて冷笑ふ。かねく締合せたる中野の五郎つと出。いしくも言れし朝比奈殿。八幡拙者と同腹中正法に不思議はない。外法成就の人ならば其段は知ぬ事。命を延るも縮めるも畢竟以ては同じ事。某を一加持に祈殺して見せられよ。經文の端くれも些ぞ覺へて居る男。験證なくては信用せず如何にくと語掛る。豪海些とも悪びれず。詞。チ、面白しく。邪正一如の宗意あれば善惡には拘はらじ。望みに任せ其方の命を落してたつた今。嘲笑をふさかんと印事々しく結びかけ。神咒を唱へ眼を閉ぢ暫く觀念する内に。不審議や五郎忽ちに面色變り慄ひ出し。おら耐がたや苦しやな。大聖不動明王の索に五体を締付られ。手足も凍み動ぜど。眼を見つ先戰慄しは不審議と云も余あり。各是へと仰天し天晴御坊の御法力。方便の御殺生最ふ此上へ御赦免あれ。縛をも解せ給れと聲々よころ詫にける。豪海ハ打領き夫こそ出家の本懐たり。苦痛を救ひ申さんと重ねて印を結びかけ。珠數さらりと押揉ハ五郎即座に起直り。先非を悔ひ涙の体皆々ハット感じ合。頭を垂れて居たりける。詞。朝比奈かつらりと笑ひ。此義秀がむき出した黒い眼を抜

ふとは。むまたらうい。旁。賣僧坊主が行方にてちくとん斗朝比奈が。腕先にて縛つて見よ  
 然ないと。汝大騙。一寸もたせじと。太刀捻くつて押直る勢ひに氣を吞れ。豪海左右返答なく  
 五人の者もうぢくとかたすみ欲しき氣色なり。斯とは誰か知せけん和田の義盛駈來り。御前  
 に畏り。君を始め諸歴々御尊敬ある客僧へ。悴に比朝比奈め持病の我儘差起り。慮外の振舞  
 致す由千万恐れ入候。義盛日頃の忠勤に思召かへられて。御赦免あらせ給はれと頭を付て言上  
 ある。判官大に悦んで。ヲ、御尤く。子を持ってこそ世の中の親の心は量るれ。法印へハ  
 某が幾重にも詫申さん。御子息の我儘も時に取ては武士一疋。浦山し。底意を發さぬ  
 証據には若狹の前が妹に。淺茅と申す乙娘貴殿の嫁に進せたい。朝比奈殿を判官が駕に取る儀  
 は成まいか。とぞじやくと抱いる。是も巧の一ツぞと義盛合點行きながら。然れらぬ体に  
 會釋して。出頭無二の能員殿殊更以て我君の。御縁家に繋る事身に取ての大慶と。世に嬉し  
 げに領承ある。朝比奈すと立上り。ヤア付上るを入道め。今日此頃に漸と取出武士の分際  
 で。御なんどはぞんざいな口引裂んと飛懸るを。義盛中よ押隔たり是非辨へぬ若者哉。汝を  
 駕に取んとは心に一物有ての事。契約申す義盛も心に一物有ての事。平にくと囁けハ朝比奈

早く合點して。成程駕に成りませふ。是判官殿隨分と。仕拵にお氣張られい。嫁入長持塗  
 箆筒琴箱貝桶狗張子。部屋の世帯も其方から。味噌鹽薪米油。其外てんじやうむじやうじやと  
 笑ひて屋敷に「歸りけり。頻伽の飼籠の内よりも其聲諸鳥に優るとかや。生先しるき初元結。  
 千幡君と聞へり。頼家卿の御舍弟にて今年十二のゑとの馬。手綱かいくり静々と春の野鷹の  
 乗姿。優しやかに美しくばつとりしてしほらしく。實にも武將の嫩とは名乗て知るき御器量や  
 山の内の松蔭に暫し御馬を扣へられ。谷七郷の繁榮を悠々と眺望ある。茶道坊主の勘齋を近く  
 參れと召寄せて。汝は當地の者あれば。此所を以前より鎌倉と名付たる。謂れば定めし知ら  
 んな。イエ、所には住み候へども名所とも舊跡とも。白河夜舟又してもうまい所を引おこさ  
 れ。髪作つたり燻べたり困つたる若旦那。語つて聞せたび給へ。されば入鹿の大臣とて。猛惡  
 無道の逆臣あり。又大職冠鎧足とて智仁勇を備へたる。忠臣是を悲みて天神地祇に祈誓をなす  
 忠貞神にや通じけん天より一ツの鎌ふりしを。これ吉左右と押戴き欺り寄て入鹿が首。水も堪  
 らず揺落し。それより天下太平の守りの爲と其鎌を。此相州に納し故鎌倉山と名付たり。なん  
 と目出度い所であいか。ハ、ハ、ハ、殿様にはいつの間左様の事を御存じ有。然らば拙者も



覺へたる谷々の名は多けれど。寢もせで君を松葉が谷。耳と口とにさゝめが谷託は盡ぬいづみが谷。憎いかい、ヤ可愛がやつ。のほせばいこふ厭るが谷すしなやつとて誹るがやつ。折角茶の湯教へても銀くれるやつ呉れぬやつ。客いがやつか酷いがやつ。あらまし斯様候と呆言盡せば若君は。氣さくな奴とのれ口合馬上「静に歩ませ行く。東見かどの向ふより比企の三郎買家。御所よりの歸るさに此所へ來掛りしが。出頭自慢の鼻の先千幡君のれ先とも。知ず顔なる咳拂ひ邊を拂ひ打て來る。御近習の若侍つかく」と立寄て。詞 ヤア比企殿にて候か。若君のれ供先下馬なされいと立塞がる。三郎驚く氣色あく。當時某下馬せん者武將ならで恐らくは。鎌倉中に覺なし。家來の者共片寄るな通れくと云放つ。お先徒士の衆聲々にヤア緩急なる詞かな。詞 大樹の御舍弟千幡君眼が見へぬか醉狂か。但しは引すり下そふか返答聞んと罵れば買家けらくと笑ひ。眼潰ればおぬしらよ。我君の小鼻辨へ知ば其方より。きつと下馬をば致す苦若輩人に見許すと傍若無人に云散し。一鞭あてははいしおと中突割て駈通る。コハ慮外者遊ぶごと一度にはらりと抜つれて。追駈んとする所を若君は聲を上。詞 ヤレ早まるな。彼等が無禮は頼家の御心よりする事ぞ。大老役を相勤る和田秩父さへ了簡して。見通しにする狼藉者

若年の身が云募り。かれいに迷惑致させて頼家公の御心に。嬉しとは思すまじ。親兄の禮重ければ堪忍するぞ旁よ。必粗相致すなど道の道たる御一言。御幼稚ながら頼朝の器量の胤を受け給ふ。聰明敏智の生れ付色には出す心にも。千里の馬も伯樂に逢ねば跛同然と。世を恨たる御外皆近習の武士も口々に。扱も憎い比企がやつ。いざ追着てきりかやつ。ぼつこしもないやつとを。越て屋形に「入り給ふ。善惡を身に與らず忠言の。鋤鋤止し畠山重忠の風數には。賓客車馬の道絶て雨を疑ふ松の風。糸に乱るゝ淺みどり五柳先生窓に倚り。七松居士が床に伏す氣色を見せて文机に。文武の眼まくばりて悠然としておはします。本田の二郎親經。宿直に詰て居たりしが差寄て小聲になり。詞 今日御所の様子をば未だお耳に達せずや。巨細の確と知らねども倭人原と朝比奈殿。口論を仕出され鬪諍に及びしを。親父義盛駈付られ事穩便に納まる上。判官が乙娘義秀に妻すとの。契約迄わりし由。一門廣き和田殿が悪人徒黨に成れて。やす大事にて候はん何とぞ御思案廻らされ。此縁組を妨げて然るべうやと何へば。重忠莞爾と打笑ひ。ハテ吉左右かな。比企と縁組致せし義盛天晴發明者。敵の手段を此方の手段にするが軍書の秘事。れゝ頼もしき和田殿と咄の跡もとりわへず。又差向ふ物の本氣もし

んくと澄渡る。夜も闇に裏門を忍びやかに音づる。親經頼ておつとり太刀駈寄つて差覗  
 け。頼家卿の御母君千幡君と只二人。扉の外に立ち給ひ。重忠に對面し密に尋ぬる事の有  
 り。案内せよと宣へば。ハットばかりに立歸り斯と告れば重忠も。驚き遶て迎に出。御兩所を  
 勞り上座に誘ひ奉り。其身尤遙に押退り。重忠お召るべきを夜陰の御歩行。去とは氣遣し  
 く候と謹んでればします。母君暫し御涙御衣を絞らせ給ひつ。さればとよ世の中に自程な  
 憂事の。數々多き者はあし。頼朝卿に別れし時共に黄泉に趣くか。去すばいかなる山の奥谷の  
 蔭にも世を厭ひ。後世願はんと思ひしに二人の若に身を繋れ。心にもなく世に立て歎きを重ね  
 日を重ね。漸として頼家に家を譲りて嬉しやと。思ふ甲斐なく此頃は酒と色とに打乱れ。親  
 の諫を聞ぬからまして臣下の強異見。憎み疎めば旁も出仕を止め給ふに付。小人共が世に  
 誇り人を人とも思はずして。今日此若が供先を乗打せしとは何事ぞや。いかに文盲野人にて刀も  
 腰に帯む身が。主従の禮を知ぬとはよもや世間へ云れまじ。頼朝生てましますば斯様な不義は  
 致すまじ。後家の子ぞとて侮るのか。武將の弟たる者を匹夫の馬の蹴上をかけ。衣裳を汚せし  
 無念さを。思ひ盡りて給ひれとさめと泣いておはします。重忠横手をちやうと打。古今稀な

る狼籍者。狐は虎の威を借るとは斯様な事を申べき。糺明致すは易けれども露顯に及ば頼家  
 公。政道暗に譏あり何れを何れと別き難き。御連枝の中なれば知す類こそ御慈愛と宥め申せば  
 母君は成程其方の云ふ通り此事のみは自が。心ひとつに濟もせん只恨めしき頼家が。邪曲  
 者に氣を奪はれ其行末は身を亡し。國をも遂に失ふは鏡にかけて見る如し。切て此子を亡人の  
 形見と思ひ障妨なく。成人さして眺めたし其方ならでは後見に。頼まん武士はなきぞとよ日頃  
 の忠義改めず。勞り仕へ給はれとお手合すれば重忠。コハ勿体ない御有様。頼家公の若氣  
 は老臣どもが入かはり。千度も萬度も諫をいれ夫にも承引なされずば。お家の爲には換られず  
 無体に押込參らせて此若君を守育て。菅仲晏子が義を守り鎌倉三代將軍と。付き申さば四海の  
 内靡かぬ草木の候まじ。人かすならぬ奴原は鰍魚の水を蒸ふとも。遂には自滅致すべしれ心安  
 かれ母君様。今宵お成の壽に指古し候へども。畠山が重代を若君に獻上と。太刀をお前に差  
 置ば母君顔面打解けて。ナ、頼もしく去乍らりれうが如き忠臣も。夷の方へ降參し章邯が勇持  
 たるも。秦を背きし例あり。二心なき神文に血判あれと宣へば。重忠少しもせ笑ひ。神文替  
 紙と申す事武内の大士の。湯起請より事起り。鉄火を握り或は又牛王に血をばあへしなど。上

古の風儀に候へども末世は人間邪曲なゆへ。神も非禮を受け給はず誓紙の名有て誠なし。義經を偽る土佐坊が七枚起請の先例をぞ。お家に於て不吉あり。夫までもなく御心を安め申さんそれしと。詞の下に親經奥の襦を引明れば。朱の鳥居のありしと八幡宮の額をかけ。鐘を列べ玉垣の光輝く有様は殿しくぞ見へにけれ。重忠頓て懐中より一紙の願文取出し。高らかにころ讀上たり

忠臣しるゝぞろゝ

再拜し。愚臣重忠敬つて申て申さく。うれ神道人道正直の一ツを以て建立す。就中正八幡宮の源氏累代應護の尊靈。神に誓ひて面々が約束堅き金鐵の。鐘一領旗指物。寶前に納め奉る。扱若君の御手を取り。一々次第に教へ給ふ。まんづ東の第一は御代万歳の春秋を。重ね櫻や八重櫻。小櫻威花やかに。いむけの袖の白妙に。曇らぬ光り久方の。月に星の指物は千葉之介胤直。忠義の弓の一張し矢竹心の幾度か。敵を欺くやり梅や。鳥毛にまがふ鶯の。花に留りし印はそも。坂東の八平氏。時めく武士の名取川。名乗て通る時鳥。卯の花飾る腹巻に。夏の雪かど過たる團扇の紋は見玉蕨。風にそよそよ。吹貫の梢走りに散り浮ぶ。紅葉流しの龍田川

緋威は岩永黨。五番に見へしは春日野や。紫裾濃の割小札。兜の星の鬼きて真向周庇忍の緒。鐘の指物は信濃の七黨ごさんめり。萌黄匂ひの最上方。しやうじの板の揚巻に四目結を附たる。近江源氏の佐々木とは。誰も知らん白糸を染ぬ心に色と香を。鈴がはのひなめ綴。鬼の腕を鋭くも。いきり目立つ指物こそ淺利の興市と御覽せよ。扱八番に飾りしは紺糸威の胴丸に。惣覆輪の筋兜大旗小旗吹流し。ね花流しの染こみは武藏の國の住人。仁田の四郎忠常。次に列ぶのいづとも向ふ敵を宇都の宮。好む所の藤縄目龍虎の指物殿しき。末座なれども隠れなき。黒草威よ金紋のニツ頭のまふたるは。駿河の國の住人天智天皇の末孫。竹の下の孫八左衛門。扱其外大和源氏美濃侍。近江の國には山本柏木木村姉川。播磨の國には富田高梨赤松黨伊賀に服部印勢平氏。三河に足助矢矧武者。出雲に道田河井山。伯耆に能麻姉輪の一黨。惣じて日本國中の侍所武者所。嫡流祖流倍臣迄末世末代子々孫々。永く源氏の幕下に屬し不忠の心を扱まば。神罰疑ひ有るべからず。今日よりしては重忠が若君補佐の臣となり。眼に魏徴の鏡を張り眩に諫の鼓をかけ。胸にひはうの木を抱き美惡邪正を手の内に。四海太平國繁昌連や。濱の貝砂の盡るども。源氏の御代に盡せしと三べん諸奏つれば。母君若君諸共に悦び勇

み立給ふ。漢の太公きじんけつ。慈あり敬あり忠ありとも。中々申ばかりはなかりけり

第二

手車の品こそ變れ。源は清和の流れ堰とむ。戀の淺に頼家公色と酒との乱れ髪。さばけ過たる近習のそより上たる太鼓口。拍子に乗て手車の女房達はさばく。殿御一人を宿の花枝を離れぬ風情にて。太股つめる痣ぬく姿顔れてしどけなき。若狭の局奥をりも悠々と立出て。同ナフ申我君様。どふ思召すれ心ぞ正体もなき御風情。母君様や北條殿御耳へ入ハ賑やさぞ。御歎かしく覺ぎんと實体つくる風俗の。爪はづれさへ優しけれ。頼家ほとんど無興有り。同惣じて女と云ふ者は子を産むと早や氣が沈る。此界に樂は色と酒とに極つた。なんぼお富士が名山でも抱て寝たらは冷たかる。更科の月じやとて左のみ變つた事もあし。鬼角浮世ハ柔かな。膝とぞんこと引寄せて足擦らせておはします。同若狭の前は聲を上げ。コレ申父様兄上も聞召せ女の目にさへ余りたる取所なきお遊びに。踊り狂ふて座ますまな様方の御心底。何とも私こと道理なれ。同判官眼に角を立て。入ざる和女の諫言たて格氣の様で見苦い。大將の御榮耀

珍らしい事でもなし。女護の島へ渡らふと仰られても是非ないに。屋形の内のお慰み重疊の義と思ふて居る。御異見ハ此方の役和女の役は氣に入る役。やくたいもない事云ハずとも一幡君のれむづかる。奥へ〜と睨られて驚る詞をいへへに。言ねハ胸に乳も張て憎々〜として入給ふ。斯る所へ秩父の六郎重保披露も遂に入來れハ。頼家卿も近習も俄につくる武士行儀咳拂ひこそ笑しけれ。同ア、大事な〜。些ども御騒ぎあそばすな。重忠ころは年に耻ぢ片意地ばかり申せども。此重保めは我君の日々夜々の色遊び。御浦山しう存る故扱こそ推參致せしが武將共有ふする御器量に去とては。御慰みか小いと氣を持すれば頼家卿。同ム、なんといふ重保。手の變つたる挨拶は是も異見の色品よな。それとも遊び小さいと難じて見たる心は如何に。さん候我君の遊樂あそばす名は高く。見れば女中四五人なを相手に取てのれ樂み。大磯狂ひ仕る小大名より下の事。和田酒盛の昔なと手はなした義の面白い。其熟々存るに女中の五百も三百も。お泉水へ追放し龍宮城の樂みは如何あらんと云ひければ。頼家近習口々に八幡飲る物好かな。サア〜女中用意あれ乙姫ハ美人の由。差詰に若狭の前それ〜つかめと立騒ぐ。同重保は小聲になり。イヤ〜子持ハ寫るまい。その妹の淺芽ころ比企殿の乙姫。乙姫の名も

御容色も似合しからんと勤むるを。頼家暫しと御思案あり成程淺茅の容色の義は。聞及んだり去りながら。同 氣の毒の夜前はや朝比奈と云ふ男を持つ。あの露面の意地張者斯様の事を聞たらバ。鎌倉中を一夜さにてんぐり覆うと云ふもの。殘念さよと宜へバ。同 ア、お氣弱い事はかり。往昔鳥羽の法皇は源の仲致が。妻女の美質を聞き召し。仙洞に召入れられ御寵愛をばされ。祇園女御と是を稱ふ。其後仲致法皇を恨むる色の見へければ。官職を削られて隠岐の國へ左遷ある。斯様の例も候へバ一寸一筆御墨付。某に賜はらば朝比奈に對面し。淺茅を迎へ参らんと手に取る様に言ひ放す。判官重ねて和田秩父同志討さする陷阱。仕済したりと下笑し。同 ナ、頼もしい。娘自慢でなければも小憎体なる朝比奈には。些と過たと思ふて居る。頼むと云ふに頼家も硯引寄せさらし。一筆書て賜はれば重保頼て懐中し。お氣遣遊ばすな彼奴を云い伏せたつた今。御輿を入れて此御所を目前の龍宮界。珊瑚の枕珊瑚の帶琥珀の盃眞珠の鍋。人魚の吸物鱒のぬた。鮎の一こん焼孔雀の摺身鳳凰の。玉子のふはしふはと乗る人心ころ「愚なれ。吉日を三浦の家の御祝言。九十三騎の一門は云ふに及ばず大小名。出入の町人御用人御部屋見舞の菓子杉折。蒔繪の文箱紅の紐解初る花嫁御。淺茅の前を聞へしは二

八にニツニツ斗。歎へ足したる容色とし聲の鶯百千鳥。聞て詠めて口吟む歌の趣向を懐しき。斯る所へ朝比奈は無興顔して立歸り。同 エ、嫁入程世にあくる面倒な物はない。外へ出れば髭頬かほそつたなど夢聊か。知らぬ難題云かけられおた胸悪さに立歸れば。めいりうめらがちらばあて油臭くて頭痛がする。傍へけん寄るまいと拳を振れば女房達。逃す奥むぞ走り入る。淺茅の前は立寄りて去とは初心な。其様に當言は言ぬ物嫁入た晩から側へも。寄ぬといふはあんなまりと無念な事を抱つけバ。同 ア、したるい許してくれ。拜むと迷廻るを。同 イヤ、人の來ぬうちにれ前に些と無心がある。サア其無心が嫌ひ物。今日は大事の精進日嫌ひやくと聲立る。同 スリヤ頼む事聞ぬか。エ、あたくといと振放し。駈入んとする所を淺茅の頼て懐中より。護脇差取出し既に自害と見へければ。朝比奈頼て抱抱留め。同 サア品に由て聞てくりを。短氣なる女がある如何にも無心聞である。ひらにくと押留む淺茅悦び手を仕へ。同 無心と申は別ならず。耻しながら自を判官殿の娘とは偽りにて候と。云はせも果ぞ朝比奈。ナニ能員が子でないと云ふ子細は。ア、御不審は御尤。誠は都六條の傾城にて候が。畠山の重保様京詰の折節に。假の枕の重なりて仇に思はぬ中なりしを。御奉公とて是非もなかつし此國

へ御下り有。程なふ迎ひのれ乗物身請も首尾能く相濟で。いそ／＼爰に下りしに思ひの外な判官殿。奥の一間に呼入れて向後身共が娘分。風俗も更めて諸事高尙に嗜むべし。和田が秩父か兩家の内嬪に取るどの仰ゆへ。重保様に逢ふ事も存生有りし効もなく。此お屋形へ嫁入は死ぬべき我が時節なり。ね情あらば朝比奈様我戀人に逢せて給べ。頼みますると泣居たり。朝比奈覺へず手を拍て。扱巧んざり／＼。コリヤ氣遣すな禍ひも三年をけば役に立つ。身共が女房嫌ひなが和女が爲には大仕合。願ひの通りさつぱりと婿を明けて其上に。重保と媒介も此朝比奈と云ひも果ぬに奏者番。御上使として畠山六郎殿の御出と。聲々に呼はれば淺茅はハット立上り。サア彼の人が見へました早ふ逢せて／＼と。うろ／＼するを押留め。某所存有る間。先暫と奥へ遣り式臺に「ころ出にけれ。重保上座に押直り威儀繕ひて云ふ様は。殿の内室淺茅姫。容儀優れし其聞へ上聞に達しつ。御殿へ召れ御酒宴の御相手にと有る御詔にて。某迎ひに参りたり。きつと御請申されとと詞鋭く相述る。朝比奈ふつと吹出し色狂ひする程有つて嘘ごうのへた狸殿。尾を出せ／＼手も出して。下されませいと降参せい。喰ぬぞ／＼六郎と頭を敲いて打笑ふ。重保少し色を變へ。某一生假初にも虚言云ふたる覺がない。

疑はしくハ御墨附頂戴あれと差出す。義秀ハット立寄つて巻返し繰返し。す々に引裂て大太刀半分抜寛げ。大聲揚て。コリヤ六郎。此お使を承りうはかと爰に來りしは。三浦一家を侮るのか但は比企の判官に。眼を刺れたが怖かつたか所存を聞んとつゝかくる。重保騒ぐ氣色なく非道の使者に某が望んで來るは子細あり。當時大名多ければ和田と秩父の兩家こそ。文武の人と指れたる其義盛の何故に。無道卑劣の判官が尊に貴殿を致されしは。重保更に吞こまぬ。善惡探り知らん爲態々推參致したり。忠心變る事なくば妻女を君へ上られよ。但惡人一味の氣か有無の返答眞直に承はらんと云ひければ。朝比奈顔色和けて。成程得心した。扱な女房と云ふ者は一夜でとんと持おもり。ほかし所を其所此處と思案して居た眞只中。詮意殆ど満足せり淺茅／＼と呼びたける。聲に従ひ走り出。喃六郎様懐しやと縫り付て泣にけり。重保ハット赤面の色も聲音も押静め。比企殿のお娘御淺茅の前とは御身よな如何様世間の沙汰程有り天晴御器量御容体。我君の御望みも道理々々と立退くを淺茅は猶も取縫り。未練に候御卑怯な。恨が有らば打明けてなせ聞へぬと宣はぬ。判官殿に欺られ愛い月日を送りしも。れ前にとふぞ逢ふかと思ふ心の樂みに。今まで生てはありしぞや誰の怖ふてうぢ／＼と。見知らぬ顔を

仕給ふと。千々の思ひを一口に云ふて歎くぞ道理なり。重保ほうと持あつかひ。返答もなくきよろくと溜息次て居たりけり。義秀立寄り襟元をほどくと打敲き。ぬつくりとした貞付でおつかない事して置たる根本根元聞て居る。些少には候へ共女房一足進上する。三百目とはねだるまい。先抱付嘴付ともどかしがるも可笑けれ。重保莞爾と打笑ひ。遠來と仰られ美事の女房賜はりて千万大悦仕つる。私宅において打をかず賞翫致し申さんと。手を引あふて立歸るを朝比奈向ふに立塞がり。先待て一言問ふ事あり。シテ其方は眞實に女房に持か自然又君へ上ふで連行のか。ム、あたらしい詞かな。始に貴殿の内室を迎ひに來たる某の。今では自分の妻女とて何と違變の成る物ぞ。只今御所へ連行くと聞より中に押隔り。弓矢八幡そりや成らない。此朝比奈が媒介大錠を數百本。打付たより堅い事。日本國が動してもびくとも動く事はない。臆病至極の胸が臍の下へ落着たら。何時にても迎ひに來い。夫までは身が預ると腕押捲れば。重保も氣色を損じ聲荒らげ。ヤア無禮過た朝比奈。汝が媒介を頼みにて六郎妻を持べきか。假にも比企が娘とは名を聞くさへも穢はしい。さつはりと縁切たぞ。チ、去らば去れ此上は朝比奈が女房にする。イヤ御詮意じや連て行く。ナンジヤ實正請取か。スリヤ何

分にも渡さぬか。ヤルマイ渡せ。ヤルマイと互ひに詞詰あふて鐙元寛げ立寄れば。淺茅は左右に取付て許さない事にお命を。果し給ふか情あや。自跡を晦して屋形に見へぬと有るならばれ二人様の我君へ申譯ころ立つべけれ。時節を待て判官と親子の縁を切たなら。心變ず六郎様女夫に成つて給はると涙ながらに立出れば。兩人ハット感じつゝ出來したり神妙なり。今出て行くた知らぬ分夫婦の縁は切た分。此屋形をば欠落分朝比奈殿の分も立つ。貴殿の分も立つであろ。如何にもく。去らば。去らば。去ばくと三方へ別れ行く身ぞ一切なけれ。藝として爲ざる事なき樂みは。富貴のかくの癖とかや。斯くて御所には重保が遅参いかいと夕暮の。鞠場に騒ぐ女中鳥こだまの響く大廣間。弓鎗斗役目とて立列びたる氣色なり。然るに和田の義盛は黒ぶちの乗物を。玄關深く昇据させ誰ぞ御取次頼ましと頼みま升と云入る。中野五郎立出てヤア珍しの和田殿。何故御出仕あられしぞ。サレバ上意の旨を受け。朝比奈が最愛召連れて参つたり。宜しく御披露頼みます。ヲ、御太儀く追付て御對面あるべしと。奥へ入らんとする所へ畠山の重忠。是も時繪の乗物をお次の間まで昇入れさせ。コレ中野殿。お取次頼みますると聲かくる。ハア是はく重忠殿。貴殿も御出仕有りしよな。然ればとよ倅重保め上意を

受けて朝比奈の。妻女を伴ふ途中より。俄に邪氣に當られて身心惱み候故。運參を憚り其誘引致し候段。御披露頼むと云ひければ。中野合點はゆかねども咎めてしてねぢ者らに。しごかあめに逢ふかと。成程承知致しと御前を指て走り行く。義盛貞をさし寄せて。同 ナフ重忠。朝比奈が女房は此乗物の内に居る。御自分同道致されし其乗物は何者ぞ。重忠莞爾と打笑ひ。其方にも朝比奈の内室伴ひ給ふとは。儲に見届け罷在。此方も又朝比奈の妻女をば連れ参つた如何様武士の魂の割符を合す様な物。合は仕合違ふたら。その時互ひに改めふ。ハハハハハ。秩父成程尤じや追付割符が知れず物。然らばお尋ね申まい。ハテ扱後程と。互ひに尻目遣ひ合物をも言はず扣へたり。斯くと聞くより頼家卿頼て廣間に御出あり。義盛此方へくと仰に従ひ乗物を。手ぐりぐりに昇出れば。大將浮れ出給ひつ。籠の鳥とは恨しむ。姿をちよつと水鳥を飛せしと御意を受け。義盛頼て乗物より黒革絨の鎧を出し御前に指置て。謹んで畏る。君を初め近習共は抑如何にと呆れつ。きよろしとして居たりけり。義盛貞を振上げて。詞 ハア心得ぬ旁か。朝比奈が最愛を御所望と有る御墨附。重保上意を逃られし惣じて武士の最愛ハ弓鎗小太刀薙刀など。色しな數多候へとも。俸に候朝比奈は度々の先駆矢

軍に。裏をよかへさぬ鎧とて親より子より兄弟より。別て最愛致す故。中々惜み申せども上意をいかで背かんと。無体に持參致せしが若し粗相ばし候かと然あらぬ体にあいらふ。詞 頼家くはつと赤面あり。汝ら今日來る事素直の所存に有るまじと。先達て推量せり。重忠が慮外をも序に聞て遊ばんと。宣ふ内よ乗物を同じく手ぐりに昇入れて。白銀の猫取出し御膝元に差置て。其身の遙に押退り。詞 是は先年頼朝卿西行法師に下されし。銀猫にてゆを。修行の旅の妨げとて。門前の童に投やりて通りしを。縁を求めて某が家の秘藏に仕つる。承れば我君は朝比奈が妻女をば無体の懸幕あるはす由。詞 彼の女儀も出生は京堀川の遊女の由。實や世上の詠に。猫には遊女が成るとやら承はつて候へば。何れを寵愛なさるゝもさして變らぬ儀と存じ。献上致し候と眞負つくつて言上ある。比企の買家はと出。扱々旁骨折て巧み出された事ながら。外の目からは出來過る。言ハ武將の御身にて是しきの御慰み。有まい儀とも申されず。其上朝比奈女房は。親判官が乙娘。若狭の局の妹を遊女など云ひ落し。猫の或ハ鎧のどて我君を嘲るハ。兩人共に反逆と睨んだ眼は違ふまい。返答聞かんと罵れば。重忠カラと笑ひ。ナニ我々が逆心とは。古秦の趙高が鹿をハ馬と争ひて。世を傾けし故事なんぞ聞はつ、



ての咎めよな。うれば悪人此方は忠義の鎖籠人の鼠を取らする猫なるぞ。随分用心あられいと空囁いて在します。頼家甚立腹あり。詞 ヤア推参なり汝等。諫は臣の道なれと若年者と侮つて嘲弄するまそ奇怪なり。二度對面叶はぬを其所立去れと宣へば。兩人聲を打揃へナフ御勘氣とは曲もあや。主君は二代我々父子。元暦治承の昔より建仁正治の當代迄身ハ泰山に倚懸り。命ハ鷲毛に等くて奉公怠る事なければ。追放たるゝ覺へなし。詞 諫の詞ハ苦けれども。身を助くるの良薬にて諂ふ辨は甘けれども。命を滅す毒草とは夢聊かも御存じなく。忠臣は遠ざけられ佞媚の族が勸めに寄り。翠庭の柳腰きんてくゑんりの花の顔。酒宴妓樂にお目眩み心を奪はれ給ふ事。ね笑止や情なや。三仁去つて般空しく。詞 范増死して楚は亡びし兩人蟄居致しなば。土屋北條土肥岡崎新田佐々木千葉上總。其外名有る諸大名頼みなき世を憤ほり。皆分國に引籠り讒臣奸人時を得て。詞 必す蕭牆より忽ち起つて萬代の。源氏のね家の恥辱となり。君萬歳のお命も。亡し給はん淺間しやと。秩父ハ袖に取付ば。和田ハ腕を打敲き諫言實に道理なり頼家左右の返答なく。扣ふる袖を振放ち殿中深く入り給ふ。二人は溜息ほつと次ぎ。實に良禽は木を擇ぶ。賢人の師を擇ぶ愚將と知らで今日迄仕へし事の後悔をよ。廣言憎しと聞き給ひ重

ねて討手給ひらば。潔よく腹切て臣下の手本にせんものと。悄悄と立歸らる。近習の者共聲々に。詞 ヤア後れたる人々かな。君を恨みて腹切るに所撰みは無い筈ぞ。所望くと取捲てスハ事こそと見る所に。重保朝比奈龍象の涙を蹴立る如くにて。一文字に駈來り大太刀振て立懸れば。詞にも似ず我一と逃て御殿に走り入る。詞 義秀猶も怒りをなし。しや物々し愚人めら帝釋天の威を藉て喜見城に籠るとも。朝比奈手くせの門破り捨り殺して捨つべしと。兩人御殿へ駈入るを和田も秩父も取付て。詞 ヤレ逸まるあ若者共。三度諫めて容られねば身を退くハ君子の道。首陽の蹊に世を凌ぎ渭濱に釣を樂まば鎌倉斗に日は照るまい。御殿へ向ふて慮外すあヤレ待てと引留る。秩父ハ伯夷が仁を説き和田ハ四皓が義を守る。重保朝比奈兩人は。かうせいよしが刺客の猛きを寫す虎の蹤。獅の吠るが如くにて往つ戻りつ飛返り。踊り狂ひし有様ハ須彌勒海を跨りし。りやうはくこうの勢も是にはいかで勝らんと。見る人聞人今の世に語りて共に興じける。

第三

唐土に優りし物は何々ぞ。京羽二重と大名のお道具持の造り罷。揃ふてと徒士の衆。手を振

る腰振る鳥毛振る。鶴が岡への御参詣先駈後乗きらめきて。光りを三の大鳥居さんかつらの松  
 かげに。御乗物を昇据れば乳人たはした立かゝり。高麗の飴仙家の蜜龍眼肉をもてかしづく。  
 御果報日本一幡君實生を出そはききや。若狭の局當年は厄年とぞ白重。薄紅梅の袖匂ふ柳  
 が枝に初櫻。咲せて見たる景色なり。後乘滑川四五右衛門二重の腰も奉公の。七重に折りて若  
 君の御前にひざまづき。殿御意屈成れたか。もふ追付で御坐るぞや。八幡様へも厄神へも。  
 手々を合せての、様とれつしやると早今の間に。れ背がによんにと仰ます。取わけて今日  
 は。放下もあり能もあり。くも舞あやをり八ちやうがね。鳥追萬歳大黒舞見せましたならてつ  
 きりと。館へ往のとはれつしやるまい。久しい事じやかゝ様の腰がな痛みましと。箆めが膝  
 へ乗せませふた出なされと愛すれば。同 イイヤ此處が面白い。いつもの様な切合しよ。箆も  
 人形を持て出い早よふと大將のわやくは心廣かりし。同 サア切合も仕ませふが。あれ  
 わそこを見さつしやれ。西から南へ押渡して漫々たる大海も。をつくるめて若殿のお泉水も同じ  
 事。鯛も有り海老も有り鯉節の生たのが。ひちとと鱈をする。連立て往て見せましよと紛ら  
 かせ共イヤ〜。同 おれは切合〜と。れ膝元なる辨慶人形 鉞持てはげ頭。こつりと鳴  
 れバ。アイタシコ。同 八幡堪忍ならないと。心得て持懐中人形巴女が大長刀。同 エイヤツトウ  
 トウエイヤツトウ。如何はしけん若君の人形碎け落ければ。同 かゝ様大事の辨慶を箆めが此様  
 に仕をつたど。むづがり給へば母君や女房達は入かはり。賺せどきかぬ〜とて泣入〜仕給  
 ふに。うろく涙に四五右衛門。同 若君堪へて下さりませ。今年ちやうと四十年。御奉公仕れ  
 どか様の不覺仕らぬ。正八幡も照覽あれ。たくんでの致さぬと。幼稚人に謔言も實体過て笑け  
 れ

鳥追 大黒舞

やんら目出たややんら樂しや。千町や万町の鳥追の参つ。福の神を祝ひこめしらげもよねや  
 ろ。ましらげもよねやろ。よねやろがじやうには福と徳と参つて。宿かろと申。宿借候は、殿  
 も榮へ候。我身も榮へ候。大黒舞を見さいも福大黒見さいな大黒〜。大黒と申は大唐の人な  
 らぞ。天竺の人ならず。住吉の角の方に炭屋を仕て居られた。夫で色が黒いはやんら樂しやや  
 んら目出たや。大黒舞を見さいな。福大黒を見さいな誰人の誰やろ。左大臣に右大臣。關白殿  
 のれ手かけじや大黒と申〜。角前髪の昔より夜這好なお人で。あちらの角でもちとこ

く。こちらの角でもちよま〜。角々でちよこるとて。炭滑にけつまづいて夫でお色が黒いは。詞 コレ大黒舞。とつと、彼方へ退てたも。鳥追歌の邪魔になる。ホ、〜多めたり〜。女の口から鳥追どのいか成君が鳥追ぞ。色の黒いがお好なら大黒舞も相伴せふ。ハ、〜く〜有様がわしや傾城じやが。様子が有て此通り今日鳥追の水上じや。ハアいはれを聞ば面白や。身共とても浪人者。妹の傾城に何卒巡り逢ん爲。大黒の今ふきじや。あんまり退た中でもない。なんと一所に行まいか。成程〜ろふしませ。さあ大黒舞やらつしやれ。先こなたから謠はつしやれ。やんら目出たややんら樂しや。詞 四五右衛門聲をかけ。コリヤ〜鳥追大黒舞。をい所へ参つた故和子の御機嫌直されて。皺腹一ツ助かつた。とても事に今一節お慰め申てくれ。コレハ〜有難いた詞を聞ます。お望みと有からは傾城の身の上を。鳥追にして謠ひましよ。やんら目出たややんら樂しや。千兩や萬兩の身請客が参つた。比企の家に祝ひ米姉御もよねやろ。妹御もよねやろよねやろがやうに、慾と悪と巧んで嫁らそとやす。よめらしゆはば比企も榮へゆ。我身も榮へゆ。嫁らす處とは誰人の誰やろ。和田殿に秩父殿。大將軍のれ手かけじや。御代の盛りと、若殿の御祝。哥や心に懸りけん若狭の局顔さし出し。よ

く〜見れば都にて同じ流れを勤免たる。妹女郎の八千代なり。何故斯る身の上と。問ひ度も有り淺茅も又。語りたさに來れ共。人目を忍ぶ粹同士の顔と顔とに知せあふ。夫さへ有に大黒舞。面引取れば是はそも兄の花垣伊織の介。あら懐かしや戀しやと飛付程に思へ共。若君の爲比企殿の身の仇どころ成べきと。急來る胸を押鎮め。詞 ヤイそこな大黒舞。おぬしは鹿相な。當り障りに成ことを必らず云ふな謠ふなど。詞はさげて心には載きまする兄様と知らせま欲しお風情なり。四五右衛門氣もつかず。詞 大黒舞も何なりと面白ふ申ませ。伊織はじつと會釋して然らば拙者も身の上を。お慰みに申ましよ。大黒〜ならず者の大黒。大黒と申は天竺の人でなし。上京の素浪人ちゃんが一せんあらがねの。櫛で打でも金は出せ乗るべき俵持ざれば。こめに妹を代なしてろれで親子暮した。さつても哀れな大黒。左れば果報は知れぬ物米に賣た妹が。此國の殿様の奥様になつたげな。詞 左らば無心を云ふと。旅立の大黒さつてもむさゝ大黒。大黒舞を見さいなむさ大黒見さいな。大黒の能には一チに妹が見ぬ顔で。二に悪根性で三に左あらぬ面をして。四ツよい物着張つて。五ツいつかい氣色で六ツむさいげしんで。七ツ何がおしうて。八ツ厄介嫌ひれる。九ツ此方を得向ひで。十チで吐胸つきをつた。扱も惚

大黒様子知らねば四五右衛門肩身ゆすりて打領づき。嘸く腹が立申ろ。扱々々々妹めは。言語同断悪くいめ郎。當分榮花に誇る共何の將來善んべい。そんな不義やつ此方から勘當をぶち切て。若い花じや立身の思案しがくを仕召されい。近頃悔づりがましいが御合力申とて。腰をさぐつて百の錢轉りと傍へ投やれば。ハット計りに押戴だき冥加に余りし御合力。逆もの事に此錢を。妹が面へ投たいと恨みを含む目の内に。余る涙ぞ道理成。若狭も今は人目にも余る難儀の色見へて四五右衛門に差向ひ。其方はよふぞ氣が付た。貫ふ者より妹が陰で聞たら嬉しかろ。イエいかな事。悦ぶ事は扱儀で戯けた老爺と笑ひましよ。ハテナふそふは云はぬ物。他人の目にさへ淺間しき見る影もなき成形。妹は身にも命にも替へて苦しう思ふらん。左れ共若しは國の爲家の爲又子孫の爲。三ツを一ツにからめたる切ない義理の有故に一人の兄に憂い共。犬畜生と云はれても。名乗らぬ妹が心かど他人の我身に引當て。思ひやるさへ魂も。消ゆる斗に悲しやと。余所目は余所の涙川。沈むは頓て我身なり。取亂しては叶はじと。形ちを作り居直りて。よし無き事に暇取てかみや晩しと待給らん。鳥追ひ斗りは若君のお伽に屋形へ召連ん。大黒舞は立歸れと興の戸はたと鎖給へば。ソレお乗物やりませい。ハット答

て行列の足もしとく過行バ。伊織の介大音上げ。若狭の局よつく開け。きはは兄には成まぬかたつた一言人知れず。問いで叶えぬと有て。形ちを窺し様を替へ。漸々巡り遇たるぞ。一夜の屋形へ連れて行け若狭の局妹と。人目も云はず呼吼れば。笠原太郎駈戻り何とも成らぬ横道者。若狭の局の御事ハ比企の判官能員とて。た大名の親里あり。何者に頼まれて斯る慮外を吐出す。白狀する迄家來共うれ打敵けと罵しれバ。ヤア鹿忽ばし成さるゝな。容ころ徹縁致したれ心は花垣伊織の介。棒の先でも當たらば八幡堪忍致さぬと。反打かけて氣色する。笠原元より武骨者。瘦浪人の腕ずんばいたゝき落せと下知せられ。追取巻て打けるハ笑止と云ふも余りあり。若狭の局身を問き。ヤレ鹿忽すな早まるな。廣い世界に同じ名の有まい物でなき物を堪へて往せ浪人も。むしをよしなせて逃ていね。ヤレ逃げ逃せと聲と上げ。あせり給へと心なき雜人原は聞入ず。起れば敲き立ハ打。落花狼藉花垣とどつと笑ふて入にけり。無慘やな伊織の介。聲を斗りに泣叫び。エ、胴慾者妹め。此体を見て能も能も。打捨てはかへるよな。命の内に此恨み。をのれ晴さで置ふかと。すてく立て行袖や緞子もちぎれ頭巾さへ。行衛も知ぬ大黒舞。打出の小槌うつとなき身の行末ころ「おぼつかな。玉しげる家に住身は物思ひ。知